

生活文化

VOL. 2



生活文化同人機関誌

生活文化 第2号

1997.8



昨日・今日・明日	吉田 桂二	2
トークショー対談「無住の集落となった大平宿」		22
大平民家について語る・その後半「新築の大平民家」		60
第一分科会「住まいと望ましい住まいの在り方について」		64
第二分科会「伝統技術を明日にいかす」		66
第三分科会「環境と共に棲む家」		68
第四分科会「生活の道具をつくる」		71
民家芝居「風のレジェンド」ができるまで 内藤 敬介		73
南会津「山村道場」問題レポート		
農村復興の学舎再生へー	鈴木 喜一	77
建築の〈+〉〈-〉カラマツを美しく見せるために	赤桐 雅子	89
東京湾ビオトープパーク	長谷川順持	98
住人の住まい	葉山 祇園	104
書評	益子 昇	109
会員のページ	岡部 知子	112
同人規約		114
編集後記		116

昨日・今日・明日

1996～97.4

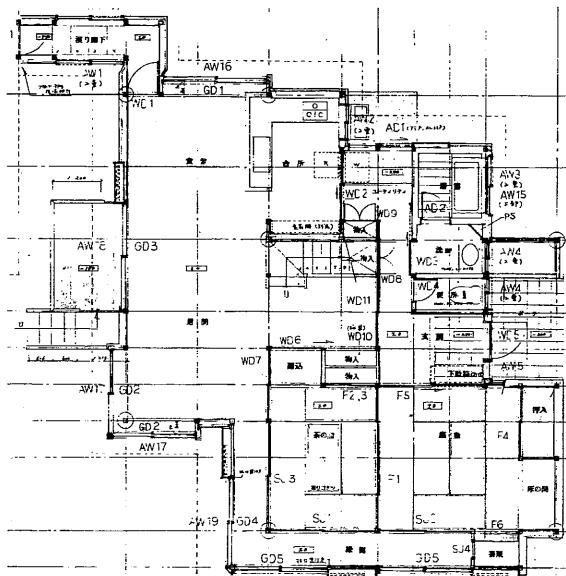
吉田桂二

今は4月、この機関誌が出るのは夏になりそうなので、書いたことにニュース性は乏しいと思うし、予想通りになっていないこともありそうなので、内心忸怩たる思いがないでもないが、私の去年から今日までの記録という意味で、気楽に読んでいただければよいと思う。

住まいづくりのいくつかの仕事

この前の機関誌の「昨日・今日・明日」で紹介した、横須賀の日本ナショナルトラストの米山さんの家は、今年の「住宅建築」の2月号に載せたので、詳細は省くけれども、この家は大変な過密地帯の狭隠な立地条件のところに建っている。「住建」の2月号は、この種の条件下の家を集めた特集なのである。

これもこの前の機関誌で、工事中ないしこれから工事として紹介した、横浜の河原さんの家と、平塚の藤井さんの家が完成している。前者は市街化調整区域に建てた家だから、敷地はめっぽう広い。河原さんはそのあたりの旧家であり、市の職員で、この家が建つ頃定年退職された。家族構成が複雑で、かなり大きな家だが旧宅からの増築、ご長男が早稲田の建築科を卒業され、ゼネコンに就職されたばかり、家



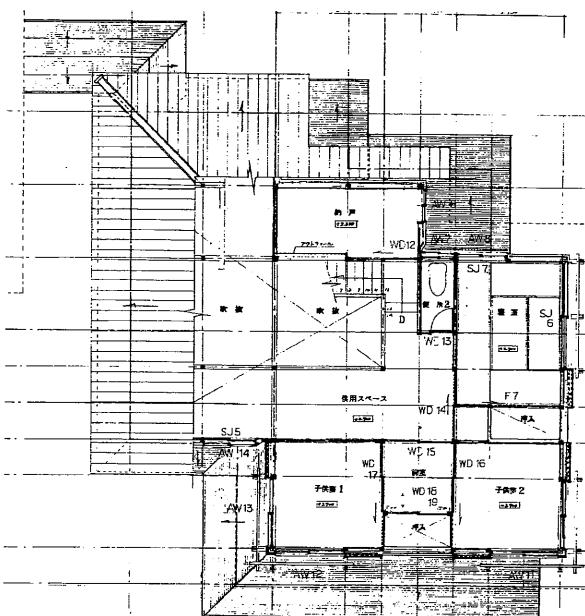
河原さんの家 1階

族構成は変動期にさしかかっている家族だ。

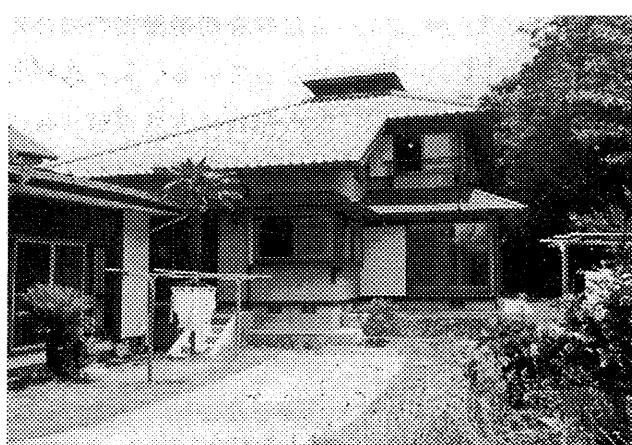
この家はP A C工法(パッシブソーラーエアサイクルシステム)で、方形屋根を組み合わせた形、内部は吹き抜けが大きく中間階もあるという複雑な構成、私の事務所を退職した長谷川君の最後の担当作品になったが、工事管理は佐藤君が引き継いで担当した。河原さんは大変な慎重居士なので、家が完成してもしばらくは家族の誰にも使わせず、一人新築の家を毎日眺めて楽しんでいたらしい。

藤井さんの方は若い核家族で幼い子供が2人、家を建てて希望に満ちた生

活を始めるのに理想の家族であった。しかし資金は十分とはいえない。工事はご主人の親の計らいで、山北の大工さんが担当したが、手直し不能の間違いがあったりして、設計監理を担当した松本君は、いつもこぼしてばかりいた。しかし建主にとっては嬉しい家になった。この家の空間構成は、若い家族の生活に即した、ほとんど一室空間とでもいってよい、平面的、立体的な広がりのある空間になっている。入居しても塀を造る資金はもうなく、平塚市は生垣に補助金

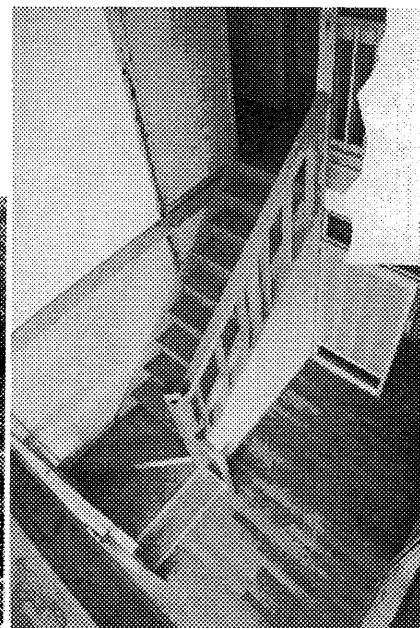


河原さんの家 2階



河原さんの家

外観



吹抜

を出していて、自分でやれば只ができるので、昨年のゴールデンウィークには額に汗して自作したという。この家はごく最近出版された彰国社の単行本、「実践・木造住宅のディテール丸谷博男編著」に詳細が載っているので、見ていただきたい。

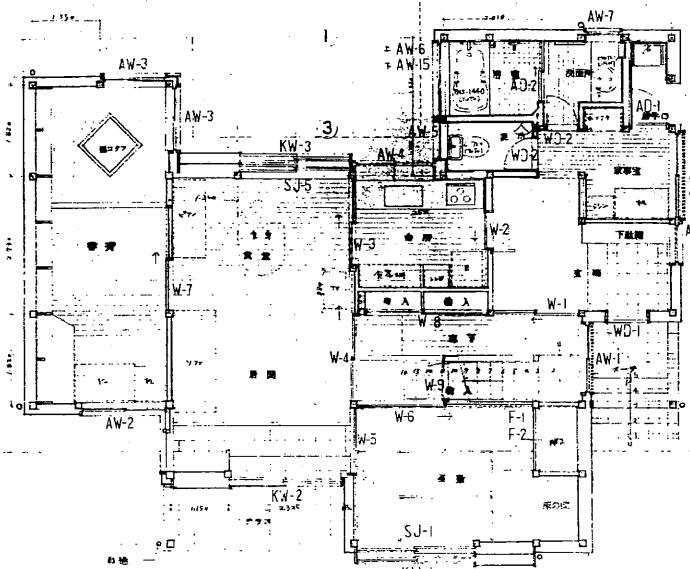
他に完成した住宅としては、藤沢の竹内さんの家がある。住んでいるのは、教職を定年退職されたご主人と奥さんの二人、増築を重ねて変になってしまった家を取り壊しての新築であった。ご長男は高校生の時に亡くなられたと聞く。その悲しみはまだ続いているように見えた。長女の方はインテリアデザイナーで最近結婚して共働き、今は別居だが、いずれはこの家にくることも予想しての新築であった。

将来、この家でどんな生活があるかは予想できないので、各部にゆとりを持たせた広がり十分の家にした。中でもご主人の書斎はすこぶる広く、お持ちの書籍を西側の壁面全部の書棚に、デスクにワープロ、掘り炬燵のマージャンコーナーまである。これがこの家で始まるご主

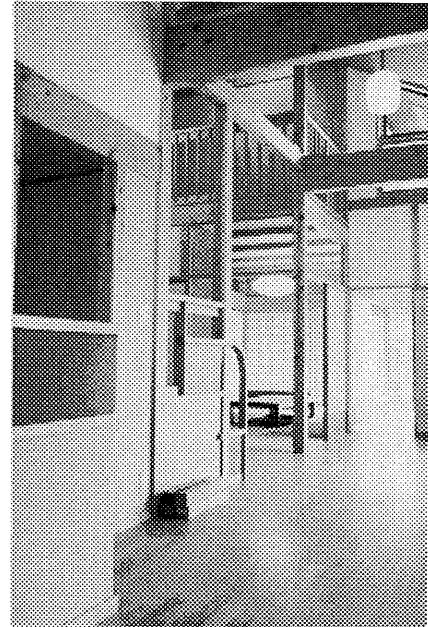
河原さんの家 居間

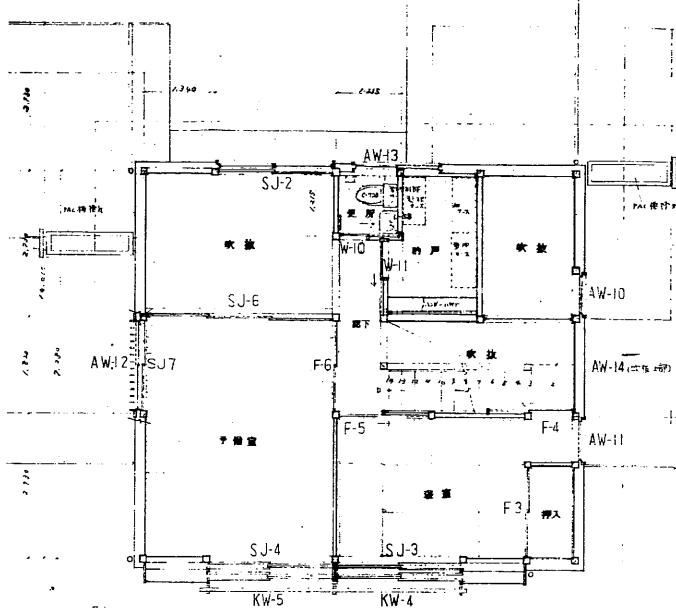
の生活の期待で、奥さんは半ば呆れつつも、にこやかにこの我が儘を容認していた。

この家もPAC構法、最も単純な切妻屋根の複合形になっている。私の事務所での担当は大久保君、彼は始めての単独担当の仕事で張り切って事に当った。この家ではまだ私の仕事が残っている。それは襖絵を描くこと。予期せぬことに、親御さんが転げ込んできたということで、待ったがかかるている。



竹内さんの家 1階



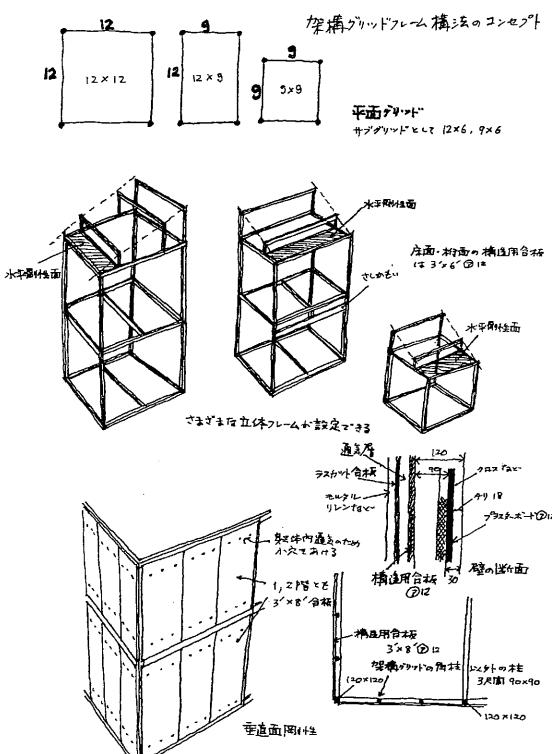


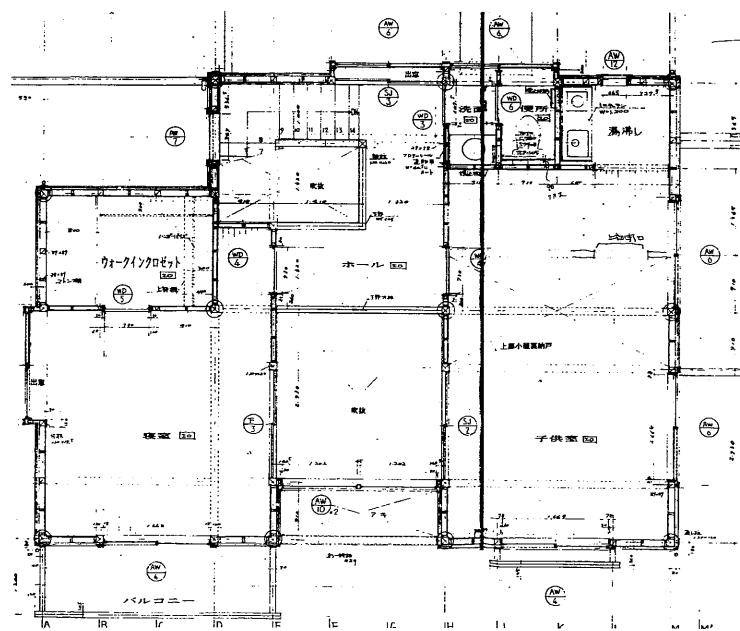
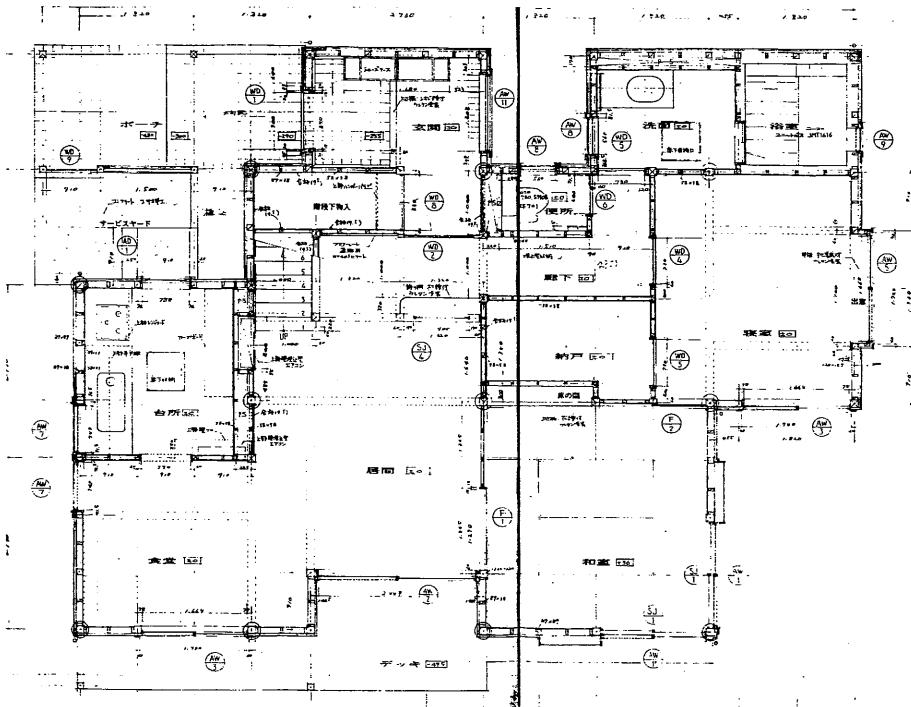
竹内さんの家 2階

するかが大きな問題となった。この規格住宅の事務所での担当は桜井君、分譲住宅の売れ行き不振の現状から、その後の計画はまだない。

現在工事中の住宅は二つ、一つは郡山の増子さんの家、地方銀行の支店長さんで、ご夫婦と親夫婦、子供2人、叔母さんの7人家族という賑やかな家、つい先達て、今お住まいの村の人達総出の上棟式があったばかりだ。もう一つは郡山に近い東村の農機具屋の鈴木さんの家、ご夫婦にお婆さん、子供2人家族で、敷地もめっぽう広いが、家も70坪に近い大きな家、これでもこの村では小さい方だという。上棟式は4月末に予定されている。事務所での担当は新井君と勝見さんである。

東急不動産の新商品、在来構法による規格住宅も1棟完成し、モデルハウスとして公開後、既に住み手が生活している。この家は「架構グリッドフレーム」と名付けた構法システムにより、構造材には落葉松の集成材を使って内部には露出、材の接合は金物、壁や屋根はパネルという仕様になっているが、仕上材には自然素材を極力使用している。予想されたことだが、現場では金物の露出にどう対処





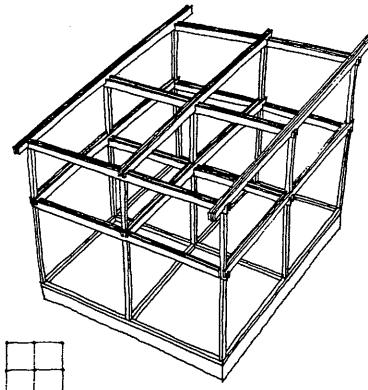
東急不動産規格住宅

「エコロ21住宅」の提唱とその展開

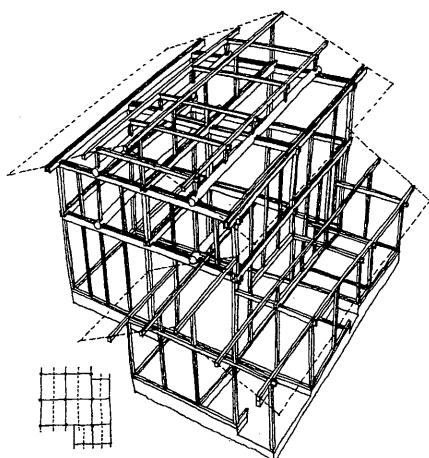
● 「エアサイクル産業」での展開とフランチャイズ組織の変化

以前に生活文化同人の松井君、宮越君、小林君、益子君達とグループを作つて行なつた、栃木県ウッドタウンプロジェクトは、実際の物は何も建てずに終わり、残念な結末になつてしまつた。それを何とかして実現したいものと思い、「エコロ21住宅」と名付けて広く提案することを考えた。

この住宅は、もちろん私の年來の主張である「広がり空間」の間取りを持つが、架構は国産の中目材、5寸角を柱、胴差、桁などの主材に使い、2間グリッドとかのような大グリッドで構成するフレームを「百年架構」として造る。この主材以外の材には3寸5分角を使い、これはサブだから取り替え可能とする。主要部分は総2階だが、これに差し掛けて1階を太らせることができ、これも取り替え可能とする。考え方としては、木造住宅は木の成長を考えると、少なくとも60年、百年は持たせたい。しかし百年も経てば生活は変わらはずなので、それに対応するには、どんな間取りの変化も受けこなすことのできる架構を用意すればよい。これに自然素材を主とした用材を加え、開口部には木製サッシを使用して、エコロジカルな家にするということで、これを「エコロ21住宅」と名付けたわけである。



百年架構



PAC工法で省エネルギー住宅を造る工務店を、フランチャイズ組織として統括している「エアサイクル産業」には、かなり以前から関わりがあり、その顧問でもあるので、ここで先ずその提案をした。PAC工法では軀体内空間の通気が必要なので、「エコロ21住宅」の横架材に合せ材を使うことを考えた。PAC工法はもちろん、エコロジーの思想と背反するものではない。

PACのメンバーに小林君を加え、モデル設計を叩き台にして、その仕様とコストが検討された。昨年末に出版された「これからのおエコロジー住宅」は、PAC工法を加えての「エコロ2

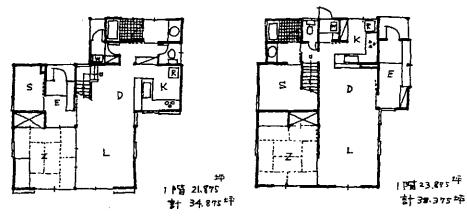
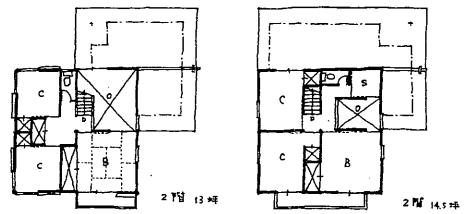
「1住宅」のPRを兼ねた内容が盛り込まれている。

「エアサイクル産業」では、これをフランチャイズ工務店のみならず、自社でも建てる考え、工事を直接受注する部門を新設したので、会社の規模は急激に拡大した。しかし、これには反作用があった。直接受注態勢というのは、彼等にとって競争相手でもあるわけで、それに不安を抱く工務店、日頃から「エアサイクル産業」の対応に疑念を持つ工務店など、フランチャイズ組織の中核をなす工務店の多くが袂を分かつ事態が現出した。

私の事務所を退社した松本君が、「エアサイクル産業」に片足入社したのはこの時、したがって出来立てホヤホヤの、寄せ集め社員でやらなければならないこの仕事に、唯一人のプロとして取り組まなければならない重責を彼は負っている。

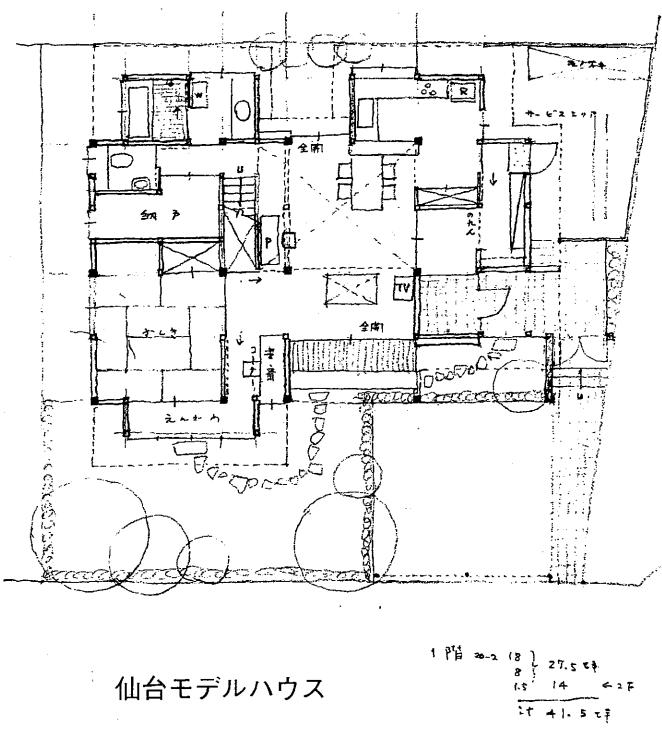
● 「エコロ21住宅」の各地への展開と連帶組織への萌芽

こんな事態ではあるが、「エコロ21住宅」はPACの専売であるわけではない。地域的なものを含めて、さまざまな展開があってよい。PACタイプもその一つなのである。フランチャイズ組織から離脱した「福島エアサイクル」が、仙台に出店するのを機会に「四季工房」と社名を変え、仙台に「エコロ21住宅」をモデルハウスとして建てることになり、現在、実施設計中である。この事務所での担当は大久保君、仙台は彼の故郷である。

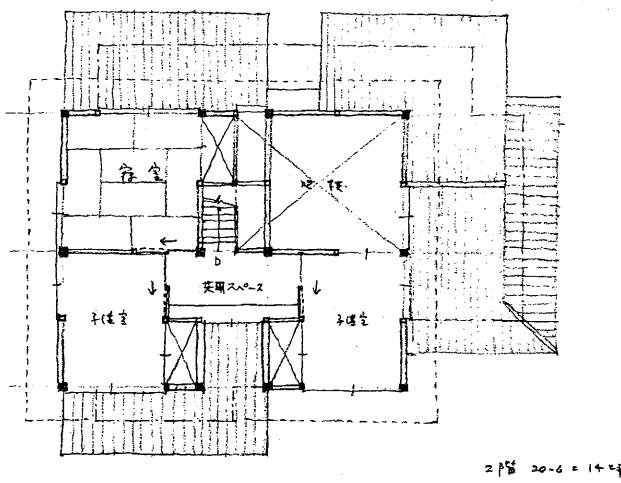


百年堅構による階取り2つ

L …… 屋根
D …… 廊下
C …… 収納室
Z …… 床敷
B …… 寝室
S …… 飯室
E …… 玄関
F …… 玄関
G …… 収納室
H …… 収納室
K …… 収納室
L …… 収納室
O …… 収納室



仙台モデルハウス

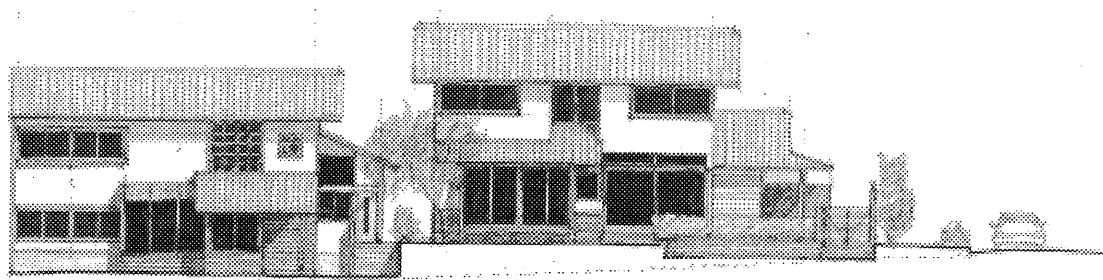


「これからエコロジー住宅」は、読者からの反響が意外にあり、とりわけ多いのが、年間百棟から2百棟程度を手掛ける地方工務店からの反響で、彼等はこれを手駒にして、大手住宅メーカーの圧力を跳ね返そうとしているよう思われた。

今一つ、話が進んでいるのは熊本の「新産住拓」、ここで「エコロ21住宅」のモデルハウスを建てるのことになった。

しかし、これを以後建ててゆくには、架構グリッドプランニングの技法を自家のものにしなければならぬ。したがって、学習する態勢も同時に必要となる。福島では「四季工房」を中心に4社の社員20名ほどを生徒にした、木造架構の学習会が開かれている。以前に「女性建築技術者の会」でやったのと同じ内容を教えていた。「新産住拓」でも、大分、鹿児島の工務店と共同して、3社で学習会を開く予定だ。

「エコロ21住宅」の反応は、その他の地方からもある。これに反応する地方工務店は、反住宅産業という点で、エコロジーに熱意を見せるところが多いのだ。自社で国産材の手当てとか、自然素材の建材を生産しているところもある。「エコロ21住宅」の反応を、こうしたエコロジカルな住まいづくりの運動として、拡大してゆくことができるなら、いずれは「エコロジー住宅協会」とでも呼んでよい上部構造を生むことが期待できる。そんな中に、ソーラーハウスを手掛けるグループ間の確執も解消させてゆきたいと思う。



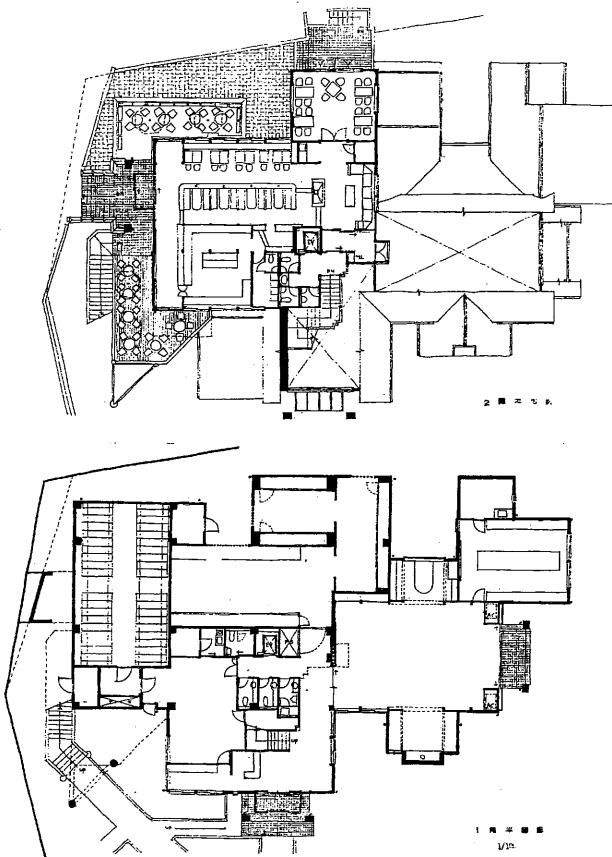
仙台モデルハウス（右）と事務棟

地域づくりに関わる仕事のあれこれ

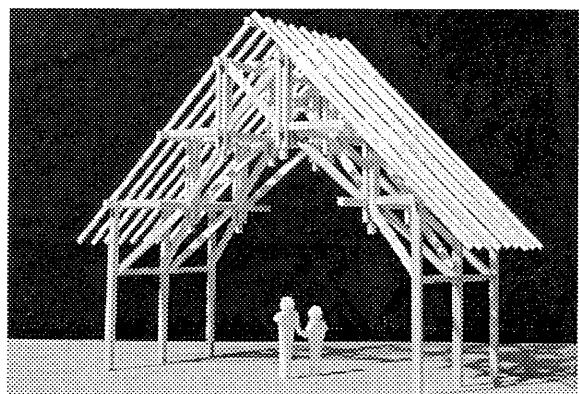
●古河では「わたらせ文学館」がこれから工事

古河の町づくりに関わってきて、かれこれ20年になる。この間、「古河歴史博物館」など、多くの仕事をしてきたが、町づくりに完成はなく、現在は、この前の機関誌で少しふれているが、作家の永井路子さんの蔵書などを収蔵物の中心とした「わたらせ文学館」－永井さんの希望で個人名を冠しない－を、「歴博」の隣地に建てるべく、ほぼ設計を完了した。内容は、多目的に使用する文学サロン、展示室、収蔵庫、講座室などの文学館の部分を1階に、2階をイタリアンレストランにして、このあたりに欠けていた施設として併設する。

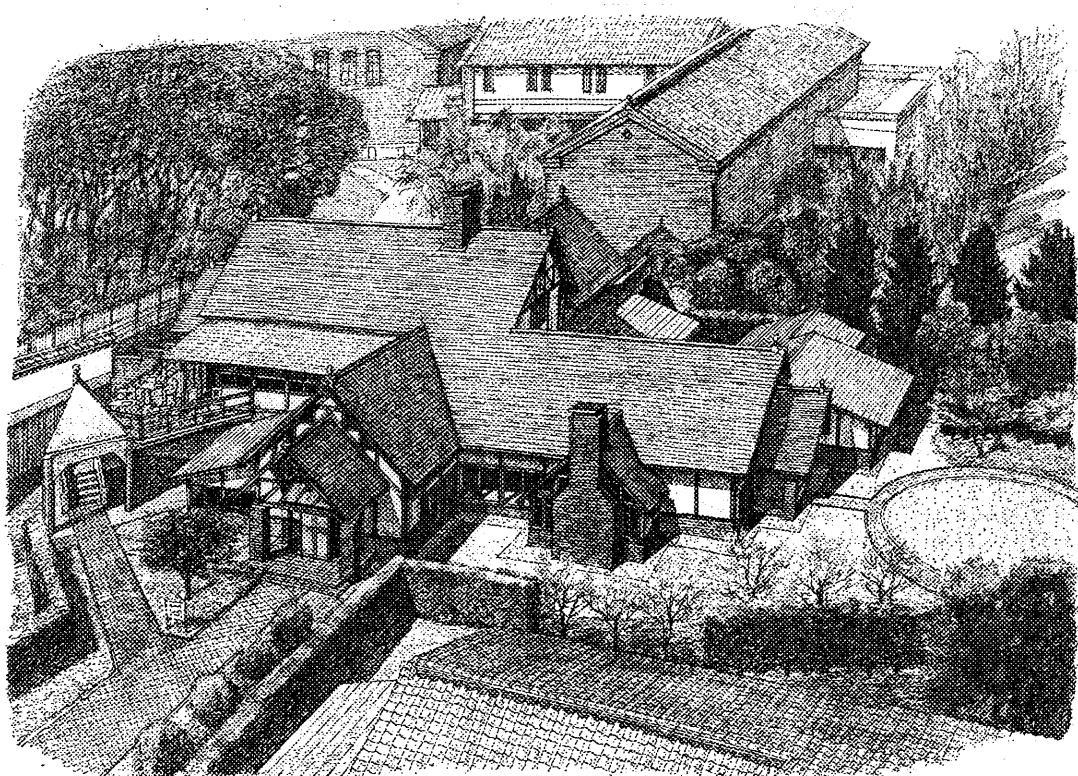
1階の展示室と収蔵庫は耐火にするためRC造とし、その上に木造の2階を乗せ、それより広くて平屋になる部分も木造にしている。文学サロンとレストランは大きく屋根内まで使った大空間にし、ここに「和風トラス」？とでもいうべきか、金物に依存しない架構を考えた。



わたらせ文学館



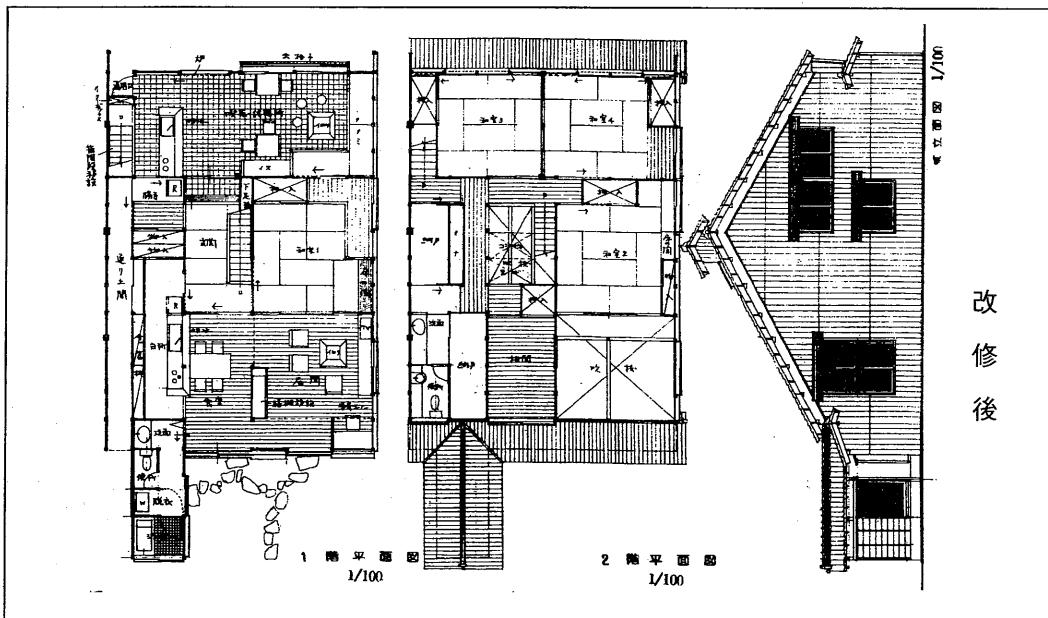
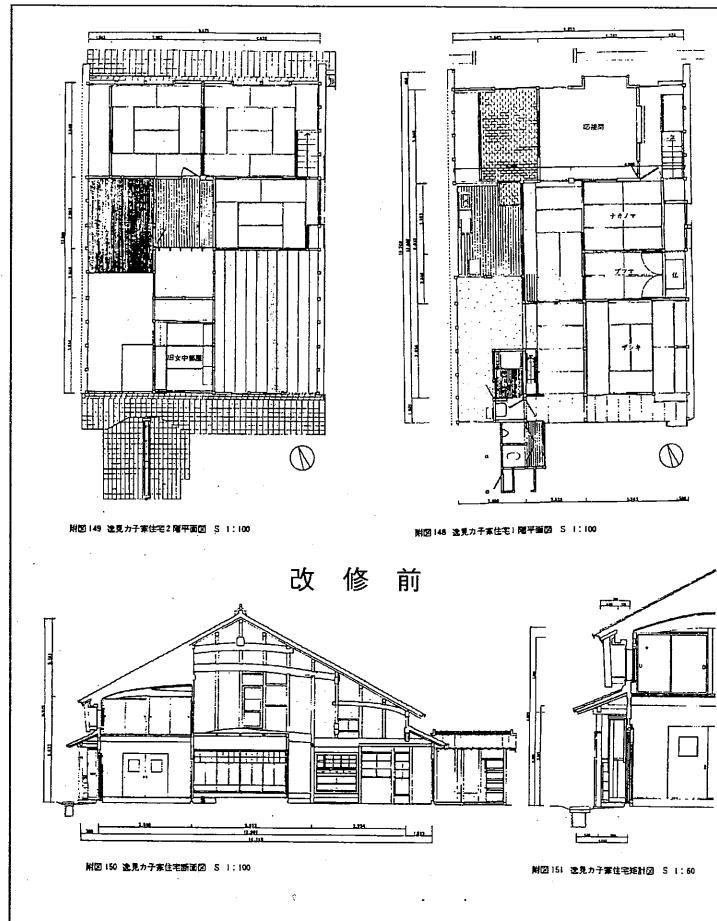
和風トラス

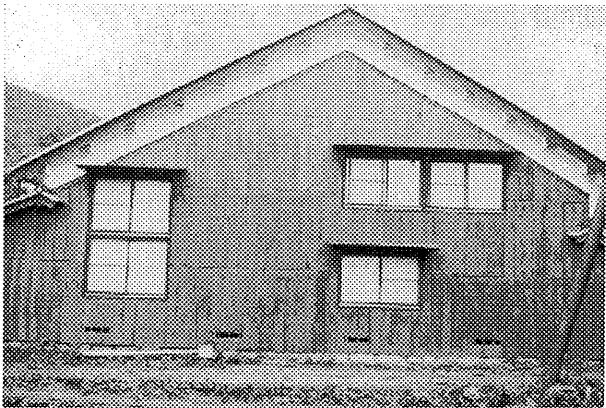


●熊川では「旧逸見家」が完成、「道の駅」を設計中

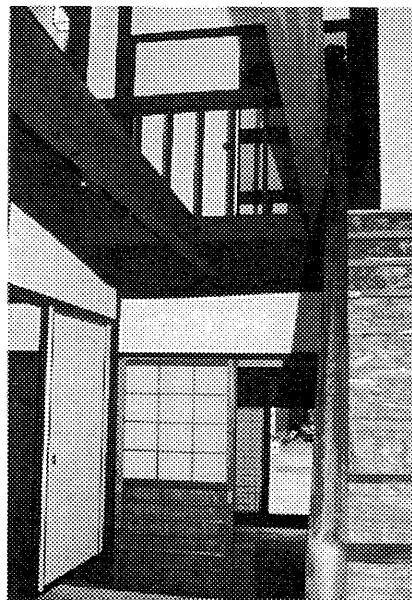
熊川では、重要伝統的建造物群保存地区になって始めての仕事として、これも前機関誌でふれた「旧逸見家」の保存改修工事が完了した。保存民家も現代生活の場として再生できるということのサンプルとしての保存改修で、いずれ「住建」誌上に発表するつもりだ。

この座敷の襖には、例によつて襖絵を描いてゐる。

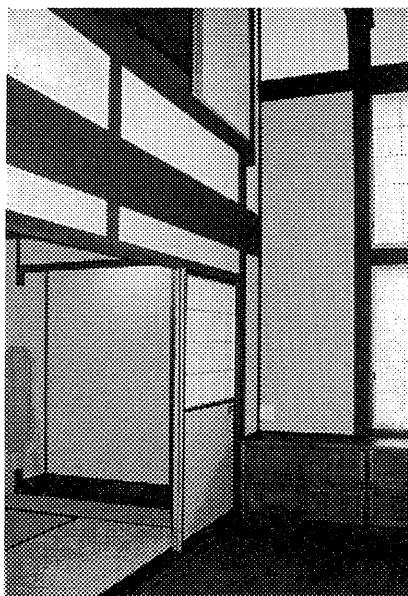




街 道 面



階 段 室



座敷と居間

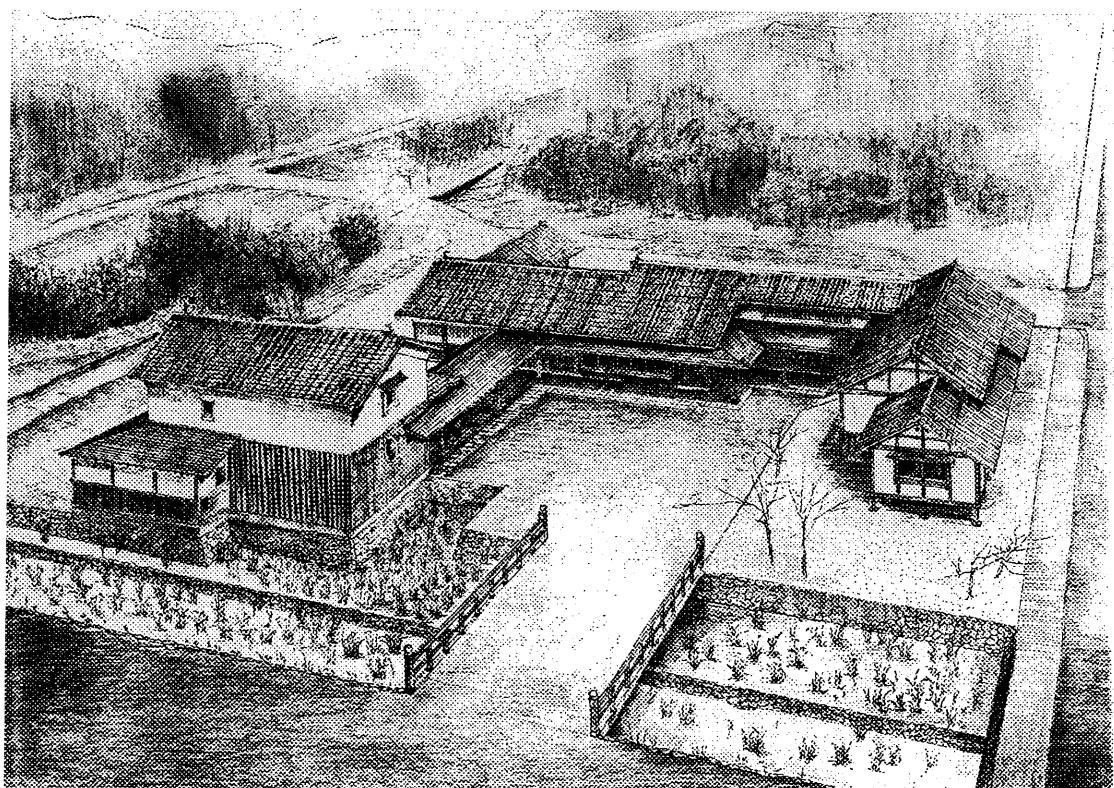
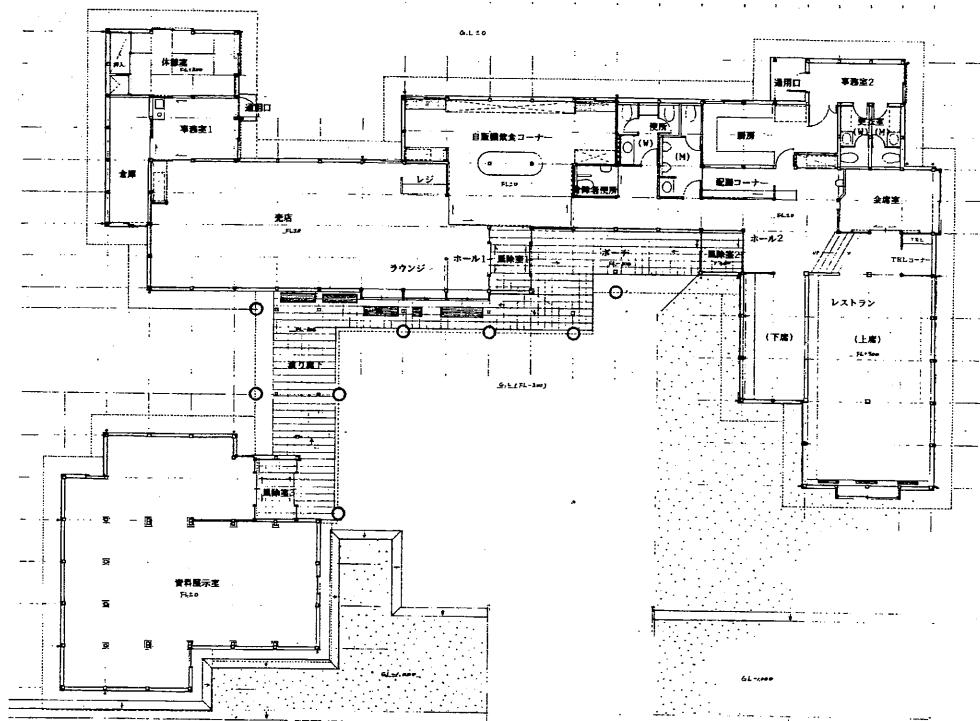


側 面

熊川では他に、宿場の入り口につくられる「道の駅」の設計が進行中だ。これは国道沿いに駐車場と休憩所とトイレが県の事業としてつくられ、これに隣接して、町がレストラン、物産品を売る店、「鯖街道」展示館を建てるもの。もちろん木造、平屋建の伸びやかな建物で、展示館だけが土蔵の姿をしている。

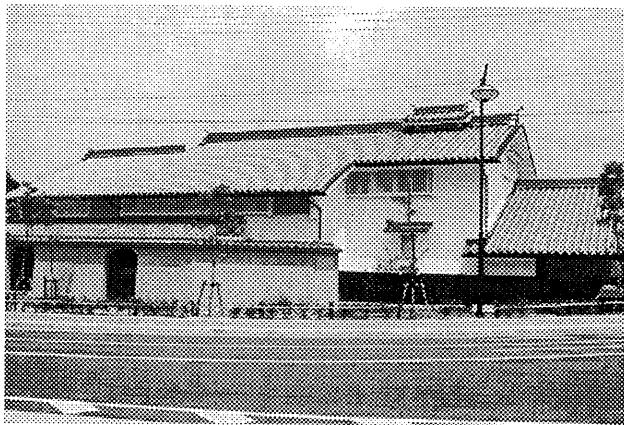
熊川ではまた、昭和初期の西洋館、旧役場が「宿場館」と命名された資料館に保存改修の工事中。これはこの5月の連休にオープンする。私は特に何もしていないが、館名のロゴを書いたので、その看板が木彫りで掲げられる。

熊川宿「道の駅」

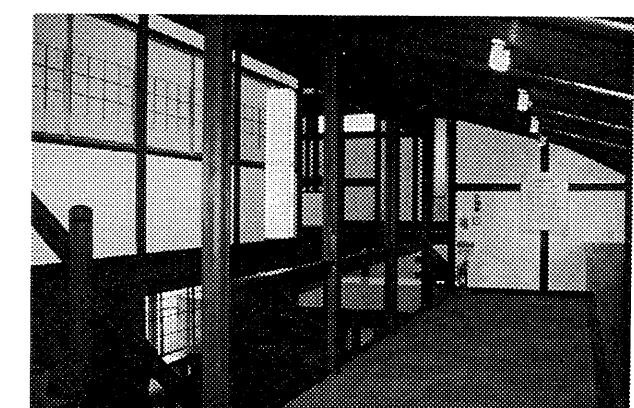
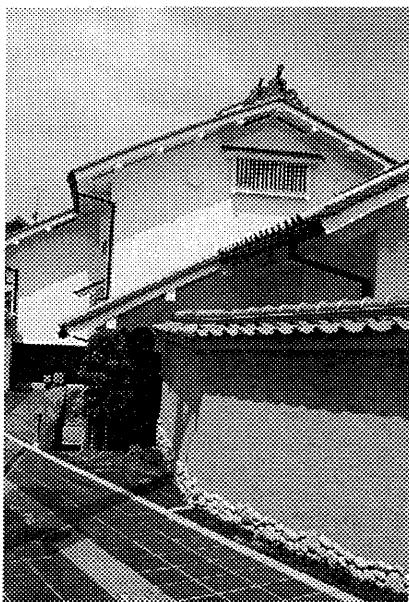


●奈良では「大乗院庭園文化館」が完成

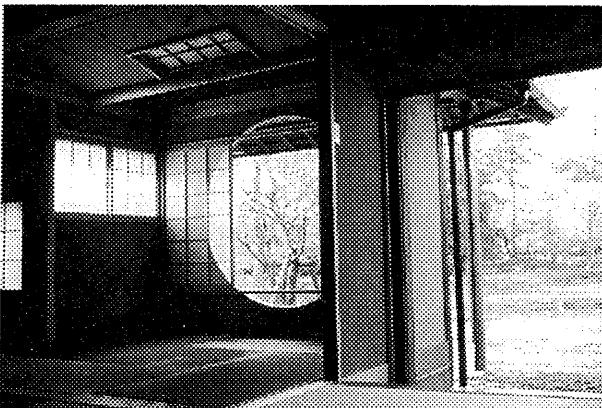
これも前機関誌で紹介した、奈良ホテルの南にある奈良で最古の庭園、大乗院庭園のゲートとして展示、休憩、会合などに使用する、日本ナショナルトラストのヘリテージセンター、「大乗院庭園文化館」が昨年3月竣工、一般公開されて1年になる。これほどに恵まれた敷地条件の仕事はそうない。この建物は奈良の名物建築になってきているようだ。



道路側外観



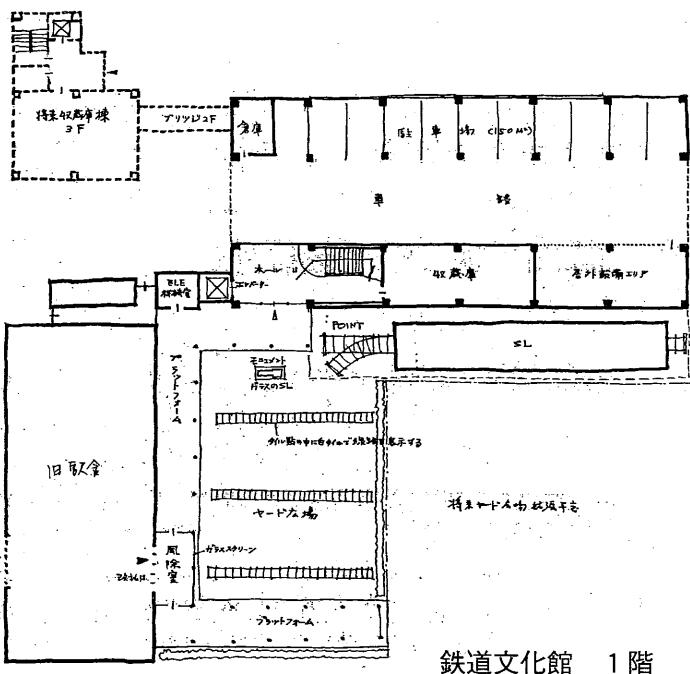
中2階展示室
◀ 玄関付近
吹抜と階段 ▶
▼ 庭に面した茶室



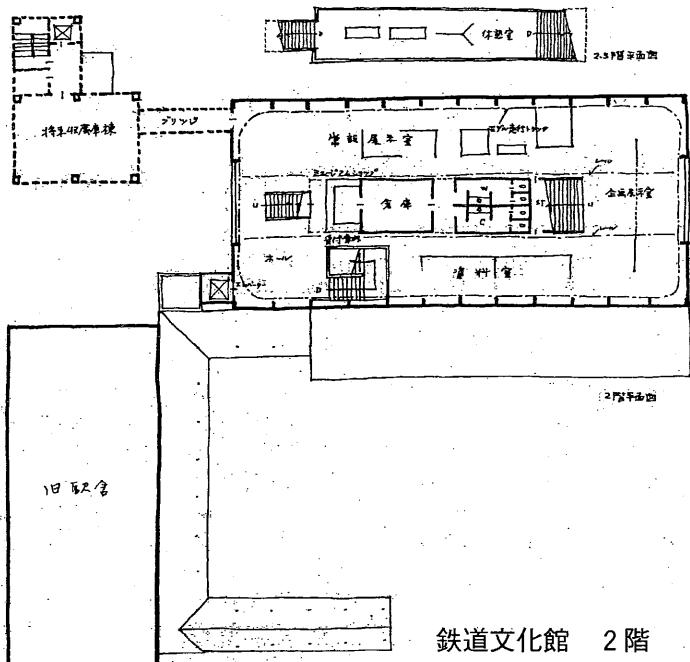
●長浜で「鉄道文化館」の計画が進行中

長浜は近年、町づくりが順調に進展し、「黒壁・ガラスの町」として知られるようになり、年間百万の人を集めている。しかし観光客がいるのは駅から東のみ、琵琶湖に面した西側は、城とホテル、日本で最古の駅舎が残っているが、閑散とした有様だ。この駅舎に関連づけて、日本ナショナルトラストのヘリテージセンターとして、「鉄道文化館」を造ろうという計画があり、その建設委員会の報告書が前年度末に提出された段階にある。

この建物の計画は1階と2階の壁までがRC造、2階屋根のみが木造だが、150坪ほどの大空間展示室を、柱なしで架構しようと考え、丸太を組んだアーチで造ることとした。この案もまた、できるかぎり金物は補助的に使うことを意図した構造だ。



鉄道文化館 1階



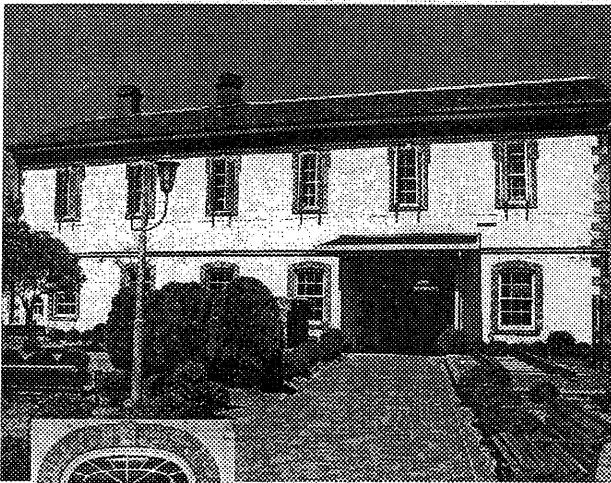
鉄道文化館 2階

老廃する日本最初のステーション

鉄道資料館

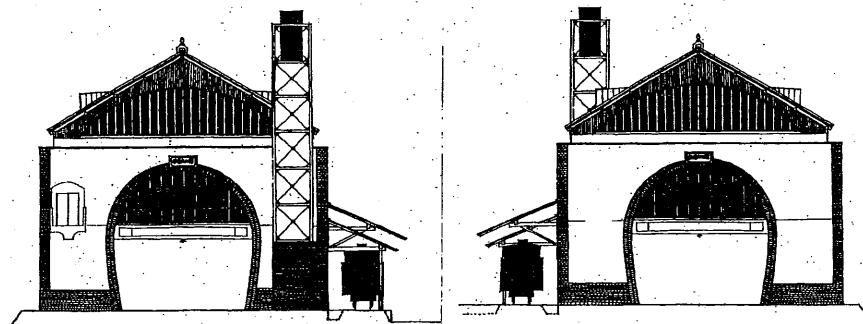
「日暮駅舎ものかたり」

名古屋市立鉄道資料館
〒460-0026 名古屋市千種区千種2丁目1番地
TEL 052-221-5051



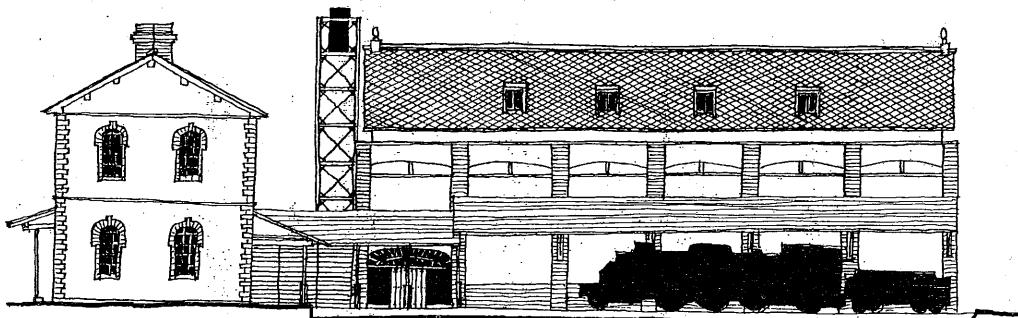
開業は明治政府が国鐵を発行した鉄道のまち

東海道線がまだ建設されていない明治15年、長浜一派対馬に開港免許が発されました。日本の最初と最も最初で船へんと森林は開港免許が開港を始めた鉄道のまちでした。当時の開港免許をもとにしてつくられたのがこの駅舎です。ごくうきじらしください。

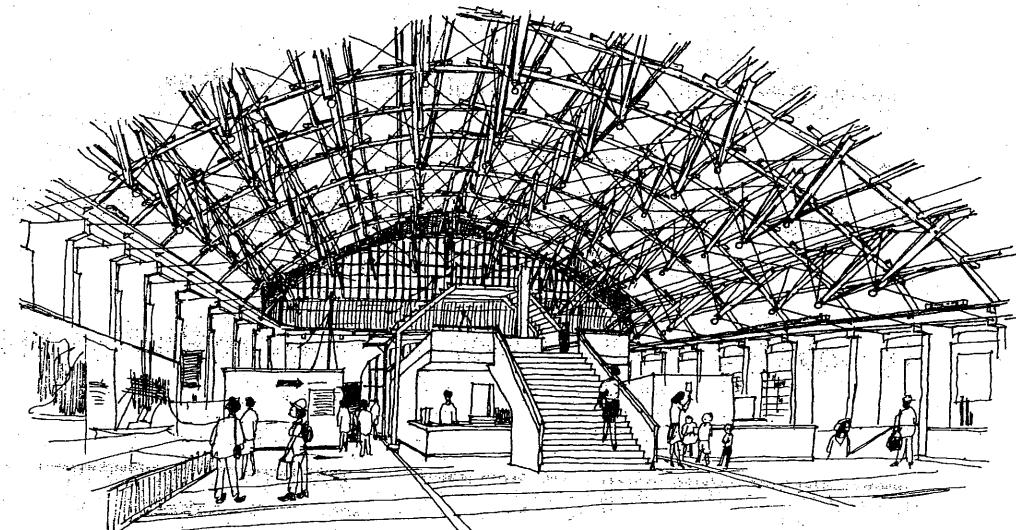
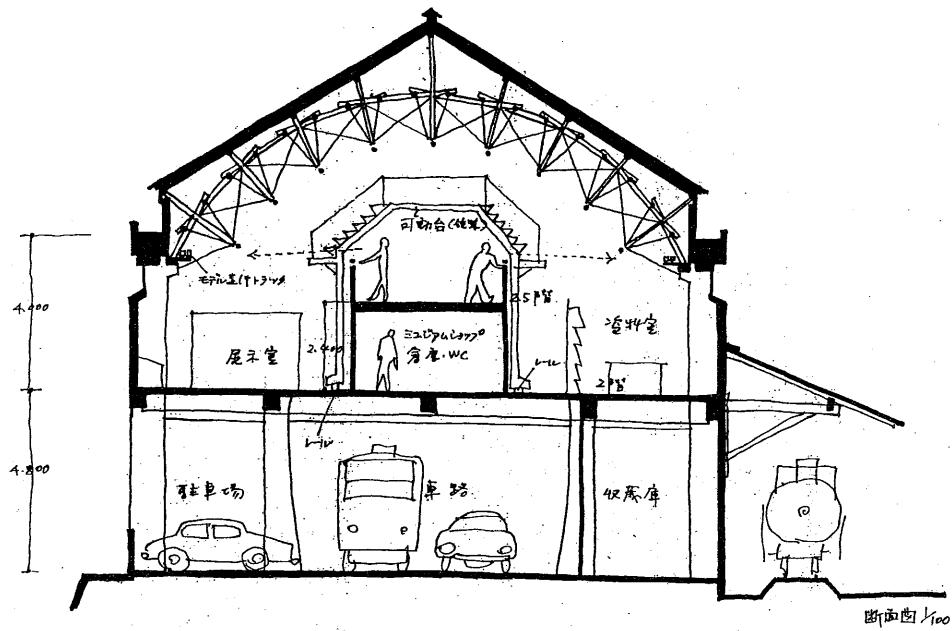


正面図

左立面図



車立面図



●東軽井沢ゴルフ倶楽部の一連の建物

ゴルフ場の施設を私が手掛けるというのは、かつてなかったことだが、自然破壊を最小限に止め、スポーツ施設という意味で最も原点に還る、自然素材を可能な限り使った健康な施設にしたい、という東軽井沢ゴルフ倶楽部のオーナーの意図を了解してのことである。クラブハウスのメインをなす空間が、中でも最も象徴的な空間と考え、「森のシンフォニー」をイメージする、丸太の林立する空間にしている。もちろん他の部分にも、合宿所

のような若者対象のドミトリ、管理センター、門となるゲートなどにも、木材を多用している。この仕事はこれから工事が始まる段階だ。

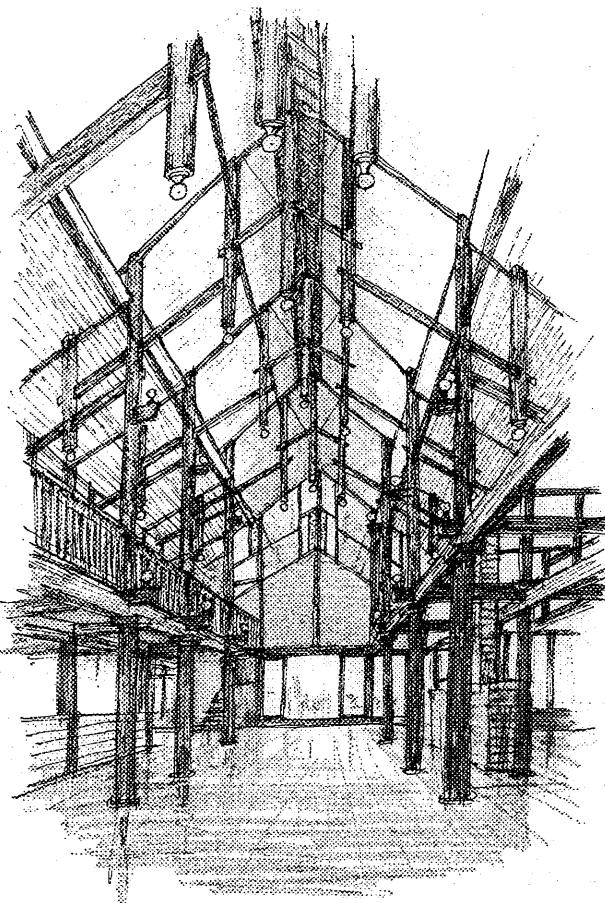
●丸岡町、一色町、内子町、大洲市、小国町などでの仕事

前の機関誌でふれたこと。丸岡町での「ふみの館」計画はまだ足踏み中というところ。一色町の離島、佐久島での民家再生施設、コミュニティ・ビジターセンター「べんてんさんろん」は今年度の離島振興補助金が確定、これから具体化に向けて歩き出すことになった。

内子町では、商店街である町内のメインストリートにあった「愛媛新聞社」が社屋を新築して移転し、この通りで最も壮大な民家である建物が空き家になった。この民家は重文「本芳我家」を建てた大工の仕事であるという。持ち主はこの際取り壊すというが、町が「待った」をかけている段階。5月には行って、再利用方法と保存改修の方法を立案提示する予定だ。大洲市では、昨年から相談を持ち掛けられていた「大洲の町づくりオリエンテーション」づくりが、今年度に実施の運びとなった。5月には内子の用事も兼ね、この町の仕事が発動することになる。小国町は「坂本善三美術館」の町、ここでは小国町「悠久プラン21」の手始めの事業、老人保健施設の設計を受注した段階。この仕事と、昨年立案提示した「筑後川周辺の町づくり計画」を発動させるための、町民集会があつて、4月22日に小国に行く予定だ。

●内村鑑三記念館を立案提示する

内村鑑三は、キリスト者として純度の高い「無教会」を標榜して実践した人として知られる。連合設計社には、これと志を同じくするキリスト者である高橋君がいて、そのため、内村鑑三が残した「聖書講堂」の脇に以前、書籍等を永久保存するための図書館を建てている。書籍の収集が増えて手狭になったので増築したいということになった。ならば用地



東軽井沢ゴルフクラブ

全体の整備も含めて、図書の収蔵と閲覧ラウンジを持つ、内村鑑三記念館にしてはどうか。それを立案提示している。

●鷹見邸茶室と泉石生誕碑

古河の鷹見泉石記念館の裏にある、私の設計で建てた泉石のご子孫の鷹見本雄さん宅の庭に、3畳台目の茶室、「妙得庵」を建てた。大工は同じ、古河一の川島さん、4月26日に生活文化同人の茶会をここで開く。昨年は第一小学校の北側の泉石誕生の地に、「鷹見泉石誕生の地碑」を立てた。碑の造形コンセプトは「文化の波濤」とした。

●新潟県工業技術研究所と加茂建具共同組合での仕事

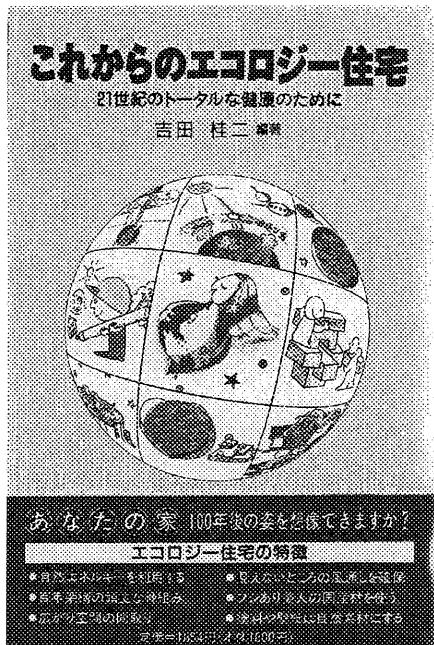
通産省の施設である新潟県工業技術研究所の依頼で、県産材利用の製品開発の委員を2年やり、その間に杉材を熱圧縮してつくる手摺と受け座をデザインした。これは現在、老人保健施設で取り付け中。また、加茂建具共同組合では、これも3年にわたる、高断熱障子の開発に協力、試験の結果は熱還流率1.78という好結果を得た。

著書・個展・受賞など

●著 書

昨年末に「ほたる出版」から「これからのおエコロジー住宅」を出版した。この本は共著で、同人メンバーの小林一元君と田島美沙子さんを含む5人で書いた本。私はこの本で「百年架構」の提案をしている。

今年になって出た本は、東京堂出版の「旅の絵本・地中海・町並み紀行」で、これは絵を楽しむ本である。



今、出版直前の状態にあるのは、講談社の「からだによい家・100の知恵」5月始めには店頭に出る予定。共著のため足踏み状態なのは、同人メンバーの日影君、宮越君、鈴木さんと4人の共著、彰国社の「快適間取りのつくり方」の姉妹本「健康な住まいのつくり方」がある。

これからの著作は、出版各社から持ち込まれている企画が8冊ほどある。

●個 展

昨年の11月に、"歩"ギャラリーでの恒例の個展は、大平宿245年の歴史「峠の村のものがたり」紙芝居の原画と、「坂のある町12景」と題した書き下ろしの絵を展示した。共に水墨着彩の絵。

今年の3月には、日本橋の丸善ギャラリーで「旅の絵本・地中海・町並み紀行」の原画展を開催した。

●受 賞

昨年から今年の現在にかけて4つの受賞があった。

「坂本善三美術館」が第8回くまもと景観賞

「古河歴史博物館」が第5回公共建築賞、最優秀賞

「坂本善三美術館」が木造振興熊本県奨励賞

「大乗院庭園文化館」が奈良県景観調和デザイン賞、知事賞

トークショー対談 「無住の集落となつた大平宿」

本多勝一 VS 吉田桂二 司会：小林一元

司会：お二方の紹介を簡単に私の知る範囲でさせていただきます。私事で恐縮ですが、私が勝手に決めているんですけど、師匠が二人おりまして、建築の師匠はここにいらっしゃる吉田さんです。吉田桂二さんの事務所に勤めているときに事務所に本多



さんの「貧困なる精神」という本がありまして、事務所の本棚にあったのを読ませていただいて以来、特に十数年前「殺す側の論理、殺される側の論理」を読ませていただいてから、(知らず知らずのうちに善意でありながら自分がいつの間にか「殺す側」にいるんですが) 本多さんをもう一人の師匠ということで私が勝手に思いこんでいます。本多さんは現在朝日新聞の「週刊金曜日」という週刊誌の編集長を務めていらっしゃいます。そちらの方も私は創刊号から読ませていただいています。もう一方の師匠は吉田桂二さん。大平建築宿の主催者でもある生活文化同人の代表でもあります。ご存じのように町並みの保存・改修について長いこと関わって今回こういう形であるのですけども、うかがうところによると吉田先生が大平に関わるきっかけになったのも本多さんに関わりがあるそうです。そういうわけでお二人の対談を大変楽しみにして参りました。簡単ですがお二人の紹介を終わらせていただきます。

吉田：あの、僕が大平に来るようになったのは、昭和49年頃ではないかと思うんです。ですからもうかれこれ何年ぐらいになりますか。そうね20年近くになるんです。私が大平に来るようになったきっかけは本多さんに連れてきてもらったんです。本多さんに連れてきてもらうにもきっかけがあります。本多さんのご出身は松川といって飯田から少し上ですね。そこに松川という小さな町があるんです。いろいろな事情があってそこのお家にはなかなか行きにくいことがあって、じゃ松川の少し先の

方ですか、山の中に小さな小屋というか別荘というか書斎のようなものを建てたいという話になって、それで僕が図面を作ったんです。最初案を作って、パースのようなものを書くんですが、それを持っていって話をしとったんです。確かあのとき本多さんが「この絵は面白い」とおっしゃったんでね、もうおぼえていらっしゃらないかな（笑）。「絵が面白い」と言ったんですよ。絵が面白いんで、「私は伊那谷の民家の本を書きたいんで、そのカットをあんた書いてくれますか。」と本多さんが言ったんで、それは結構な話だけど私は伊那谷を全然知らんものですから、書くとすれば伊那谷の風物だとか風土だとか家を見ないとしょうがないと思いまして、「そういうのを見ないとかけません。」と言ったんですよ。それで結局、「それじゃ私が飯田に行くときに、いつも一緒に行って、回りましょう。」とこういうわけだったんですよ。で、そななどこでね。今日はジープじゃないですね。

本多：んー、

吉田：はは、そのころは確かジープでね。

本多：いや今もあるんですよ

吉田：はは、そうですか。まあそのジープは軍用ジープみたいな、後ろも横も何も見えないんですよ。でそのジープで飯田周辺、だいたい民家を見たりして歩いたんですよ。ええ今もそうなんだけど、水木しげるという妖怪を描く漫画家がいるんだけど、あの人の絵が私大変好きでして、それを確か本多さんも好きでしてね。

本多：はは。

吉田：本多さんは漫画家になろうと思ったんじゃないですか（笑）。という過去があるそうですけど。そういうわけで水木しげるみたいな民話のカットを書こうと思つたんですけど、未だにそれを果たしてない。民話の本はでませんね？（笑）。ま、そのうち描きますから（笑）。ま、そのときね、大平という離村した村があると。でそこに行きませんかという話で、それできたんです。そのときに大平と私の出会いがありましてまあ飯田の人達がこれを保存しているんだと。という話がありまして「じゃあ一肌脱ぎたいな」とこういうことがきっかけなんです。まそういうことで始まった大平との縁なんんですけど、どういう訳か延々と縁が続いておりまして、もうこうなると切りようがないと言う感じになっとる訳です。ま、そんなきっかけが前にあったと言うことです。で先ほど小林君から本多さんの紹介がありましたけど、私がもういっぺんちょっと言いますと、本多さんはジャーナリストって言うんだけれど、まあ根は冒険屋さんだと思います。冒険屋さんとは非常に危険なことを冒すという意味です。いろいろな意味の冒険があるだろうと思う。物理的に危険であるというのもあるだろうし、いろいろな問題があると思うが、まあ冒険屋さんです。で

あの、ベトナムでルポをされて。ベトナム戦争の時ですね。それからニューギニアの高地人でのルポされて、それからベドウインのルポをされて。その三部作がだいたい最初のルポの代表作かなと思っています。黒メガネをかけていらっしゃいますけど、たぶん本に載っている写真は黒メガネじゃないかなと思います。ジャーナリストはね素顔を見せないと言うのがあるそうです。素顔を見せると取材がしにくくなるというのがあってね、それで今こんな暗いところですけど、サングラスをしますからみなさんにそうお断りくださいとおっしゃっていますが。

本多：ちょっと注釈しますと、別にここでサングラスをするつもりはないんだけど、写真を撮っている方があるもんでそれでサングラスをしたんですね。こういう町並み保存なんかをやっている方々は襲ってやろうなんて人はいないだろうから、素顔のままでいいんですけど。写真を撮りますとね、それが広まるものだから。それでそうやってるだけです。後でもう外しますけど、そのときは写真を撮らないでください。なんて言いますか、右翼なんかはかなり脅迫してきて、この間浜松だったかな？「必ず殺す。」ってのが現れたんですね。

吉田：くく……（笑）。

本多：それを私じゃなくて警察の方が先に察知して、それにぴたっと両側に私服警官がついて回ったって。講演会の時も30人くらい私服きてましたけどね。そういうわけで素顔は知られたくないんです。そうでなくともジャーリスってのは顔なんか知られてろくなことはないんで。しかしジャーナリストでなくてもですね、顔を知られて得することってあるんだろうかと私は思うんですね。俳優とかニュースキャスターは別ですけどね。あの、一般的には写真やテレビなどで顔を知られるってことは、こちらは相手はわからないと。相手はこちらをわかると。そういう関係が無限にできるということですよね。お互いに知っているなら一向に構わないけど。

吉田：なるほど。

本多：そういう意味でこれまで生きてきたのはサングラスをしとるから。あれは不思議なことですね、サングラスをして写真を撮っていると、そういう格好をして町を歩いていると思っている人がいるんですよね。

吉田：あーあ。

本多：そしたらすぐわかりますよね。そんなことしたら。そんな冗談じゃないと思って。普通はしないんだけど写真の時だけしとるわけです。そんな次第ですので外してるときはすみませんが写真を撮らないでください。

吉田：ま、そんなわけで私と大平の出会いは本多さんが導いてくれたということなんです。まあその後ですね、私はのめり込んでいろいろやったのですが、本多さんはあまり

こちらにはおいでにならないで、今日は本当に久しぶりなんですね。

本多：こここの取材をしてから、ま、途中で一辺来たことがありますけどね。前にここで会合して。

吉田：前から見ると相当きれいになっとるはずですが。

本多：そう大分。復活したって感じだな。

吉田：まだまだなかなかね。これからだと思いますけど。あの、ここで少し本多さんにお話ししていただくということで。これから写真撮影禁止であります（笑）。

本多：あのー、吉田さんに頼まれた大平のことはですね、この前ルポに書いた以後特に取材もしていませんので、特別新しいことをここでお話しすることはないんですね。ただし全然別の話なんだけれども、根っこはつながっていることをこの際お話ししようと思います。

伝統が、文化はもちろん、環境問題、地球や宇宙の問題にまで及んでくると考えます。

私はですね、5年前かな、ドイツの取材に、ドイツが東と西に分かれていた頃ですね、まもなく統一になりましたけど統一する直前に取材に行きました。それでいろんな町を見て歩いたんですが、そのとき非常に驚いたのが、それぞれの家が、ま、この中にドイツに行った方あると思うんですが、あの非常に古いことを誇りにしているわけですね。たとえば「何年に建てた」と建てた年号をわざわざ入り口のところに書いてあつたりしてですね、何年にできたんだと。うちの中はある程度改善してたりするんですが。外観としてはほとんど昔のままだと。そういうのを非常に大切にしているところですね。極端な例はハンブルグですけど。ハンブルグなんてもう中心部は空襲で完全に破壊されたんですが、それですね、前と全く同じものを復興したんですね。外見上わからないような。そういうところまでやるところです。そういうところから日本に帰ってくると、なんとまあ伝統や古いものを平気でぶちこわしていく国なんだとびっくりするんですけど。そういう伝統というものの意味がですね。よく右翼の人達が伝統とか国粹的なことを言いますけど、あれは非常にもちろん私は共感しますけれど、それにしても生ぬるいなと思ってますね。右翼の方はなぜもっと右翼にならんのかと。言葉の問題や文化の問題については、右翼より私の方がずっと右ではないかと思うことがよくあります。しかしそういう国粹主義とは無関係に、伝統というのが、文化はもちろんですけれど肉体とか健康の問題にまで及んでくるのではないかという風に思っております。根元的には環境問題とかですね、もっと大げさなこと言うと地球とか宇宙とかそういうことまでさかのぼるのではないかと。

「食糧不足対策」で「湖を埋めて牧場にする」という矛盾

それでさっき根っことして似てるけども、別の問題と言いましたのは、この前今月のはじめですね、島根県松江市。この中に島根県の方はいらっしゃらないかもしませんが、松江市でシンポジウムをやりました。それはどういうことかと言いますと、あそこで宍道湖という有名な大きな希水がありますね。淡水と海水が混じっている。その横に中海というのもあります。同じくらい大きな宍道湖と中海という2つの希水の湖がありまして。これをですね、埋めてしまって農地にしようと。そういう計画が30何年前にあったんですね。それでそれがずっと進行してきて、ところが非常に反対運動があったりして、環境問題が問題になったりして、5年前にいったん中断というか延期というか。いずれにしても中断したわけです。ところが今年の4月、島根県の県庁が再開することを決定したんですね。全部じゃないけども非常に重要な部分を埋めると。埋めて何をするのかと言いますと、農地に、しかもそれを水田じゃなくて畑にすると。畑で何をやるかつたら朝鮮人参作るとかですね…。それから非常に広い部分で牧畜、肉牛…牛を飼うって言うんですね。そういうところにすると。これに対し世論調査すると、反対の方が多いんですね。しかしそれでも強行するって言うんですね。で、これについてのシンポジウムがあったんですが、そのときはなしたことは、今の伝統に絡むものですから、そのことをちょっとお話ししたいと思います。ここを埋める最大の理由ってのはですね、世界の食糧事情だと。やがていずれ、今は日本は食料が十分に足りているけども、世界的にはいずれかならず食糧不足になると。それに備えてやるんだと。というのが最大の大義名分なんですけども、それで何をやるのかというと、さっき言ったように埋めて畑にすると。で、この非常に大きな疑問はですね…今日本の穀物の自給率は非常に落ちていて、これは非常に問題なんです。それだったら米を作るべきだと。米は確かに十分で自給できますけど、しかし将来と言うことを考えるならやっぱり米が一番重要ですからね。だから水田にすればいいじゃないか。それを畑にすると。で畑にして何をやるかというと言ったらそりゃ麦とか穀類だったら食糧不足というのがわかるんだけども、一番広いのが牧場なんですね。その他ですね、たばこを作ったり、花のボタンを作ったり、そういうことをする畑だと。ものすごく矛盾しているわけですね。食糧事情という問題と。

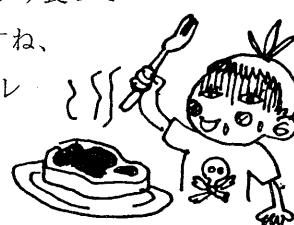
そもそも畜産というのは乾燥地帯のもの

じゃ、畜産というのは具体的にどういうことがあるのかというと、これが非常に問題だと思うんです。そもそも牧畜というのは、元々はですね、乾燥地帯、つまり田圃も畑もできない、砂漠だと…砂漠もわずかに草が生えてますからね。アラビ

アの砂漠に行くとわかりますけど、ラクダが生活できる程度にはわずかに草があります。それと草原…草ばっかり生えて木が生えない。そこで発達したのが牧畜な訳ですね。だから仕方なく、田圃も畑もできないから仕方なく始めたのが、山羊だとかラクダとかの牧畜な訳です。私は学生時代、探検に、砂漠地帯…パキスタンの山奥ですけども、砂漠地帯に行ったことがありますけども、本当にもうどうしょうもないですね。オアシス周辺は畑ができますけどもそれ以外の周辺はみんなもうほんのわずかの草が生えているだけ。これを利用するには牧畜以外にないわけですね。その草を食べた山羊…山羊が一番多いんですけども…山羊の乳を搾って食べると。生で飲み込むことはないんですけど、たいてい加工品にしますよね。ヨーグルトだとか、チーズだとか。ということはですね、なんか牧畜と言いますと、みんな肉を食っているというイメージがありますけど、肉なんかめった食いません。肉を食っちゃったら乳なんか飲めなくなりますからね。山羊にしてもラクダにしても一番主食にしているのは乳だと思うんですね。それでたまに肉を食うこともありますけど、それもほんのその時だけ。第一暑いところですから腐ってしまいますからね。その時食べてしまわなければだめなわけで、みんなに分けたりして。たまに肉をごちそうということで食べるけれど、常食ということはありませんね。遊牧民は乳製品が主食であって肉ではないわけです。元々はですね、人類は肉食ではないと。これはもう歯の構造とか過去…ゴリラとかチンパンジーとか人間の発生したもと…をたどっても決して肉食ではないと。肉は食べることはあっても決してそれが主ではないと。やっぱり草食。ゴリラなんかは葉っぱをたくさん食べてますけどチンパンジーにしても肉よりも植物性の方が主ですけども、それは人間もそうだったわけです。ということは、非常に基本的には、大きな意味で伝統的には、人類というものは草食だった。草食というのは草も含めてですけど穀類を食べる、つまりほかの肉食獣、トラやライオンだとかとは違う方の生物だというのが基本だと思うんです。それでさっきの砂漠の気候のことに戻りますけど、そのようにして乳とか肉とかいうものを食べる様子にした。牧畜というのはですね。

肉ばっかり食っているのは健康に良くない

ちょっとその前に、肉のことを戻しますけど、肉ばっかり食っているというのは非常に健康に良くないですね。これはですね、毎日酒を飲んでいるようなもので、酒というのは元々ハレの時、つまりお祝いとかお葬式とかそういうお祭りの時だけのものだったんですね。それを現代人にはもう毎晩飲むような人が現れて。これは少しぐらいならわか



らないけれど、大量に飲み始めたら明らかにだめになりますね。それと同じで肉ばっかり食ってる人は非常に健康に悪くて。生ならまだいいですよ。エスキモーってのは全部生で食べるから、ビタミン類も破壊されない。生でも栄養失調にならない生活ができますけど、我々文明人の場合、ほとんど火で煮たり焼いたりしますからね。これですね、毎日肉を食っている生活がどんなに悪いかと言いますと、私の同級や周りの人で40代ガンになって死んだ人はほとんど肉が大好きですからね。肉ばっか食って野菜なんかほとんど食わない。こういう人がガンになっております。それからこの前アルゼンチンに行ったんですけどアルゼンチンというのはもう膨大な大草原ですね。半分砂漠のような草原もありますけど、いずれにしても草原か砂漠地帯です。もう膨大な大平原ですが、そこは昔先住民、アメリカインディオがいて、これをヨーロッパの移民していった連中が大虐殺したわけです。大虐殺が一番行われたのはアルゼンチンが独立した後なんですね。だから有名なダーウィンがビーリング号でそこによってますけど、あれがまだ今から140年前ですけどね。このころの記録を見るとめちゃくちゃ殺している様子がでてきますね。赤ん坊まで殺している。特に女性を殺しますね。あれは動物みたいに増えるから妊婦を殺すわけですね。それでもう終わりには大群が襲っていって皆殺しをするわけですね。そうやって虐殺で大草原を獲得したのがアルゼンチンなんですね。それでそこで何が行われたかというと全部大平原を牧場にしてしまうんです。だからあそこをくるまで走ると、一人の牧場ですよ、1時間とか2時間とか走るくらい。しかも舗装道路ですからね。もう何百キロ、百キロ単位で一人の牧場主が経営しているんですよ。だからアルゼンチンの大部分は牧場で分割されていますね。しかも個人の牧場で。それくらいですからね。べらぼうに肉が安いわけです。羊や山羊はもちろん牛もですけどね。もう日本で食べる米とかよりも遙かに安い。安いから毎日肉ばっか食つてるわけですね。したがってあそこに行きますと、ガンとか糖尿病だとか通風だとか、成人病だらけですね。そういう生活を彼らはアルゼンチンではしております。たまにごちそうで肉を食うことはいいんだけど、もう常食にしてしまったら本来の伝統に反する食生活なわけです。

日本で肉を食うといるのは効率が悪い

それから効率が悪いですね。ま、砂漠とか草原だったら仕方なくやるから草を集めて食うよりは乳にして食べた方が効率がよい。これは当然ですけどふつうのたとえば日本みたいな国ですね。同じことをやったら一頭の牛を飼うために必要な草とか穀類ですね、それを作る田圃や畑の面積などと比べたら、直接そこでできる穀類などを食べた方が遙かに効率がよいわけですね。

肉というのは人間から遠いほど健康にいい。

それからもっと問題なのは、乳の問題があるわけですね。乳の問題の前に、肉というのは人間に遠いほど健康にいいそうですね。東洋医学の人人が言うんですけども、例えば人間にとて人間の肉を食べることはもっとも道徳的に悪いけども、人間の健康にも悪いですね。肉というのは。その次に悪いのは猿の肉で、あんまり健康に良くないそうです。その次に牛だとかほ乳類、つまり人間に比較的近い動物の肉はあまりよくないですね。それからだんだん離れると鳥の類。これはかなり人間と離れてますから、健康にいいです。もっと離れると魚になりますよね。だから鳥より魚の方がもっと人類の健康にいいと。さらに遠くなると貝の類がありますよね。これはものすごくいいですね。あの貝塚があるくらいだから昔は貝ばっかり食っていたからそういうえるかもしれません、いいそうです。動物性タンパクの中では貝類というのは非常にいいそうです。



体にやさしい昆虫食の話。

そこまで言いましたけど、私はもう一つ加えて昆虫がもっといいのではないかと。昆虫は貝類よりもっと人類と遠いのではないかと。何でそんなことを言いますかというと、伊那谷というのは日本で昆虫食がもっとも盛んなと頃なんですね。私は伊那谷出身だからそんなこと当たり前だと思っていましたけど、あちこち出てみるとこんなに昆虫食べるところは本当にないということがわかってきました。蜂の子は有名だけれど、蜂の子なんてこんなものはまあ当たり前すぎて。みんなは蜂の子は、例えば一番ごちそうはクロスズメバチ、この辺ではスガレと言っていますけどね。スガラとかスガレとかミツバチくらいの小さな。地下に(巣を?)作りよってね。これは巣を見つけると占有権を主張するわけですね。「これは俺の巣だ」って。これを秋まで育てて採るんですけどね。だけど子供にはあれ、なかなかとれないもんだから、我々子供の時にはほかの蜂はみんなありました。片っ端から。足長でも何でも全部食べちゃいますね。生で食べたりしますけど。それよりもっとうまいのはゴトウムシといいますけどね。成虫になるとカマキリムシやクワガタになる幼虫ですね。これは栗の類、楓や桑や柵の中に幼虫が入っています。白い幼虫で、種類にもありますけど長さは穴を掘ってますからね、2, 3センチぐらいですけど、焼くと3

倍ぐらいにピンとのびますからね。で、蒲焼きに焼くとこれは蜂の子よりももっとうまいですね。一番あれがうまいんじゃないかと思いますけど。しかしそれはそんなに大量にありませんからね。まあ昔たきものを切っていると、子供がみんなよってきて、順番でですね、「今度出たら俺だー」っていってゴトウムシを楽しみにしておりましたけどね。しかし量はそんなにはないです。一番量が多いのは蚕のさなぎですね。これはもう養蚕地帯ですから製糸工場で膨大にできるわけです。だから我々は飯の時にどんぶり一杯ぐらい食いましたけど。学校で給食にしとったところもあるようだけど。だからおそらく戦中や戦後の海岸の魚が自由に食べられる地方は別ですけど、あれほどタンパク質をたくさんとっていた地方はないと思いますね。そんなわけでですね、脱線したけど、肉、特に動物、牛の肉なんてあんまりいいもんじゃないわけですね。

牛乳が日本に普及した背景

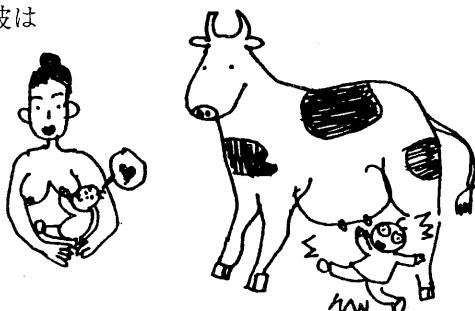
そこで今度は乳の話になりますけどね。牛乳というのはこれはあまりよくないんじゃないとかと。何で牛乳がこれほど普及してきたかというと、小麦のことと関連づけて思うんですけどね、日本にはもちろんうどんというものがありましたから、小麦はもちろんもう作っていました。しかしもっと膨大に食べるようになったのは学校給食が元になっています。戦後のアメリカから小麦が、あれはですね、援助って言いますけど全然援助じゃないですね。どうしてみんな援助って思っているかは未だによくわかりませんが。はじめどかんと持ち込んできてですね、学校給食でパンを始めて後で全部金を取られているわけですよ。ただしあのころドルがないもんだから円で払わされております。それで円で払わされて、それを使ったのが日本の再武装ですね。これに使っていたわけですね。その円で。それはともかくその時に小麦を日本で使うようになって。学校給食によって子供たちがパンに慣らされるわけです。同時に粉ミルク、アメリカからみんな輸入ですけどね、粉ミルクもそれで使うようになった。ここでですね、それまで日本人になじみのなかったパン食とミルク食が子供のときから慣らされて行くわけですね。いったん慣らされてしまうと、これは麻薬と同じで。麻薬ってのは阿片なんかでもあれですね、何も知らない人は阿片なんか別になんてことないんだけど、阿片にいったん慣れてしまうと今度は毒だとわかっててもどんどん求めるようになりますね。パンもですね、どうもあれは日本人にいろいろな意味において問題があるんだけれども、アメリカがどんどん日本に小麦を輸入させる、これが一つの方便になってきた。それで日清製粉というのが非常に儲かってきて、そこから美智子ってのが天皇のところに嫁に行ったりするんですけれど。その時にですね、こういうことがあったんですけど。慶應大学の確

か林だったかな、医学部の教授がですねえ、米を食うと馬鹿になるというそういうパンフレットを出したんですね。それで小麦を食いましょう、パンを食べましょう、日本は米なんか食ってたから負けたんだっていうのを、ちゃんとしたパンフレットを作って。それで普及していったわけです。だから米が非常に虐待されていったという背景があります。その結果アメリカの小麦資本とか一言でいえば小麦に関する資本が大儲けする。こういう構造が出来上がっていったわけですね。それで日本の小麦がどんどん減ぼされていくって、今もうほとんど小麦作っているのは関東平野の一角ぐらいにしかなくなりになってしまったと。似たようなことが乳にもいえるんじゃないかなという気がするんです。

乳は人間に近いほど体にいい。

これもある東洋医学的な発想の先生によりますとね、さっき肉というのは人間から離れているほどいいと言いましたけど、乳は逆でしてね、乳は人間に近いほどいいと。だから人間にとては人間の乳がもちろん一番いいわけですね。それから人間に一番近いと言いますと山羊が割と近いと言うんですね。成分の分析というのは別問題にしても、その点でももちろんそうだけど、その点を別にしても、山羊というのは人間に近い大きさですね。そのくらいのものを育てるのに適した乳が山羊の乳だと。牛みたいにでかくになりますと、そういうでかいものを育てるように乳ができるいると。それを人間が飲みますとね、腎臓によくないって言うんですよ。その他直接的には腎臓によくないと。従ってその彼が言うにはですね、非常に驚いたのが骨粗鬆症になると。ふつうミルクというのはカルシウムというのも一つの要素になっておりますね。あれは骨が丈夫になるからミルクを飲むんだと。冗談じゃない反対だと。特に年配になってくると牛乳はよくないって言うんですね。むしろ逆にカルシウムは吸収されないと。従って骨粗鬆症になってしまうと。というような俗に言われていることと正反対のことを彼は

言うんです。それから西洋医学的にも非常に重要視する人が出てきておりますね。この点についてはもう一度詳しく週刊金曜日に近いうちに連載するつもりなんですけれど、それは別として…ちょっと脱線しすぎたかな。



日本の食糧自給率低下の実態

自給率が落ちているって話しましたよね。穀物の自給率。いわゆるふつうの文明国…フランスとかイギリスとかのヨーロッパの文明国なんか、一般のアジアの農業

国はもちろんですけれども…文明国でも穀物の自給率というのは高いわけですね。8割とか、高いところは9割とか。しかし日本は27パーセントかものすごく落ちてますね。もう大変なことです。ところがね、中身を見ると一番主食にしている米は100パーセント。ま、一時不足したことがありましたけど、それはまあ例外としてふつうは100パーセントとか120パーセントとかを自給してますね。それから野菜も90パーセント自給している。魚も86パーセントとか。つまり、かなり自給しているわけです。じゃ、何で20何パーセントかというと家畜のための飼料を輸入しているのです。穀物にしても。これがものすごく多いから。そしてそれをあわせると自給率が非常に低くなってしまう。じゃあほかの卵とか肉はどうかと。すると肉も卵もかなり自給してますね。8割とか9割とか。ただし鶏や牛の餌は実はほとんど輸入されているわけです。だから、卵や牛肉を自給していると言っても、実態は飼っているところだけであって餌はまるで外国に依存してしまっている。そうするとなんだか、極端なことを言うと、日本の畜産というはアメリカ資本の飼料の下請け工場みたいになっちゃっていると。そういう状況だと思うんです。

漁場の宝庫をつぶして砂漠のような牧場を作る矛盾

つまりそういうことを、さっきの話に戻りますけど、海を干してそれで畑にしてですね、海を埋め立ててそれでそういう肉を飼おうと。これはいったい何のための話かと言うことになっているんですね。砂漠で適したことをわざわざ海を埋め立ててやると。しかもです、さらに問題なのは埋め立てるところが砂漠みたいなところだったらそれはそれでいいですね、と思いますね。砂漠みたいなところをやるんだから。そうでなくて中海というのは、大変な漁場の宝庫なんです。我々がこんな伊那谷の山の中ででも、今は冷凍庫とか冷蔵庫とかあるものだから新鮮な魚がいくらでも入ってきますけど、我々が子供の時はそんなのありませんから、例えば刺身なんて正月の時しか食べられませんでしたね。しかしそういうごちそうは別として、ふつうの、日常的には小魚はよくありました。海でとれる小さな魚ですね。いろいろな種類がありますけど。じゃこの子魚の類、それから貝、干し貝とかですね、こういうものがあったおかげで、ま、さなぎというの別ですが、さなぎを食べない地域にとってはこういう小魚が山の中でも非常に重要な人間にとって必要なタンパク源になつたったわけですね。こういうものがどこで一番とれるかと言ったら、沿岸漁業で、特に河の出口とか希水湖ですね、今言った宍道湖見たいの、淡水と海水の混じったこういうところが、そういう日本人の健康に一番役立ってきた魚が一番捕れたところです。そういうところをつぶしてしまってそこに砂漠のような牧場を作ろうと。こういう計画なんですね。

沿岸漁業の重要性の再確認すると、やっぱり中海の埋め立てはおかしい
いかにこれがとんでもないことかおわかりになると思いますけれど、そういうところをどうして今までつぶしてきたのか？戦後の漁場というのは、もちろんはじめは沿岸漁業に頼っていたのですが、だんだんと発展するに連れて、いわゆる遠洋漁業に移っていったわけです。あるいは沖合い漁業ですね。これは大きな船になって、つまり資本の大きなところほど遠くに行けますから、結局大洋漁業など大きなところが、それを発展させていったわけです。その結果漁獲高は増えていったけれど、沿岸漁業は虐待されていったわけです。つまり資本として、太刀打ちできないわけですね。その結果漁師が非常に困ってくると。困ったところに持ってきて沿岸の観光資本だとかあるいは工場だとかそういうものがつぶして行くわけです。だからそれまで海岸が、我々の自由に出入りできた自然の浜だったところが、どんどんつぶされていきますね。それで漁業もつぶされていくと。従って今まで非常に豊富だった河の出口だとか希水、そういうものがどんどんなくなっていましたわけです。で、最後に残ったいくつかの中の非常に重要なところがこの宍道湖とか中海とかそういうところになるわけです。ところが最近ですね、この遠洋漁業というのがだめになってきたんです。どういうことかというと、一つはあんまりめちゃくちゃ世界中の魚を捕りすぎて、資源が有限になってきた。きりもなくとれる時代ではなくなってきた。もう一つもっと重要なのはいろんな国が権利を主張し始めたわけですね。何で日本ばっかりとりまくるんだと。ということで国連での圧力がだんだん強くなってきた。これからますます強くなると思います。ということは遠洋漁業が限界になってきた。従って沿岸漁業が重要になってくるわけですね。今後もし、さっき行った宍道湖や中海を埋め立てる計画が世界の食糧事情なんだと、21世紀は世界的に食糧が不足すると、これはその通りだと思うんですが、だからつぶして、畑を、牧畜を、なんてとんでもないわけで、だからこそあそこは保存して、日本人の一番身近なところでとれる優れた漁業資源を守るべきだと。これはもう正論であり、かつ論理的にも正しいと思うんですが、それでも何でも強引にやるんですね。というのが今の中海の問題というわけです。



矛盾の正体はやっぱり金。

それでここで何でそんなむちゃくちゃをやるのかと。そういうことになると思うんですが、ここまで私は取材をしていませんからわかりませんけども、たぶんこれは要するに土木資本と絡んでいるんじゃないかと。あれだけ世論が反対しても強引にあそこをつぶすというのは、つぶすと儲かる人達がやっているんじゃないかと。そういう疑いを持っているわけです。これまで取材してきたダムだとかいろんな土建関係の林道、例の白神山地の世界最大のブナ林のど真ん中に林道を通すとか。そういうのを取材すると必ず土建資本とその儲け仕事とそこに癒着するいわゆる高級官僚ですね、それから癒着する政治家のおいしい生活のためというのがほとんどですね。だからダムにしても最初は例えば工業用水という目的で造るダム、長良川もそうですけどね、それが工業用水がいらなくなってしまった。高度成長もだめになったし、それから水の使い方も非常に改良されて必要なくなってきた。だったらダムの計画やめればいいんですが、目的を変えてまでもやります。今度は洪水対策だとか、なんだかんだ理屈を付けてですね、本来の目的が変わっても強引にやるんですね。それはもうダムのためのダムと。儲けのためのダムだとはっきりしているんですが、それと同じことが埋め立てにもあるんじゃないかと、疑っているんです。これを強硬に進めているのは、島根県知事の住田という知事なんですが、この人とこの前対談したんですね。つい最近の週刊金曜日にでていますけど。私が今まで言つたいろんな疑問をぶつけてもですね、とっても合理的な説明ができないわけですね。単にここまでやってしまったからやめれないとか、なんて言うか全然、脇道にそれたような説明しかできない。あのここだけの話なんですけど、住田って人は私の親戚関係になるわけですね。それであの人は昔からよく知っているわけです。どういう人か。もちろん私が言う矛盾がわからん人ではないわけですね。それでたぶんですね、これは私の推察だけれど、何でこんな無理をやるのかというと、今まで国の政府からいろんな借金をしておりますね。財政投融資、その他の借金をしております。この借金をもし、世論に押されて県庁が主導でこの埋め立て計画をやめてしまうと、借金を返さなきゃならんわけです。300億円とかいってきますけどね。300億なんてね、住専問題に比べたらカスみたいなもんだけど、それにしてもそれを返さなきゃならんと。これは大変だと。しかし日本の政府の方で、その計画を中止すれば、これはかなり返さなくてすむ金が結構あるんですね。だからこうやって芝居をやってとにかく「やるぞ！」ということを言っておれば、「いやもうよせ」と日本の政府の側がいえば、助かるわけですね。芝居ではないかなと私はひいき目に解釈しますけど、これはもちろん表面的にはそんなこと言ってませんから

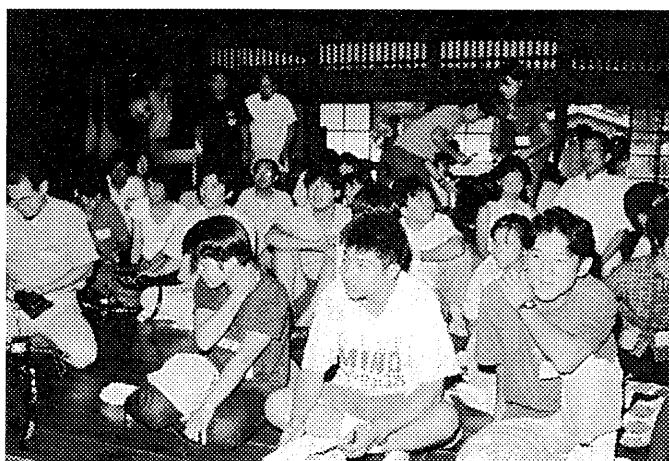
ね。もう表面的には、私がいくら親戚であろうと攻撃せざるを得ない。というわけで対談でも攻撃してはいる訳なんです。

伝統な生き方というのは文化の問題だけでなく肉体の問題までに及んでくる

今、「根っこでつながる」と言いましたけど、伝統的なもの、宍道湖なんて彼はですね、景観、つまり景色の景観なんて言うんですよ。「埋め立てて景観がよくなる」とパンフレットにですね、北海道の釧路原野の写真を載せてこういう風になるんだって言うんですよ。それで牧場なんか建ててですね、松江の沖の中海もこういうようになるんだと。冗談じゃないですね。景観のために。冗談じゃない。生態系の問題だと私は怒ったんですがね。そういう点ですね、あそこの本来の伝統的なものを破壊して、北海道の釧路を持ってくるなんて冗談じゃないことを、破壊をやるというようなことでは町並みの破壊問題とつながってくるわけですね。そればかりではなくて、さっきも申しましたように、伝統的な生き方というのは単に文化の問題ではなくて、肉体までに及んでくると。砂漠の人に適した肉食は日本人には決して適さないだろうと。そんなことをやってるからガンが増えてくるんだというような問題につながってくるんだと思います。一応話はそれで終わりです。

● ● ● ● (休 憩) ● ● ● ●

吉田：後半になります。ちょうど本多さんが本を持ってきてくれましたけれど、これに大平のことがちょっとでてきます。でお書きになった頃に、この本じゃなく、「そして我が祖国日本」でしたね「そして我が祖国日本」という題でした。「そして」と



いうのはちょっと意味がありますね。それで「祖国」という言葉を本多さんが使ったということで何か当時ね、ああいう人が「祖国」なんて右翼みたいな言葉を使うのか、なんてね(笑)。右翼に狙われる人が何で「祖国」だなんてのがあったりしたけど、そこで大平がでてきたりして、本多さんがお生まれになったのは松川ですから、伊那谷ですね。それで学校は飯田高校ですね。飯田高校です。ですからこの辺

は本当に「ふるさと」なんですが、そのふるさとのことを「我が祖国日本」ではいろいろルポをされていまして、そのルポの一つに大平の離村前後の状況、そんなのがでてくるわけです。あれをお書きになったのは羽場崎さんの運動が始まつったころですか？

本多：んーとそうですね。離村はもうとっくにしたんですか？

吉田：ええ 44 年ですねえ。

本多：運動の直前ぐらいじゃないですか？

吉田：確か運動が始まったのは 48 年頃ですね。オイルショックのちょっと前ぐらいですね。

本多：そうですね。

吉田：47 年だったかな、48 年ですね、確か。運動が始まったのは。だからちょうどそのころの状況ですか。

本多：そうですね。

吉田：まあ私は直接知らないんですけど、大平はうーん、今これでざっと 20 数戸、22 戸しかありませんけども、離村の頃は 28 戸ぐらいありました。自然につぶれたのもありますし、自分でつぶした人もいますけど、まあ元々は相当人も住んどったんですね。で、小学校もあります。10 年くらいでほとんど百何十人という生徒が 2, 3 人ぐらいに減っちゃったんですね。確か。

本多：一番多いときは家が 70 軒ぐらいあったんですね。最盛期には。それがだんだん減つていって。

吉田：70 戸っていうのはね、実は私眉唾だと思いまして、どう見てもそんなには難しい。そんなにつぶれた感じもないです。ですが 70 棟っていう言い方の方がいいんじゃないかな。

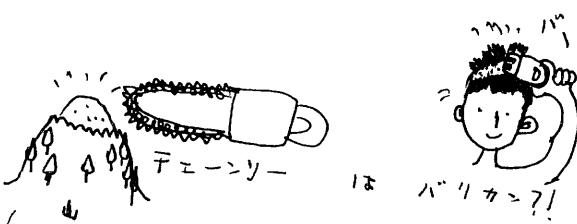
本多：ああ、あるいは 70 世帯とか。

吉田：はいはい。そういう言い方の方がいいかな。納屋とかそういうのがいっぱいありますから。例えば離村の年に春に大火がありましたね。あれが家数にすると、戸数でいうと 10 棟ぐらいなんですけども、実際に燃えてしまった家は 5 戸ですか。4 戸だったかなあ。だから倍くらいの数字になるんですね。倍以上になるかもしれない。そういう点からいうとどうもね、そんなにあったはずはないんじゃないかなと思ったんですけどね。それにしても昔は大分子だくさんだったし、家族も多いですから、おそらく一つの家に相当大勢いたってことが予想されますけどね。私がここに来始めたのはそのころですけども、そのころと今とを比べると、たぶんこれは本多さんもお思いでしょうが、この本にある大平の絵にですね、山がもうよこしまのよう

絵がこのカバーにでてくるのかな。これそうですね。山が全部裸になっていますね。縞模様に横になっているんです。ちょうどそのころ私がここへ来始めた頃もそういう状況でした。ですから周りを見渡すと山はみんなはげてましたね。木がなくて。それで全部木がなくなっちゃったと。それで集落の周りにはこんな木はありませんでした。今生えているのはほとんどなかったと考えてください。丸見えだったわけです。離村してから誰がどういうときにどう植えたのかわからないけど、唐松をいっぱい植えちゃってね。それが育っちゃったわけです。唐松とかね、木は山村の場合には家の周りにはおかないとなんですね。山火事があると怖いから。ですから家の周りには木は植えないんです。今ね、「縁があつていいなあ」なんて言ってますが、昔の風景はこんなんじゃないです。家の周りはみんな畠でした。ですからもっと見通しがよかったです。もっと工業風の風景があったとおぼえています。山が丸裸になったというのは離村と相当深い関係があって、その辺のことを本多さんがルポをされていますね。炭焼きの話とか、パルプ材の話とか（笑）。

本多：取材をしといて詳しいことは忘れちゃったんだけど（笑）戦後ですからね。戦後は明らかに炭は重要だったから炭焼きを非常に重要な収入源にしとったわけです。それから炭がだんだん衰えてくると、今度はパルプのための伐採というのが当分は続くわけです。

吉田：炭がねえ、そのころは、本多さんがお書きになったのは、私の方がよくおぼえているかもしれない（笑）。あのね、炭はね、戦後物資がなかったから、燃料がなかったから本当に飛ぶように売れていったんです。だけども石油をみんな使うようになってくるもんだから炭はだんだん使わなくなっていました。で、ちょうどそのころチェーンソーを使うようになっていったんですね。チェーンソーで木を切るようになったです。で、チェーンソーで木を切ると材料はどんどんいくらでもとれるとい



う感じなんです。で、作れば作るほど値が下がったそうです。安くなるとみんなそうなんでしょうけど、生産量がうんと増えてくるんです。チェーンソーで。だけどその後



お金が全然入ってこなくなる、という関係がありますね。

本多：元々山というのはふつうの鋸で切ってる限りはあまり奥までは行けないんですけどね、この大平でも炭焼きは自分で自家消費分だけやってる程度のことはやっていましたけど、それがまあ非常にたくさん作るようになったんだけど。集落の周辺にある里山というのは、本来生活のための重要な場だったわけですね。それでその奥に、生活のためではない山林が広がっているんですけども。パルプが非常に売れるようになつたらその奥の方まで、つまり元金に手を着けると言いますか、それまでは利子で生活しとつたのがどんどんその元になっているところまで破壊していったという。しかもそれでも生活上は安く、追いつかない方向へ行ってしまったわけですね。それで里山も切られてしまい、その奥もなくなってしまったという状況がありますね。すくべパルプ材になる木なんて切つたらほとんど再生しないわけで。ですから離村される頃はあと数年分もないだろうというようなことを言われるくらいだったというようなことですね。で、離村の頃はいろんなすつたもんだがあったんですよ。全員いっぺんに出ないというか、これは何も住んでいる人がいっぺんに出た訳じゃなくて、もうすでに見限った人もあるて、空き家が増えたり、あるいは常住はしなくなっている家もあつたり、いろいろしてきたわけですけど、一番最後に全部でなければいかんという状況になったわけですね。まあ出ないといわゆる補償金の類が出なくなると。一部残ってしまうと補償金が出ないという状況になったもんだから、仕方なくどうしても残りたいと。残りたいというのは必ずしも、生活が別に苦しくてもですね、それこそ伝統みたいなもんで、ここを離れたくない。故郷を離れたくない、それがまあ一番大きいんです。だから残された人はいたんだけど、そうすると全体に補償金が出ないと。そういう状況になつたんです。それで泣く泣く離れざるを得なかつたという状況になつたわけですね。

吉田：まあこの辺にも小学校がありましたけど、小学校を終わると中学校になる。中学になると飯田に下りなきやいかん。ですから中学になると飯田に下りちゃうわけですね、結局。ここからは通えませんよね。ですからそうなると高等学校ももちろんそうなんだけど、で、大学になるとどつかほかの町に行っちゃう。遠くにいっちゃう。で、結局戻ってこない。ま、そんなことで若者がいなくなつてしまうということになつたわけですけども、ま、ここは食えなくなつてからもいろいろなことをやつた人はおりましたね。食うために。

本多：ま、食うためについていうか。食うためはあまりいないんじゃないんですか？それよりもふるさとだから出たくないと。その方が多いと思いますね。

吉田：そうですね、食い詰めて出たって感じではないですね。

本多：ちょっと違うんですね。

吉田：ええ。

本多：ですから最後に残ったおじいさんがいましたけどね。

吉田：ええ、山際さん。おおさかやさんですね。

本多：これが一人でもね、どうしてもいやだって。まあ一人じゃ冬は越せないものだから、冬の間は子供たちのところへいったけど、春になるとすぐ、雪がとけるとすぐに来てまたここに生活して、脳溢血で倒れるまでいた人です。

吉田：この人も離村組だったから戻って来ちゃいけなかったんですね。

本多：んー、本来はそうなんだけど、無視していましたけどね。

吉田：まあ。大平の歴史というようなことで大平245年の歴史という紙芝居を描きましたので今日の夜やることになっています。その辺にも出てきますけど、離村してから、静かだったのはわずかの間ですぐに名古屋の不動産会社がここを開発して別荘地にするというような動きが出たわけですが、その時確かに山際さんがいろいろなことを言われましたね。

本多：あんまり詳しい状況は知らないんですが、それとつながっているんじゃないかなといわれたりしたことがあったんだけども。

吉田：ええ、ま、実際はあの方も大平が全然人が住まなくて、捨てられてしまうのもいやだったということもあるんでしょうね。

本多：そう。

吉田：それでその不動産屋を連れ込んだといわれて、かなり悪口も言われましたけど。

本多：うん。

吉田：そんなに悪気のある人とは私も思わなかつたし。

本多：まあよくありますけどね。非常に過疎になってくると、消えてしまう恐怖感というものがありますからね、それできてくれるんならなんでもという気持ちはここに限らずよくあるんですけどね、

吉田：まあ、昔の相当あれられた状況から見ると今は相当きれいな家が増えています。きれいになった家は、今度の3年間のふるさとづくり特別対策事業っていうのを飯田市がやったわけで、まあこれに我々が生活文化同人として関わっているわけですけど、まあそれがあったと。そうなると結局公共事業としてやることになりますから、建物の所有権の問題があるので、所有権がやっぱり個人にある家はちょっとできないということで、建物は全部市へ寄付していただくということでやったんです。ですけども土地は買っておりませんから元の人が持っています。それから唐松が植えてあるところ、ほとんどこれが昔農地ですから畑だったんですが、その奥へ行きます

と川がありますが、その川岸の方にお墓があります。ですから家のほうはですね、いろんな法事だとかいうときにはこの家に戻ってきます。で、お墓がありますから、お守りをするということがあるんで、ですから建物は市の所有になりますけど、そういうときにはどうぞお使いくださいということで使っていただいているわけですね。やっぱりなかなか、おそらくここは冬は寒いけども、いま下に下りたら暑くてしょうがない。非常に過ごしやすい、住んだら非常に好きになるところだなと思いますね。こんなことが聞きたいということがあつたらどんどん聞いてください。その話をを中心にやってもいいですから。

本多：じゃ、ちょっと雑談しましょうか。さっき伊那谷の昆虫の話をしましたけど、もう一つついでにしますと、カブトムシとふつういわれているのはですね、ツノが一本ですね。いわゆるカブトムシの。それでクワガタというふつういわれているのはさみ状に二本になっていますね。我々のこの辺ではですね、カブトムシといったらクワガタのことをいうわけです。それで俗に言うカブトムシというのはあれは非常に軽蔑していましてね。あれはまぐそ弁慶というんですよ。(笑) 何でまぐそ弁慶というのかというと、弁慶というのは、クワガタにてもいろいろ種類がありまして、弁慶とか義経とかですね。いろいろしもちいとかのこぎりとか色々ありますが、その中に弁慶ってのがあります。しかしそれにまぐそをくっつけてまぐそ弁慶といったらあのいわゆるカブトムシなんですね。で、カブトムシってのは都会の方はデパートなんかで売ってるから、デパートでとれるとまあそういう人もっている人はいないだろうけど、どこにいるのかというと、まぐそみたいなところにあるわけですよ。つまりゴミだめとかね、汚い有機肥料、有機肥料は今やきれいかもしれないけど、いわゆる俗に言う汚いゴミだめみたいなところにあれはおるわけですね。幼虫が。だからあのゴミだめを引っかき回しますと、太い、ものすごい太いこのくらいの虫がでてきますね。丸まっているこんな。これはですね、さっきゴトウムシってのはうまいといいましたけどね、木の中に埋まっている。しかしまぐそ弁慶の幼虫はですね、こんなものは食べたもんじゃない、ゴミだめの、ゴミを食っているようなやつだから。

吉田：はは。

本多：味はみたことないけど、おそらく誰も味をみようと思わないんじゃないと思うんで



すけどね。だからまぐそ弁慶ってのは全く軽蔑して子供もとらないわけですね。だけどクワガタってのは非常に尊敬して、尊敬っていうか（笑）、大事にしてみんなおもちゃにしたり、戦わせたりして、扱っております。だからいわゆるカブトムシってのはこの辺では全然相手にしない軽蔑しきったものなんです（笑）。

吉田：まあ昆虫を食うのは伊那谷の特徴だと。いうお話をすけど。ザザムシってのがいますけどこれはどういう？

本多：これはですね、川にいろいろなものを全部引っかき回して食集めてべる。

吉田：全部ザザムシ？

本多：全部食っちゃうわけですね。これはちょっと問題があつて、伊那谷といつても広いもんですからね。言葉も細かく言えば、村ごとに違うわけだし、食べるものもかなり違うわけです。例えばカイコ、さつきさなぎをいいましたけどね、我々が子供の時はさなぎを食べましたけど、あれは隣の生田村ってところに行くとあの成虫を食べるわけですね。

吉田：えー？！

本多：蛾になったやつをよ（笑）。あの方がずっとうまいそうですね。我々はそれ知らなかつたんだけども、ずっと後になって聞いたんだけど、ふつう鍋でいりますと、羽が焦げて全部とれちゃうんです。それで少し焦げ茶色になったやつがさなぎよりずっとうまいそうですね。私はまだ食べたことないんですけど。それから今のザザムシってのはですね、天竜川とかああいう大きな川の石の下

吉田：河原みたいなところですね。

本多：うん。河原の浅瀬ですね。

吉田：うん。

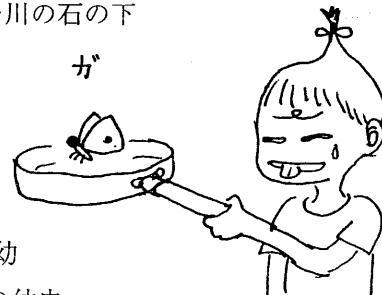
本多：水が少し流れている状態の。そういう石の下にいる。色々いますけどね、一番多いのはカワゲラの幼虫とか、それからトビゲラの幼虫とか。トビゲラの幼虫ってのは頭に小さなはさみが着いてて胴体はちょっと縁がかったウジ虫みたいなやつですね。

吉田：足のいっぱいあるやつですか？

本多：足は少ないですね。昆虫はだいたい足が3対ですからね。そのほかに足がたくさんある多足類もありますけどね。何でも食っちゃうわけですよ、全部。とれるやつは。

吉田：はは。

本多：だけど昔はですね、非常に水がきれいだったもんだから、住んでる虫もそういうきれいな陽炎の幼虫とかね。カワゲラなんてのは非常なきれいなところに、ま、カワ



ゲラも種類によりますけどね。これは天竜川にはいないけど、もっと非常に澄んだ水にいる、十和田カワゲラなんてのもいます。これは氷河時代からずっと住んでおって、大人になっても羽が生えてこないんですね。だから空中を飛ばないんですね。水中で生活をやってる。ま、こんなのも含めて、カワゲラの幼虫はきれいなのが多いんだけども、トビゲラは少し濁ったところにありますね。だんだんこのごろ公害がでてきてですね、きれいなところにいる昆虫が少なくなって、汚れたところでも多くなっておりますね。だから今のザザムシってのは食べるのはよくないと思いますよ。公害があるんじゃないかなと。

吉田：（笑）。

本多：我々食べないけど、あれをおみやげに売ってるところがありますけど。

吉田：あっ。売ってますか？

本多：売ってますよ。あんまり買わない方がいいんじゃないかな。

吉田：養殖したんじゃないですか？（笑）

本多：養殖はしていないんじゃない？まさか（笑）。

吉田：うーん。そうすると飯田周辺で育った方というのは食生活がかなり異様な部分がたくさんお持ちだということが言えるのかしら？

本多：元々昔から食ってますからね、やはり変なものを食う。

吉田：いかもの食い。

本多：いかものぐいとして食べているわけじゃないんですからね。ちゃんとふつうのものとして食べているわけで、これはしかし日本に限らないですね。だいたいニューギニアに行つてもそうだと。南洋なんかのいわゆる先住民もよく食べてますね。我々が食うものはかえって全部食べてますね。食わない方がおかしいと思うわけで。こんなうまいものをどうして食わないのだろうかと。特にあのゴトウムシ、さっきいった、あんなうまいものを何で食わないのかな。

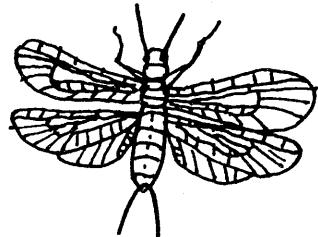
吉田：（笑）。

本多：と思うし。ゴキブリは我々食いませんけどね、ニューギニアではゴキブリを食べますね。

吉田：あれはしかし、あんまり質量がないから食いでがないですね。

本多：いやそんなことはないですよ。あの辺はでかいんですよ、ゴキブリ。でかくて、い

カワゲラ



カワゲラ・トビゲラの
幼虫のことと似ています。
では「トビゲラ」虫と
いいます。

かにもうまそうなんですね。

吉田：(笑)。

本多：みるだけでも。だから世界的には虫がふつうの食べ物ですね。食べないともったいないと思います。

吉田：そうかやはり牛肉崇拜から足を洗わなきやいかんという感じかな。

本多：少なくとも牛肉よりは健康によいと思います。ガンにはならないと思いますね。

吉田：なるほど。別にそういうのをお食べになったから、本多さんの食生活が異様だとは決められませんけど。ただご一緒に同じ種類のものを腹一杯食べるのが一番満足感があるっておっしゃってましたよね。確か。そば5杯か6杯いっぺんに食っちゃうとか。確かそうでしたよ。だからいろんなものをちょぼちょぼ食うよりも、一つのものを腹一杯食う方が一番の満足感があるって(笑)。

本多：これは別に伊那谷の特徴ではないんですけどね。田舎は一般にそうじゃないですかね。

例えば飯だって私が一番食べたのは一気に6合食べたことがあるけれど。

吉田：(笑)。

本多：これはしかし土木産業をしていますとね、「一升飯」ってよく言いましたよね。いっぺんに一升食べる。これはそれほど珍しいことじゃないと思いますね。6合食べたのは一回しかないけども登山中に飯ごうで3合飯を炊いて全部食べたら足りなくなつてもう一回3合炊いたんです。

吉田：それはすごいよ。

本多：それはまあ別に田舎ものには珍しくないんじゃないですかね。

吉田：なるほどなあ。今は一回一合も食わないと思うんですけど(笑)。

本多：まあ大平のことではなくてもご質問があったら遠慮なく何でもお聞きください。

江原：今食文化のことについてお伺いしたんですけど、大平、伊奈谷周辺の職人の話とか、民話の世界の話とかで面白い話がありましたらお願いしたいんですけど。

吉田：職人か民話。民話についてはお調べになっていますよね。

本多：いや民話となるとですね、これを話すとなるとですね、嘶家のような才能がないと。

(笑)ちょっと無理ですね、私はここで民話を語る才能はないんだけど、職人とはどういうことですか？木地師とかそういうこと？木地師はよく住み着いた人がいますよね。例えば私の松川町でいいますと、天竜川の東側に生田村というのがありますが、これの一番奥の方に金山という集落があってですね。そこは木地師たちの集落として有名ですけどね。ほかにも伊那谷にいくつかあると思いますね。それに適した竹を植えたりしてますね。孟宗とかそんなんじゃなくて、細工に適した竹藪をわざわざ作ったりしていますね。

吉田：木地師ってのはかなり昔からあるんですよね。山の木は彼らが切ることは許されていたという、平安時代からあるそうですね。

本多：場所によると思いますけどね、あそこの場合いつ頃からはわかりませんけどもいずれにしても時代によってよそから来て、材料と需要の多いところに住み着いた人がいるんですね。

吉田：それはあの免許ってのがあるそうですね。朝廷が出した免許ですって。

本多：ああ。

吉田：ですからどういうのかな、平安時代からそういうのはあるんでしょうけど。その辺が一番の源流で、それでその免許を持っているのが木地師だから日本中好きなところにいって木を切ったりね、できるんだと。こんな話があったですね。木地師の姓ってのはここは大蔵氏んですけど、おおくらってのが非常に多いんだそうです。おおくらが多いですね。おおくら、おぐら。

本多：金山でも大蔵が姓です。

吉田：ああそうですね。おぐらの場合は小さい倉もありますし、大蔵もありますし、それから、

本多：木へんに京というのも。

吉田：小椋桂の小椋ね。あれもありますね。古河の市長も小倉さんてのがいるから「あんたも木地師の出だね？」っていったら「え？なんの話？」「小倉はみんなそうだ。」かなり多いことは確かですね。だからホテルオークラなんてのは木地師のホテル(笑)。元をたどればそうかもしれない。

大平：大平といいます。私も地元の出身なんですけども。小林さんと同じで私たちの年代というのはやっぱり本多さんにすごい影響を受けてまして、一つお聞きしたいんですけど、本多さんもこの大平について書いている中でやっぱり離村するには、離村するようにし向かた側、し向かた側って言うとあれですが、そういう状況を作り出した側もあるんだと。で、最後に総括するような感じでちょっと名前は忘れましたけど、言葉を引用して、都会人は現在の生活が幸福でないことを知っていると。村人は知らないと。伝統的な生活が幸福であると知らないと。そういうことでちょっと引用されてましたけど、そこへ持ってきて弱みにつけ込んで札束をちょっとちらつかせて、もののを動かしていくっていう、日本の社会構造ってのは、これは今でも続いていると思うんですけど、これは一言



木地師=「かくわせ」の
おじいさん
みたいいね?

では言えないと思いますけど、これに抗して行くにはどうしたらよいか、その一番の根本なるものはどのようにお考えなのでしょうか。

本多：もう大問題ですね、一言でお話しするのは非常に困難だと思いますが、ひとつの例を挙げますとね、これはまだ本格的には取材してないですけどね、ちょっと取材しただけですけども、岡山県ですね、この中に岡山県の人はいらっしゃいませんか？岡山県にとまたダムというのがあります。これはどういうのかというと、ずっと岡山の川の源流の方のもう鳥取との県境の方ですけどね。そこに奥津町というのがあるんですがそこにですね、ご多分に漏れず、ダム計画ができたんですね。このダム計画は長良川なんかと同じで、30何年も前に工業用水としてスタートしたんです。これは瀬戸内海側の工業用として、そのための水を作ろうと。それでダムを奥の方へ造ろうと。そのころはまだ合併前でとまた村ってのがあって、これで30何年前にできたときは、もう村の人はびっくりしちゃって。村が埋没しちゃうわけですからね。もう全員こぞって反対したわけです。それで村長以下もう全員が団結しましてね、団結の碑がありますよ。村民全部の名前を入れてですね、絶対こんなもの阻止すると。で、条例を作ったわけですね。村の条例を作つてもうこれに、ちょっと詳しいことは忘れちゃったけど、これに賛成するような何かはいっさい入れないという、そういう条例まで作つてスタートしたわけです。これが30何年たつ間にだんだん崩れていくわけです。札束による甘い蜜とそれから行政的な圧力とこの両方でやっていくわけですね。それで村長というのは反対する人がなるわけですね。かわるたびに反対する人がなっていくわけです。ところが3代目ぐらいになってくると、切り崩されていくわけですね。土地を売ったものにはいくら補償金がでるとか。これが非常につらいわけですね。それからもっとひどいのは、アメリカのムチに当たる方ですね。いろんな村、こういう時代ですから過疎になると、もう村の住民税では、村の収入では食つていけませんからね。2割自治とかいって、そこの財政の8割くらいは国庫補助みたいので成り立っていると。そういう構造になっていますから。これを打ち切られたら大変なことになりますね。打ち切ったり、あるいは延期したり、そういういじめをやるわけですね。それを県知事、岡山県の長野知事なんですね。これが先頭になっていじめをやるわけですね。まあ建設省がいじめの元凶ですけどね。そういういじめにどんどん切り崩されていくわけですね。それでついに賛成派の方が多くなっていくわけです。で4代目の村長になってついに今度は賛成派が村長になってしまんですね。それで今なっている村長はですね、土建屋そのものが村長になってしまいわけです。もう非常に象徴的ですね。あれ見てますとね、私はアメリカの先住民たちがどんどん侵略されていく、あれを

思い出しますね。はじめは一致団結して、侵略軍がくるのを阻止してるわけです。しかし買収されたり、今度は先住民の隣の部族が買収されたり、いろんな手でやられていくわけです。それで最後は虐殺とかされたりするんですけども、あれと同じように延々と30何年かかるですよ、侵略されていくわけですね。住んでる人は全部同じだけど、いじめる方は建設省なんてのはいくらでも局長は替わるし、知事だって替わったりね、どんどん替わっていくわけです。替わって延々といじめていくわけですね。そういう構造になっていくですから、それに一つの村が闘うなんてこれはもうとっても、灯籠カマキリの斧というですかね、大変なことですよ。この社会構造そのものと対決していくわけですから、非常に難しいと思います。難しいけれども、ただ少しずつ替わってきてはおりますね。まあダムの問題にしても昔とは違っておりますね。依然として手厳しい状態が続いているんですけども。しかし日本みたいな民主主義がない国では、不利だけども、それでも少しずつはかわってきております。だから絶望ではないだろうと。私自身は一種シニカルになっていますが、それでもまだ絶望ではないだろうと

思っています。そのためにはやっぱりできるこ

てきることから…。

とをすることだと思います。その人が。そ

の人が新聞記者だったらそれを書くことだし、政治家だったら断固闘うってことができますけど、そうでなくとも住民の一人としてもできることは必ずあります。何か。何もできないってことはないと思いますね。ビラ巻くこともできるし、小円運動もできるし、何かやれることがあります。そういう人が核になってやがてそれが大きくなるという例はいくつもありますからね。例えばあれがそうですよ。白神山地。

さっきちらっといいましたけど、青森県と秋田県の間にある白神山地ってありますね。これはブナばっかりあって、ブナだけの純林としては世界最大なんですね。ブナはヨーロッパにもありますし、昔はあのブナの大森林だったわけですね。今の西ヨーロッパなんてのは、氷河時代の後、日本も氷河時代がありましたけど、そのあとブナがまず生えてくるわけですね。だけどみんな切ってしまって今やブナ林は全部二次林ばかりですけども、原生林がそのまま混じっているのはあります。例えばイランのダマベントという山の周辺とか、中国と朝鮮の境とかですね。そういうところにブナ林はありますけど。これはブナだけじゃなくていろいろなほかの木と



混じっているわけです。ブナだけという意味では、あそこのせいしゅう林間というのは世界最大の広いところなんですね。これをぶちこわして、ど真ん中に林道を造ろうと。これもまた例によって林道のための林道なんですね。いろんな人がおいしい生活をするための林道であって、大義名分はなんにもないんです。これを阻止する。はじめはもう土地まで作っちゃいましたね。後は中枢部を残しているだけとなつたんですが、ここで反対運動を始めたのが弘前市の市民運動ですね。これはどういうことかというと、あれを実施するには特に森林の場合には、そこで地元の公聴会というのがあるんです。公聴会をやってそこで地元の全員の承諾を得るのを必要とするわけです。反対署名がたくさんになれば、それはできなくなるわけです。ただし、日本中の反対署名でなくて、そこに関係ある人でなくてはならないわけですね。何らかの利害関係のある人でないと。従って地元の人でないとだめだと。そういう法律があるわけですね。そこで市民運動の人達が何をやったかというと、あそこに関わっている地元へ行ってみんな説得工作を始めたんです。ここを切ってしまうとどういうことがあるか。幸いにしてというのはおかしいんですけど、前洪水になったことがありますてね、戦争中の最後の年、確か1945年の春だったかに、大洪水になりましたね、非常に被害が大きくて、なんか何十人も死んだ被害があって、そういうことがまた起ころぞ、と。ここを切ってしまったら大変なことになる。それも含めていろんな説得運動をやったわけです。その結果住民の人達も非常に目覚めですね、これは大変だと。それでだんだん反対が大きくなってついに、ストップになったと。それであそこは世界遺産条約になってもう完全にストップになっております。まあ、また別の問題がありますけどね。でもそれはまあ、それは最初の「林道を通してしまおう」というそれに比べたら遙かに小さい問題ですけど。いずれにしてもそうやってストップすることに成功したのです。だから元は市民運動から始まったわけです。従ってできないことはない。「誰かがやれば私もやる」なんていつとったんじゃだめなんだと思います。自分がまず、何でもいいからできることからスタートするということだと思います。

吉田：ほかにどなたか？まあ大分難しい問題になってきたけども、まあしかし今のような話は我々の仕



事の上でもあるわけですよね。当然あるわけで、日常的な問題でもあるわけです。そういうことがあるからまたここにそういう意識のある人が集まっているということですね。

中村：名古屋から来た中村と申します。よろしくお願ひします。まあ名古屋近辺では最近、瀬戸の山の方で21世紀万博の計画だとか、常滑沖に中部新国際空港の開発だとか、割と大きなプロジェクトを抱えているんですけども、今本多さんが話されたように、市民運動が起つたり、賛成、反対のいろんな運動が起つてはいるんですけども。いざ私は名古屋に住んでいて、どっちかっていうと地元なんですけど、実際の常滑市民でもないし、漁業をやっているわけでもないのでちょっと遠くの方から見ているという状態なんすけれども自分の考えでは開発ということに疑問を感じていますし、何かしら働きかけと/or/ことができればいいのになと思うんですけども、最近の話題では、新潟の牧町で原発に対する住民投票で、一つの動きはあったというようなニュースがあるんですけども、特に住民投票ということにこれからそういう動きはどのようになって。まあニュースなんか聞くと法的な裏付けには全然関係ないと聞くんですけどもそういった可能性なんかちょっとお話ししていただければと思います。

本多：これはですね、私もそう詳しくはないんですけども、牧町の場合は町としての住民投票ですが、今度は沖縄でやりますよね。沖縄県としては初めてですけども、こういうのはだんだん盛んになっていくと思います。今までになさすぎたのだと思います。元々これが本当の民主主義なんだと思います。それであの牧町でそういうこと



があつて政府の自民党の誰かが間接民主主義を否定するものだといったけども、これは当然だと思いますね。間接というのは仕方なくできたわけで、できれば全員でやるのが一番いいわけです。何でも。だからギリシャ時代みたいに全部直接民主主義で、もっともあれは奴隸社会ですから、まあ奴隸の問題は別として直接市民が自分たちで決めると。これが一番理想的なわけです。しかし一億人ですね、しょっちゅう住民投票やってるわけにも行かないから、仕方なく代理人ということをやっているわけですね。代議士とか議会でも村議会でも仕方なくそういうことをやっているわけですね。本当は直截でやればそれが一番いいわけだからそれをひっくり返して直接が間接を否定

するなんて冗談じゃないわけですね。だから基本的にはあれが一番いいと。という意味であれば今後ますますやってるわけにも行かないから、仕方なく代理人ということをやっているわけですね。代議士とか議会でも村議会でも仕方なくそういうことをやっているわけですね。本当は直接でやればそれが一番いいわけだからそれをひっくり返して間接が直接を否定するなんて冗談じゃないわけですね。だから基本的にはあれが一番いいと。という意味であれば今後ますます盛んになって行くべきだし、そうなっていくだろうと。現に他の国ではかなりそれをやっているわけですね。長野県という例でいいますと、今問題になっている長野オリンピック。1998年ですか。冬季オリンピックが長野市でありますよね。これだって非常に問題なのは、あんなのに地元でも長野市でも反対運動があるし、長野県全体で言ったらあれを歓迎している住民がどれだけいるかという、特にこっちの方は関係ないわけですからね。あんなものに税金使われてとんでもないと思っていますが、住民投票やったら非常に危ないと思います。果たしてうまく行くかどうか。あのスイスの、町は忘れたけど、オリンピックをやろうと市が決めた町があります。そこで住民投票でひっくり返して否決してしまいましたよね。そういうことが現に行われるわけです。日本は今までそういうことをあまりにもやらなすぎた。元々伝統という悪い意味の伝統だけれど、革命っていうとおおげさですけどもね、市民がその時の権力を倒したっていう歴史っていうのは日本にまずないと言っていいと思います。まあ戦国時代。いつからっていうと難しいけど、統一国家ができるからという意味でいうと、純粹にですね、民衆がその時の権力を倒したということは一度もないと思います。もちろんいろんな一揆とかものすごく大きな反乱はありましたけど、全部失敗してますね。明治維新だって民衆による権力などはとても言えないと思います。しかし、他の国ではそんな国は世界に非常に少ないですね。アジア、ヨーロッパはほとんど全部そういうことをやっていますね。アジアだってお隣の韓国はもちろんだし、フィリピンだってそうだし、ベトナムなんかもちろんそうだし、中国はもうさんざんやってますね。日本はやったことがない。これは相当象徴的なことだと思います。今後永久にないとは思いませんけど、そういうことも関係あっていわゆる自分の手で何かを決めるという市民意識が非常に低いわけですね。だから住民投票というのも全く後れをとったわけです。だけどだんだんこれではだめだというのが少しずつ、それでもいくらか変わりつつあるなと思っていますから。法的になんとかといつても確かにあれ事態で原発は否定できないかもしれないけども、結局町有地をあれで売らないわけですからね。そういう形で実行はあるわけですね。いろんな方法はあると思いますけど、それをだんだんやっていく内に今度は法的にも実行

があるように制度を変えてしまえばいいわけです。最終的にはそういうかざるをえないと思います。

横田：岐阜県の多治見というと頃から来た横田というものですけども、本多さんにお聞きしたいのですが、今の牧町の件に関しての国会議員の話も含めまして、簡単な論理をすり替えてしまうというのが往々にしてあるのですが、それにマスコミが非常に荷担しているという部分が最近特に目立つのですけども。我々一般市民としてそういうのを見抜くコツというか、そういうものがあればお教えいただきたいのですけども。

吉田・本多：(笑)

本多：これはまた非常に難しいご質問で。特に何かというかいわゆるノウハウ的なコツはないと思いますが、ただ、マスコミが明らかにだめになってしまっているというのは私も日々主張していて、ジャーナリズムではなくただの情報産業だと言っているから今言われたとおり當てにならないと思いますね。足して2で割っているんですね。つまり泥棒があって、片方に泥棒に入られた人がいると、やっぱり泥棒が悪いと思うのだけど、それをですね、泥棒の言い分と入られた人の言い分を足して2で割って両方足してその平均を取っているというのが多い。南京大虐殺がもう明らかにあった証拠は無数にあって、ちゃんとした研究もいっぱいあるし、証言者もいるんだけど、片方であればなかったと言っている人がいますね。そうするとそれを両方載せるわけですよ。そうすると足して2で割ったら、一般の人はこれはもう片方がそういうているんだから、ことによるとまあ、という風になりますよね。ということをやっているから、今度の原発でも似たようなことになると思いますね。それを見破るというのより、一番大切なのは、事実を見据えることだと思います。しかしその事実が報道されなければ話になりませんから、非常にマスコミの責任というのは大きいのですが、まあ私個人としては、今のマスコミに全然信用をおいていませんから。どうせまたうそを言っていると思っているわけで、いつさい報道されたことには疑いの目を持っています。それがコツと言えばコツなんですけど、みんなに全部に疑いの目を持つてと言っても解決にはならないと思うんですけど(笑)。いずれにしても事実かどうかと言うのが一番大切だと思いますね。後は難しいですね。まあ一番いいのは自分で行ってみるということだと思いますけど、いちいちそれで報道されたことを自分で行ってみるわけにはいきませ



んから、やっぱりいろんな考えにつまりニュースについてはいろんな見方に耳を傾ける、そんなことぐらいしか言えません。

吉田：本多さんはまだNHK聴取料は払っていませんか？（笑）あれを聞いても信用ならんからはらわんという論理かな？本多さんと言えばああNHKに金を払わない人だという人もいるんですよ。

？？：吉田さん本多さんそれぞれにお伺いしたいんですけど。今日は私、息子を連れてきていて、外で虫取りに遊んでいるんですね。こういう環境及び、民家を残してくださったことを非常にありがたく思うんですけど、あえて吉田さんにうかがいたいのは、今、人が住んでいなくても残すことの意味を言い出し、及び吉田さんはどのようにお考えですか？それから本多さんにうかがいたいんですけど、某自動車メーカーが21世紀自動車の次は住宅ということで、すごくアジアに日本のプレファブ住宅のようなものが輸出されていく時代がくると思うんですね。まああるかどうかは別としてそのように戦略を立てているわけです。今、日本に輸入住宅が入ってきてますけど、固有のものが形式としてもどんどんなくなっています。アジアに同じように日本のプレファブメーカーが進出していくとしたら、つまり住宅の輸出入についてどのようにお考えですか？

吉田：あの、保存するということねえ。これはどういう価値があるから保存する、これがどういう価値にあるのか文化財的に価値があるとかいろんな見方で言う人がいるけど、僕はそれは一つの理屈を付けているだけの話であるという風に思っています。でなぜ保存するかっていう前に、なぜ壊すのかっていうことがなくちゃダメなんだろうなって思っています。というのは、残っていくのは当たり前であって、消える方が不自然だという意味です。それは人間の作ったものですから命あるものであるというのは確かだから、何百年も何千年も残っているわけはないと思いますけど、それはそれで天寿を全うするということはあると思うんです。やっぱり家を建てる、建築を建てるというのは永続性を願って建てているわけだから、壊す方がむしろ事件なのであると考えています。ですから残すのはふつうなんだと。壊すときはなぜ壊すのかってことになるんじゃないかと、そう思うんですね。まあ残っていくということで考えるならば当然いろんな残り方があるわけです。で、もちろん自分が住んでいる家がそのままずっと子孫が住んでくれるように残っていくのが一番自然な状況としてある。ここは離村して住む人がいなくなってしまったというのがあります。まあ僕がここに関わったのがそうだと思うんだけど。どんどんそうやって「新しいものがいいんだ」ということでとり変わるのが当たり前のことだという状況。で、民家が壊されていくという状況が僕にとってせっぱ詰まった状況になったとき

に大平宿に出会いまして、こういう離村したところというのはそれなりの保存の仕方があると思ったんです。それでいろいろな方法があるだろうと思って最初は伝建地区にしようなんてことも考えたこともあるんですけど。しかし「人が住んでいなければ伝建地区にならんよ」という話もありまして。本当は僕はそんなこともないんじやないかと思うんだけど、そんなこと也有ったんですけど、結局、ボランティア的にここを保存していこうということがありました。でもあのボランティア運動に関わることでむしろ私は尻馬に乗ってきたみたいなとこなんんですけど、考えたときは、人がいないんだから住んでないんだからそのまま残すってことは非常に楽だっていうような安易なことを考えたんです。実は本当は大変でしたけど。でもここまで残ってくると、今度は行政的にもだんだん対応が増えてくる。で、僕は、こういう残し方は本当にいたら特殊なんだと考えたいんです。人が住んでいなくなったから、みんなでこうやって、いろいろを炊いて生活してみるとか、昔の家がたくさん残っているからみんなに見てもらうとか、一種の博物館的なものに僕はここはならざるをえないと思うし、そういう保存っていうのはむしろあり得るわけですね。いろんなケースがあると思いながら、やはり一番原点としては自分の住んでいる家をきちんと残していくというのがある。それがベースの生態ですね。それは自分の住んでいる環境が、という意味を含めて、保存っていうのは、「さあ保存だ」というのではなくて、ごく当然のこととして、保存される。むしろ壊される方が異常なんだというようによが考えるようにならないとダメだというように考えるんですね。まあそれがお答えになったかどうかわからないけど、そう思っています。よろしいでしょうか？

本多：非常に極端な例を挙げますと、その反対の、つまり、破壊が、両極端だと思うんですが、それをいいますと、これはベトナムの例ですけどね、戦略村っていうのがあるんですね。これはどういうことかっていうと、山の中に元々住んでいる人々が点々と集落を作っていますね。これをみんな集めてしまって、一ヵ所にまとめてしまうんですね。なぜかっていうと、ゲリラがそういうところにいるものだから、みんな住民を集めてしまって戦略村に入れてしまってそれ以外のところはもう爆撃しようが何しようが好き勝手だと。外にいるものは敵と見なすと。そういう方法でやったわけですね。それはベトナムが最初ではなくて、アメリカ軍が時々やってきた。それからアメリカに限らず時々そういうことがありますね。非常にひどい例だと。日本とアメリカが戦争を始めたときにアメリカにいる日系の2世がみんな集められたんですね。集められてこれも一緒にされた。しかもそれを移住するわけですね。そういうことをすると一番打撃を受けるのが年寄りです。年寄りっていう

のは健康上弱いから死にやすくなるというのもありますけど、それよりもっと大きいのは精神的に参っちゃうわけですね。それまでずっと生活しておった、そのいろんな意味で。それこそまさに伝統の中におった根っこを切られたというのが打撃になつて死亡率が高くなるわけですね。その対局になると思うんです。伝統的なものを残していくっていうのは、一番精神的にも民族的にも安定する状況だと思うんですね、だからある民族を絶滅させようと思ったら殺さなくとも移住させればいいんですね。かき集めてどこか別の場所に。これ実際問題、南米にはいろいろな民族がいますけど、終わりの方にそれをやつたのがフエゴ島のそばにある、名前はちょっと忘れましたけど、そこに集めて移住させたんですね。そうするとたちまち死んじゃうわけですね。そういう状況が両極端の一方の方だと思うんです。そうさせないものがなるべくそこに座つた個人としてもそうだし、民族としてもそうだし、そういう問題になるんじゃないかと思います。

吉田：もう一つ質問がありましたね。「アジアに日本の住宅産業が乗り込んでくるんじやないか？」ということですかそういうことがあるんですかね。僕はよくわからないですけれど。むしろ産業的な問題ではないかと。例えばインドネシアでアルミサッシは使っていますけど、作ってないんですね。あれは全部オーストラリアで作っています。それを引き抜き材として持ってきてそれを切つて組み立てる。後は金鋸でじやきじやき切つて組み立てる。だから組んだサッシがすべて寸法がちがいますしね。これは雨が入るけど、こっちは雨が入らないとか、いろんなものがたくさんできて、そういうことがなくなる現地生産の体制ができてゆくと思うけど、でも、日本のプレハブを持って建てろというのではないと思います。おそらくむしろ材料生産だとか部品生産だとかそういうものがずっとでてくる可能性はあると思いますけど。

？？：はい、あれは輸入住宅ではないと思います。輸入住宅という名の住宅にすぎないと僕は思っているんです。日本で作っているわけですからそうではないかと思っているんです。輸入住宅というのは売りやすいからいっているのではないかと。むしろ流通は向こうから来てますけど、セッティングはみんなこっちでやつてているわけですね。

本多：住宅に限らずすべてそうですよ。車であれ、工業製品であれ、それは同じ共通の問題ではないですかね

吉田：まあいわゆる国内の産業の空洞化みたいなものですね。それに達してくると思いますけど。実際、国の中でも、経済単位あるいは生活単位というものがどういう風に維持していくかになっていく。例えば食料品の問題だと、買ってくれば何とかなるとかそういうことになってきて、何も国の単位でいちいち考えることはないん

じゃないかと、ちょっと乱暴な論理があります。で、例えば先ほど本多さんの話で、木材なんかでも、遠洋漁業もよその方までどんどんといって大量に魚を捕ってくる。それと日本の漁業っていうのは沿岸で小さな船であるいは小さな網を引いて雑魚のようなものをとってきて食べてきたというところがある。それが、木材の流通とよく似ているなとさっき思ったんです。遠洋漁業というのは、量はりますけど、日本でいえば例えば木材を他の国から買って来ちゃうというのがそうじゃないかと。日本の国産材を使ってきたのが、いわゆる沿岸で雑魚を捕ってきたのと同じことじゃないのかなと。つまり国産材というのは、大きな流通ではなくて、みんな自分のところの山の木を使って家を建てるとか、割合小さな地域的なものであったと。それが戦後住宅ブームでどんどん木が必要になってきた。そんなことでは間に合わない。それで住宅産業が起こる。従って遠洋漁業みたいな風になって、まとまった木をどかんと買ってくる。そっちの方が流通としては強力であると、従って流通に乗らないものが干されてしまった。このようなことがあるんだよと。おそらく今の問題もそういうことがあって、これは国の単位とかあるいはもっと小さい単位とか

いろいろなレベルでそういう問題はおこるんじゃないのかね。でまあ今、大平建築宿に来ている人

達の意識っていうのは、やはり日本の国産材を使った日本の家をつくりたいというのが相当ある。これは生活文化同人というのは、そういう人間が集まってるんですけど、それからいうと、当然よそも日本も同じよみたいなことが許容できない。むしろ日本は日本の風土の中の技術がある。材料がある。まあそんなところに依拠したい。とそんな風に思っているわけですが、その辺でどうがんばれるのかと。それが我々の仕事のテーマになってきていると。その辺みなさんお話をありませんか？

山本：東京から来た山本といいます。今のことに関係すると思うのですが、これは本多さんにお聞きしたいと思います。日本の住まいのあり方がここ20, 30年ずっと変わってきた。これは住宅産業と言うことで住宅の市場を相当大きくつかんでいったというのがあると思います。それには、マスコミの役割、住宅産業と大新聞とのつながりというのは結構大きかったんじゃないかと思うんですね。例えば、震災の時にやっぱり強かったのは住宅メーカーだったと。あれは大変は早く全国的に



流れますよね。そういう風な動きから見てもあれは大変大きかったんではないかと。で、その結果ファッショナ化された住宅メーカーの家がほとんど一番日本人にはいい住宅なんだというようになってきているという傾向が、一つあるんではないかと思うんですね。ここに来ても自然の風や季節を感じられる住まいというものが本当は日本の中にはあったんではないかとずっと思うんですが、今ではとてもそういうのはなかなか望めない。というのが進んでいる気がするんです。で、先ほど本多さんが食べ物のことで、戦後パンが入ってきて変わってきたとおっしゃっていました。それから「遙かなる東洋医学」という本では、日本の明治以前の伝統的な医学というものが、あの後変わってきている。その辺を含めてもう一回、日本人の大事なことを消してしまっているのではないかと考えなくてはいけないようなお話をあちこちで書いているように思えるんです。で、日本人の住まいのあり方と一般的な傾向について本多さんがどのように考えているのかをうかがいたい。

本多：今のご質問も大テーマで、私なんかの手に負えない部分もありますけど、お答えになるかどうかお話ししてみると、例えば住宅の問題で、長野県の場合、この家でもそうですけど、冬は非常に寒いんですね。いろいろにあったっていると火の方は暖かいけれど、背中は寒いわけで、これは非常によくないんですね。私も子供の時も、農家ではなかったからこういう家ではなかったけど、寒い点では同じですね。それで父親の実家も母親の実家も遊びに行くとだいたいこういう形式の家でしたね。いろいろを炊いているという。火を悪さするには非常に面白かったけれども寒いことは寒いですね。慣れちゃったらそう寒いとは思わなかつたけれども、考えてみると非常に寒いわけですね。それでカナダの北極圏に行ったときに思ったんですけど、世界で一番寒いのは長野県ではないかと思いました。どうしてかというと、外はもちろん北極の方が寒いけれど、住居環境としてみてみるとエスキモーの家よりも長野県の家の方が寒いんですね。極端にいうと、雪のブロックを積んだ家の温度よりも長野県の家の中の方が寒いという。零下何十度になったりする。だけどエスキ

モーの家はなっても零下3度とか4度ですね、家の中は。だから世界の家を回った結果どうやら長野県の家は世界で一番寒いんではないかと書いたことがありますけど。だから、それがいいとは言えませんが、どういうことが起こるかというと、長野県の脳溢血の人の量が1位か2位で

私の親父もお袋も脳溢血で死んじゃった人ですが、その原因は漬け物にあると思うんですね。べらぼうに辛い漬け物をべらぼうに食べるということがあって、もう一つはこの家の構造にあるんではないかと。という2つを今では原因だと思ってます。ただし、これをすべて否定して、ここにヨーロッパと同じ家を建てるというのは問題だと思うんですね。だから形式としては、つまり精神的には、こういう文化を引き継いだ形で、しかし一番悪い欠点を改良することは可能だと思うんですね。ドイツでもそういうことをやっているわけです。いくら古い家だと威張って表札に17＊＊年だという風にやってますけど、中は結構改良しているわけですね。生活しやすいようにある程度改良しています。そういうことは可能だと思います。ついでにいいますと世界一は南京ではないかと思ったことがありますね。どうしてかというと、ご存じのようにオンドルというのがあります。オンドルの部屋にいると非常に暖かいんですけど、オンドルの文化は揚子江が境なんですね。それで南京という町は揚子江の河岸にあります。そうするとオンドルもないんですよ。なんにもない。家は石造りや壁づくりなんかの木造ではない家が多いですね。それで密閉していない家が多いんです。こたつもなんにも火がないんです。そうすると真冬でも零下5, 6度なんですけどなんにもないと外も中も同じ温度なんですね。そうすると世界一ではないかと。長野県の場合まだこたつがありますからね。それでも世界一だと思っていたけど零下10何度でこたつがある場合と、零下5, 6度でなんにもない場合とを比べるとまだこたつがあった方がいいわけですね。だから南京は世界一だと思うんですが。だから彼らは何をしているのかというと、べらぼうに着るわけです。綿入れを何枚も何枚も来て、私が取材にいってきたのは、日本軍に虐殺され損ねた人とか、生き延びた人とか、そういう人ですから、中に傷跡があるわけですね。銃剣で刺された。それを見るために着物をぬがんと写真が撮れませんね。それで脱いでくれっていうと、脱いで脱いでいったい何枚来ているんだと。それで太っていると思ったら脱いだらやせている人でびっくりしたことがあります。袖も昔の漫画に中国人が袖と袖をくっつけているのがありますね。どうしてあんな格好をしていると思ったら、袖をうんと長くして手を隠して寒さを防いでいるわけです。そういう家が健康上いいとは言えませんが、その程度の精神的ショックを与えない文化遺産は続けながら、しかし改良は可能だと思うんですね。

吉田：僕は具体的に今の話をフォローさせてもらうと、戦前の家と戦後の家はがらっと作りが変わってしまいました。まあ戦後の住宅メーカーがつくった家は小さな部屋がゴロゴロ。部屋だらけですけど、後は開口部が非常に小さいなど。で、いろんな戦後の住宅のつくりかたが変わった。主に間取りの問題ですけど、みんな個室がほし

くなったと。今までの家はがらんどうで個室がないと。特に子供部屋なんかは個室を与えないといふのが目覚めないなんて嘘だと思うけど、そのために何LDKなんて部屋がバラバラと独立性の高い家になったんだと思いますけど。考えてみるとどうも違うんではないかと。結局暖かい家がほしかったんじゃないかなと思うんです。戦後の日本の住宅の変わりは、家を暖かくするためだったんだと、僕は考えています。暖かくするにも、家中全部暖かくするのは大変なんで、部屋を小さくして、その部屋だけを暖かくしたということがあるんだなあと考えています。ていうのは、部屋を小さく仕切って生活のためなら喜んでいるはずなんだけど、喜んでいない人の方が多いんですよ。だから結局そうなんじゃないかなと。そのかわり暖かくなりました。僕は戦後の住宅は暖かくするためだったんだと。よほどやはり寒さというのがこたえたんだだと思います。本多さんの話にもあったようにね。寒いっていうのは大変なことだったんだと思いますよ。ようやく今ある程度暖房が普及されてきたけど、なおさら今その傾向は強くなってきて、特に高気密高断熱住宅なんてことを言い出すと、窓がどんどん小さくなつて壁の断熱性もどんどんあがつて、非常に家が閉鎖的になつてしまつ。そういうことを考えてやつてみると、暖房のことを考えると、しかしもうそれが逆転するんじゃないかなと思うんです。ていうのはそういう家をつくると夏が暑いんですよ。結局部屋の中の空気が全然外に出ていかないからむしろたまつてしまつ。風が通らないですから冷房をやることになります。そして冷房によって家はパンクするだつうと。冷房をすれば健康的によくないからおそらくいろいろな問題が起つてしまつ。特に閉鎖的にすることで、自分の生活と外とのつながりをみんな失っていく。むしろ環境から独立しちゃう。そんなようなことになつてしまつますね。僕はもうそういうことがパンクすると思っているんです。ですからそういう家ではなくて、むしろこういうような非常に開放的でつながりのたくさんある空間を作つて、しかもなお、冬はきちんと暖かくなれるくらいの閉鎖性がほしい。両方必要なんじゃないかと思うんですよね。だから日本の家の良さっていうのは夏は絶対いいに違ひなかつたんです。それを今は冬を暖かくするために夏の良さを捨ててきたんじゃないかな。まあそ



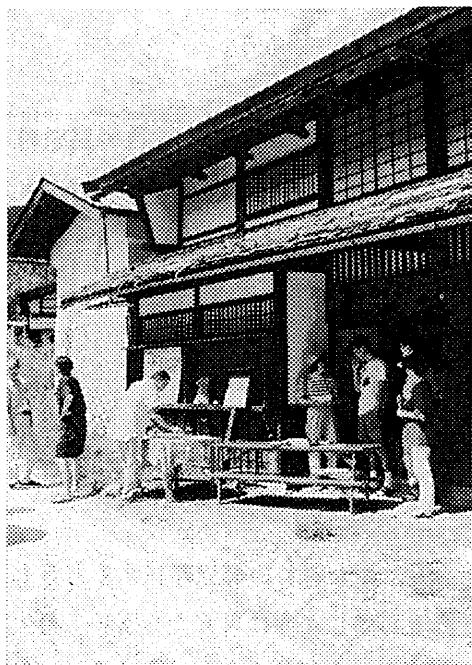
いう中で、日本の作ってきた空間も生かせるんじゃないかと思っているんですけど。少し補足しました。

本多：私今、前談を話したんですが、後談を話そうとしたらどんな質問か忘れてしまったんですが、どんな質問でしたっけ？

山本：ここ20、30年間、住宅産業と言うことで住宅の市場を相当大きくつかんでいったというのがあると思います。それには、マスコミの役割、住宅産業と大新聞とのつながりというものは結構大きかったんじゃないかなと思うんですね。

本多：あっこれはもう当然ですね。例えば新聞の例でいいますと、まあテレビはもちろんですが、広告で成り立っていますね。テレビの民放は100パーセント広告だし、新聞も半分以上は広告でまかなっていますね。そうすると住宅関連の広告ってのは圧倒的に多いわけですね。つまり払う金額が大きいわけだから、それだけ広告も大きくなりますね。そうするとそういうスポンサーですからスポンサーに対して圧力がききにくいくらい。一種のタブーになってきますね。そうすると批判もできにくいくらい。そういう構造はもういろいろな場合に言えるわけで。従って一種、癒着って言っていいのかそういう関係になってくると。従って、今、吉田先生が言われたような、日本の旧来の住宅の良さとかそんなことはどうでもいいわけで、ひたすら新しくすればいいと。その方が儲かりますからね。という方向に突っ走ってしまうとそういうことがあったんだろうと。それは意図的である場合もあれば、結果的になる場合の、両方十分あると思います。それから、寒さの効用って言うとおかしいけど、こういった開放的な家は、例えば伊那谷の場合で言いますと、全然夏でも汗をかくって言うことがなかったですね。まあ走ったり、早く動いたり、働いたりすれば別ですけど。じつとしておって汗をかくってことはないわけですね。だから湿度の問題もありますけどね、乾燥してますから。乾燥しているのと温度が低いので真夏でもそのまま汗をかくなんてことがなかったわけです。ところが最近そうでないんですね。どうも暑い。実は私の実家は昔のままですが、その非常に身体障害者の妹がおりましてね。こういう家ですと、動きが脳性麻痺なものですから、別の家を一棟つくったわけです。仕方なく。そこは暑いんですね。前は汗なんかかかなかったのに、どうして汗かくのかなと思ったら、やっぱり閉鎖的になっているわけです。冬のためを考えて。そして冷房を仕方なく、今吉田さんが言われたようにつけて、これも仕方なくやっていますけど、本来は全然そんなものは必要なかったわけです。そのかわりに確かに冬寒いんですね。でもまあ負け惜しみをいいますとね、寒さに非常に強く子供が育つわけです。私も寒さは平気で、そのかわり夏に弱くてですね。もちろんこの夏は平気だけど、東京とか、大阪とか、つまり日本の大都市はみんな暑い

わけですから、非常に暑さには弱いですね。思考能力がなくなつてどうしようもなくなるんですが、もう寒さの方はいくら寒くても平氣だという風になつて今でも寒い方の仕事なら、喜んで北極でも南極でもいきますけども、ベトナムとなつたら、「うわー、やだなあ」という。まあまず暑さですよね(笑)。乾燥ってこともありますが、脱線ついでに言いますと、私は30代になるまでですね、日本でこんなに暑い国だなんて知らなかつたのです。どうしてかと言いますと、高校出るまでここで育つていますからね。夏、汗が出ないところにいますね。それから今度は大学いきますと、夏休みになっちゃうわけですね。2ヶ月間も。そうすると一番暑い時期を知らないわけです。すぐ家に帰っちゃうから。それから今度就職したら、新聞社に行つたら、最初の支局が札幌だったんですね。北海道だから、また知らないわけですね。北海道っていうのは、この伊那谷あたりとよく似た状況だからね。乾燥してゐるし、温度は低いし。昼間は暑くなつても、夜は冷えますからね。従つて寝ることができますけど、東京あたりだと夜まで暑いもんだから寝ることができないですね。暑くて。それでそういうことがあって、転任になったのが30歳の時かな。北海道から東京へ転任になったわけです。それが真夏だったんです。7月の末くらいに転任になつて。それで飛行機で羽田から下りたら、「どかん」と暑いもんでこれは何事かと思ってですね。それで昔学生の時にパキスタンに行きましたから、その時の記憶があるわけです。うわー日本でパキスタンと同じじゃないかと思って、仰天したんですけど、実は夏はいつもそうだったんですね。それだから30になるまで、日本がそんなに暑い国だなんて知らなかつたんですね。だからそういうわけで暑さには弱いけれど、寒さには強いわけです。そういう効用もこういう開けっぴろげの家だとあるわけです(笑)。



司会：まだまだ伺いたいお話もありますけど、時間の方が超過しましたのでこの辺で終わりにしたいと思いますけど、さすが懐の深いお二方で、話が多岐にわたりましてですね、私などはまとめる必要がないと思いますけど、最後の方のご質問にお答えいただく中で、明日の分科会、あるいはテーマである、「歴史的遺産と我々の課題」ということにつながるお話も伺えたような気がしております。お二方どうもありがとうございました。

大平民家について語る・その後半 「新築の大平民家」

吉田桂二・益子昇・高橋俊和・岡部隆幸・田原賢……熱い思いを語る

記録 森山ゆき

- 吉田
- ・「新築の大平民家」というのは、こんな仕事があり得ないか？という提案だ！
 - ・みんなで一軒建てようじゃないかということで、大蔵五平次が最初に入植したときの家を我々の手で建てたら面白いんじゃないか？
 - ・どんな家なのかな？当時を推定して図を書こう。
 - ・まず図面を作成しよう。
 - ・下小屋をつくる、材木を買って運び込む、みんなで刻む、暇な人が暇なときに刻んで記録しておく、盛大に建前をして、仕上げる！
 - ・ほかに材料は、板と石ころと、少しの障子紙でできる！
 - ・建具は一本引きの障子と板戸の二本引きにする。窓はほとんどない。
 - ・工期は無期限、ポンサー無し。材をとられたらとられた、金はみんなでその都度出し合う。のんびり楽しみながらやろう！

益子

・テーマ
この土地で仕事をする限りは、「伝統的な建物と新しく造る建物とのつながりどう筋道をつけるか」、つまり「民家再生」というテーマに絞ろう。

・方向性

ここで重要なのが、住宅建築の9510号の「建築創造の継続性としての民家再生」という吉田桂二さんの名文。その中から……

「民家再生のような仕事をする中で、保存から創造までをつなぐ筋道が必ずあるはず。その系譜をどうつないでいくかというところに我々の使命がある。復元も創造がゼロではない。」

「民家の空間を生かして住むということは隠居して趣味として楽しむというよう、退廻的なことでは決してなく、現代生活に失われてきたものをここに求めるという現代性を確実に持っている、最も現代的な考え方をそぎ込まなければできない仕事である。」

「建築は一度につくるものでは決してなく、それが最も美しい形で存在するときも新しくつくられた時点とは限らない。民家再生も同じように考えたらよい。再生すべき民家の誕生から現在に至るまでの生涯をさらに延長しつつ、最も美しい形

にするための作業が再生である。」

「新しい付け加えなければならない用材と同様、再生すべき民家自体が創造のための素材なのだ。」

・キーワードは「創造性」だ！

吉田
・復元するにも。創造性がある。昔の姿が全部わからないので創造しなければならない。

・新築は全部壊して全部つくる。全部捨てなくともいいじゃないか？前の仕える部分、いい部分はもったいないから残そう！使おう！

・今は使い捨ての時代で、家のメンテナンスをしない時代。

・だから「民家再生やりましたぜ」っていう感じではなく、もっと日常的に家のメンテナンス感覚で民家再生のようなものはある。

田原
・自分は木造の構造解析を定量的にデジタルにやっている。

・神戸の震災について。木造住宅がいいのか悪いのか、何が原因でこうなったのか、悪いところは何を補えればいいかをやっている。

・民家再生について。建築基準法の中で創造的なフレームを作れない。スーパーゼネコンのようなものしかできない。ふつうの大工さんがいいことを考えても、確認出しても、公庫の検査を受けてもだめだといわれる。評価されない。→民家というものは基準法外だからだめと言いきっていいのか？これではだめ。

→方法は何かあるか？法の中ではそれに従うしかない。はずれると38条のセンター評点になってしまう。法は悔しいけど守る、法の矛盾点は直せばいい。

→そのためにはどうするか？いいものをつくるには思い入れだけでなく、工学的な判断も必要。データがあったら法律も変えられる！今は基準法の中でしか評価されないが、法の中でできる以外にも可能なフレームは無数にある。それをできるだけ正確に評価して、昔の伝統的なものから新しく開発したものまで定量的に解析して実験して安全性を確かめればもう何でもありの空間ができるということを学者さんたちと考えている。民家の考え方をできるだけ正しく評価し、確実に基準法内でも取り入れられるようにしたい。

岡部
・大平民家を見てびっくりしたのは大黒柱。今用意しようと思うと、できない。立米いくらとかそういう問題ではないというか、世の中に流れていないと、どこの材木屋に頼んでもこういう木はない。この柱は近所の木だと思うのですが。

・民家というのは今のものの流れと基本が全然違うような気がする。今、私たちの商売ですと、注文があるだろうからつくっている。流れがあってその中で利益を出して食べている。それで継続して動いている。しかし民家というのはそういう

う今の経済の流れの中でいっさい動いていなかった。そこにあるものを持ってきて組み合わせてつくった。立米いくらとかではなくて、要するにお金ではなかった。力を合わせて建てたという感じだと思う。

・民家の再生がすごく難しいと思ったのは、どうしてもお金ではからざるをえないところ。予算がなければできない。その辺のところで、大工の高橋さんは、基本的にはこの民家が造られたときと同じ気持ちで建てているのではないか。日高市に学童保育所を建ててくれと頼まれたとき、条件が地場産材を使えということだった。そこで設計士さんが、うちに来て、その時プランはできていたが、「学童保育ってなんだ?」という話をしてもらった。予算が1700から1800万の平屋、30坪。ふつうだと、プレハブとかそういうレベルのものしかできない。ところが、「生活の中の学童保育ってどういう位置にあるんだろう?」ということで色々うちで話し合いをした。そしたら「これはお金じゃない」と。ここで俺たちがやらないと何もないと思って高橋さんに相談したら「よしやろう」ということで建てた。完全に乾かした6寸角の柱があった。最初から赤字覚悟で6寸角の3mと4mだけでつくるということになった。要するにそこにあるあるからそれでつくろう。あるものを造って建てた。赤字だったが「きっと子供の心に残っていく」とお母さんたちにいわれて「やってよかったな」と思った。

・その時やるかやらないか。お金じゃない。やるかやらないか、出会いだと思う。いろんな人に出会ったけど出会いは必然。その中でも自分の商売を、自分は必要だからやるんだってつもりでやっている。家づくりで儲けるっていうのは違うんじゃないかな。もちろん食べて行くだけのお金はいただくけど、もうけるというのはいけないような気がする。かつ素晴らしいものができたらしいと思う。そこに自分の存在があると思う。

益子 ・ありがとうございました。民家の再生なんかやっていると、関わる人間の一番ヒューマンな感性を問われる。それでなおかつ経済性を持ったり安全性をもつたりしなければならない。実際お金をいただくとその辺の感性と経済との摩擦なんかあつたりして、そこで色々鍛えられるのか、またある意味ではその仕事に鍛える道場みたいな役割を果たす気がする。

・懐には残らないが、ハートには残る。それがつらいし、喜びもある。

高橋 ・大工と設計っています。何で設計しているかというと、こういうのを設計しても誰も建ててくれないから自分で建てるしかないというのが出発点。基本的には伝統工法を用いて建てる。現在は自分に直接来た建て主の仕事と、一昨年からは同人の設計した建物を僕が建てるという仕事も徐々に進みつつある。

・大平に来て感じたこと。

民家について。三宅島と白川郷を調査した。調査の主眼は、その土地の原型がどんな姿か。そういう視点から大平を眺めると部分的なところでは、大平も三宅も白川郷も似た特徴を持つ。一つは建物が間で構成されていること。また、間取りを構成する4面の壁面には①差しがもい、②差しがもいと板壁、③貫と壁板のみ④一番大きな梁の4つのパターンがある。

面白いのは大黒柱と向かい大黒にかかっている大きな梁が実は上にのっかっているんではなく差し込まれている。ヒロマっていうのは実は大きな広間だけど厳密にいうと二つに分かれてしまう。それを二つに分かれているけど一つにつながっているという意味で、民家の大きな特徴として、大黒柱と向かい大黒、そしてそれを背骨のように使っている梁が、何よりも大きな特徴だと思う。

うちの仕事ではできるだけ背骨をつくるということを意識している。建物の背骨をどこにつくるか、そしてそれにあら骨のようにかかってくる梁が一つの大きな空間を作り、それに差しがもいなどで構成されている間が有機的にかかっている。という意味である原理原則とみたいなものが流れているのかなと見ている。特に象徴的大黒柱と大きな梁は必ず一カ所しかない。非常に中間領域的な概念のようなものを感じる。間仕切りをつけて二間に分かれているんだけど、一つの大きな空間を作っていて、梁なんだけど、差しがもいのように横差しになっている。大きな背骨の存在っていうのが僕の関心事で、精神的な象徴というものや骨格を感じる。今の建物で最もなくなったものは骨格になるのだ。

・材料の使い方

ある材からスタートする。どの材も同じレベルではない。思い入れもある。民家の成り立ちが持つ人間くさ、生態に似た姿をとどめている。そんなものを感じて民家が大好きだ。

益子 ・再生工事の経済学というのも大事ですので、坪10人工が13人工になったり、大工さんと鈴木さんも大変だったと思いますが、その辺をお聞かせください。

鈴木 ・那須の仕事は予算的に厳しく、時期的に非常に急いでいた仕事で解体しながら設計していた。施主のこういう仕事は時間かかるということを納得していただいて、色々吟味しながら仕事を進めるのも大事だと反省しています。建物は35坪、2600万円くらい。

益子 ・突然ですいませんでした。民家再生に関してみなさん色々意見議論があると思いますが、大事だと思うのは、森山ゆきさんが訓練校で大工仕事に励んでできた血豆が語る事実というのは最も革命的な作業ではないかということだと思っていま

す。そういう頼もしい仲間がふえつつあり、大平も今年で3回目でこれから続いていけば一戸建ての家を建てる力も付くのではないかと思いますので、その基金としてこの3日間で販売している資料をお買い求めいただきたいと思います。ありがとうございました。



第一分科会「住まいと望ましい住まいの在り方について」

レポーター 長谷川 順 持・サポーター 斎 藤 彰

記録 当時筑波大学4年 高村幸江 千葉由歌子 松尾浩志

この第一分科会は、望ましい住まいのあり方、といつても住まいの理想像を論じるのでなく、設計者としての長谷川順持がどう住まいを提案してきたか、設計にとりくんできたという具体的な内容となった。

まず長谷川さんの生活に対する思い入れはとても深いものがある。生活とは字のごとく生・活ともに“いきいき”することであり、その生活の舞台となる住空間は生活を限定するものではなく、人の暮らしに活力を与えるものであると長谷川さんは述べている。

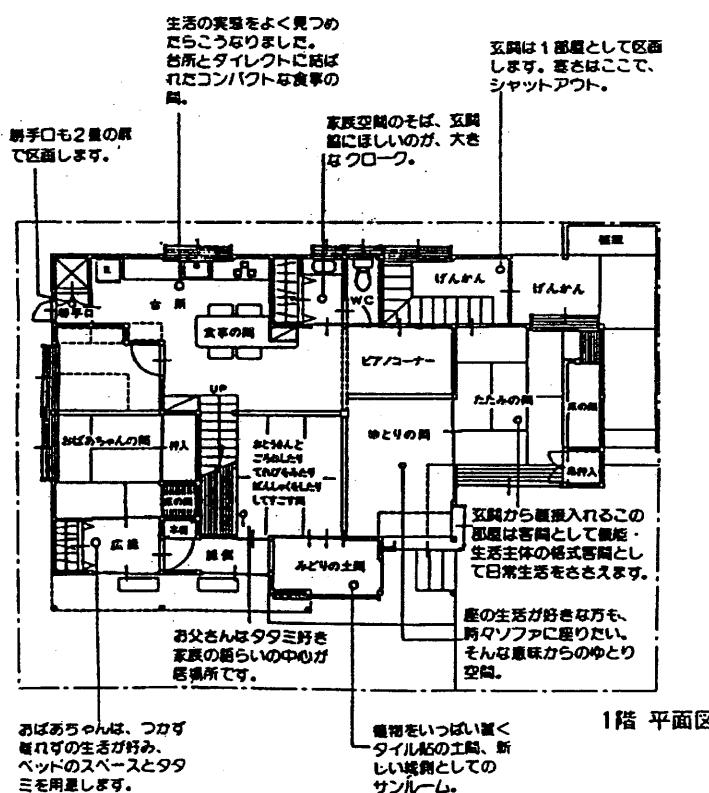
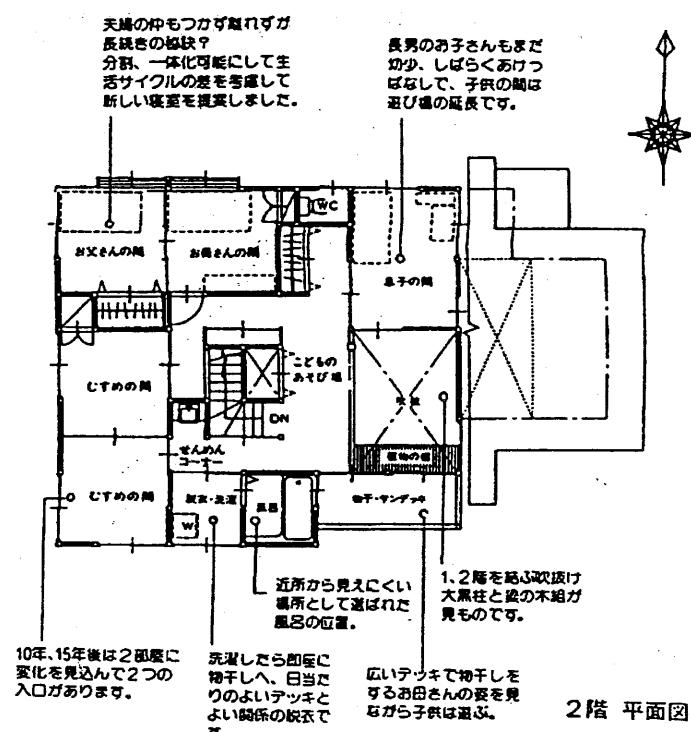
ライフスタイルということを都市的なものや西洋的なものに対するイメージで捉えがちであるが、それは誰の生活にも潜在しているものである。もっとしっかりとした生活の形として意識されるべきではないだろうか。日本人は本来の自分達の生活をとかく卑下しがちであったように思う。戦後、高度経済成長の中で合理主義の名のもとに、LDK型の提案、規格化住宅を多くのハウジングメーカーが実施してきた。部屋で家を細分化し限定するそれらの住宅に、私たちがあこがれを抱いていたのもまた事実であるが、それらは私達の暮らしをきゅうくつにしてしまった。なぜなら、それらの型が本来の私たちの生活に根付いたものではなかったからである。

それに対し、柱と柱の間で構成されるいわゆる日本の住空間は、この日本の風土において暮らしのなかで工夫され完成されていったものである。その融通性のある空間は、日本人にとって本当の意味で暮らしに合理的であるといえるだろう。

「単に室を連続させたものは室取りと呼ぶべきであって、本来間取りとは柱4本のなかに生まれる間という空間を、住み手のライフスタイルにあわせて設計されたもののことであるべきだ。」と長谷川さんは述べる。それらの具体的な実践として「わが家の生活カルテ」を依頼主と共に作成するなどしている。家を部屋名で考えるような間取りパズルで住

み手の空間イメージをしばませるよいなことをするのではなく、その人が今までどう住んできたのか、これからどう住みたいのか、話し合い調査することを重点においているようだ。そうした日々の努力によって住み手と共に成長できる素晴らしい家づくりを長谷川さんは実践している。

この分科会は、設計者としてご活躍の方々が多数見受けられたが、この文章をかいっている我々学生達にとってもたいへん勉強になった。



第二分科会「伝統技術を明日にいかす」

レポーター 吉田桂二・サポートー 立松久昌

記録 当時筑波大学4年 加藤英司 佐々伸子 曽我部知明

第2分科会では、吉田桂二氏の仕事の紹介と、大平に対する思いが語られました。後半の質問会では多くの意見が飛び交い、大変盛り上がったものとなりました。

・仕事4題の紹介

(1) 藤沢の家

住宅の設計をするとき、氏派まず架橋の枠組みを考え、その中に間取りを入れていくという手法をとっている（架橋グリットプランニング）。この家の屋根は入母屋屋根であるが、架橋の形から必然的に入母屋の形になることがよく理解できました。伝統構法はプランニングの方法から覚える」という氏の言葉が印象的でした。

(2) 那須の家

民家の再生型住宅。氏の「民家は2K2Fである。すなわち、暗い・汚い・冬寒い・不便。この4つをクリアしないとだめなんだ。」という言葉が印象的でした。昔は良かったという懐古主義ではなく、むしろ新しい“民家”を作ろうとする氏の前向きで力強い思いが伝わってきました。

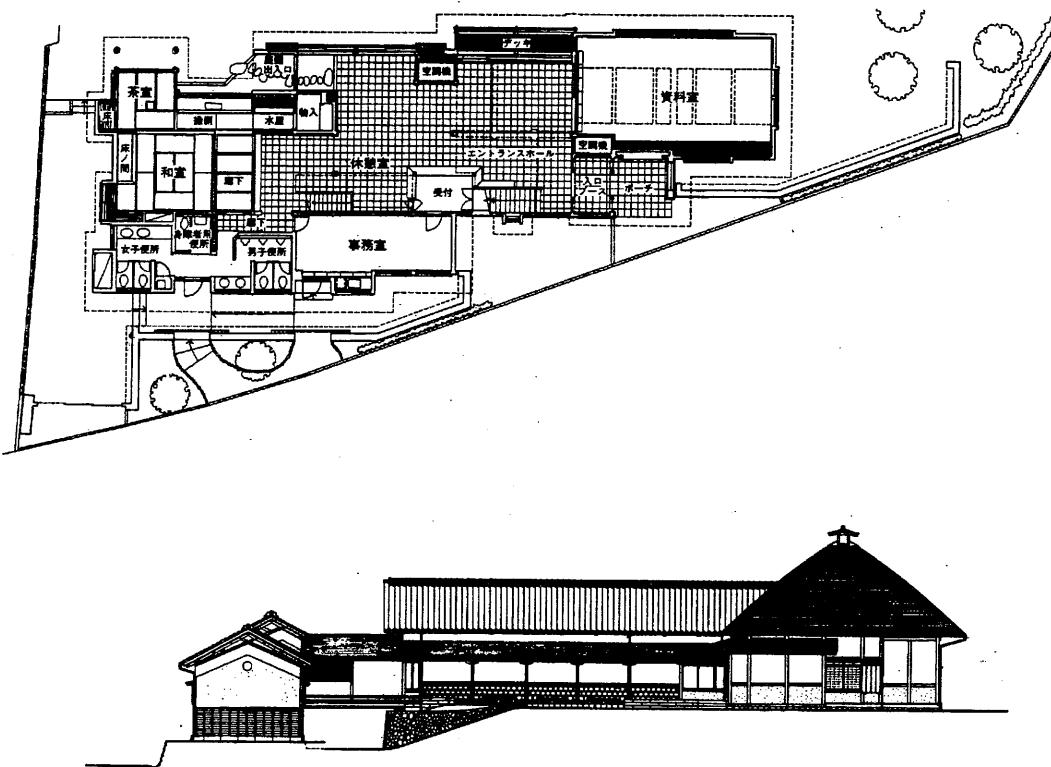
(3) 坂本善三美術館（熊本県小国町）

本館は小国にあった古民家を移築。フランス製瓦がとても印象的でした。メンテナンスにあまり手がかかるなくて、起りや角の丸みを出せる材料がないものかと探したところ、この瓦に行き着いたそうです。何となく板葺きにも見え、とてもいい雰囲気です。素焼きなので、泥が積もれば苔も生えてくることでしょう。

また「出来るだけ美しくなるように風景にまとめていく」ために、種々きめ細やかな工夫が凝らされていて、感銘しました。

(4) 奈良だいしう院庭園文化館

氏は、奈良市が都市計画道路によって壊してしまったガクジン長屋に対し、奈良市民が非難したのを聞きつけ、この文化館で町並みの復元という形でそれを再現されたそうです。これにより、この文化館は周りの景観に溶け込んで、非常に調和の取られたものになつていると感じました。



・吉田桂二氏への質問

参加者全員で一言ずつ質問や感想を述べたのですが、そのうち2、3紹介します。

Q：今まで影響を受けたものは？

吉田氏：沢山あります。何にでも影響を受けます。そしてそれを頭の引き出しの中に入れてしまい、何かする際に自然に出てくれば良いのです。

Q：旅行の際のアドバイスをお願いします。

吉田氏：繰り返し行って見ることです。観察眼はだんだん鋭くなります。何か見ているようで見ていない人が多い。見る目を養うことです。見る目が鋭くなると、楽しくやみつきになります。

Q：木造伝統構法が存続の危機に瀕していますが、どう思われますか？

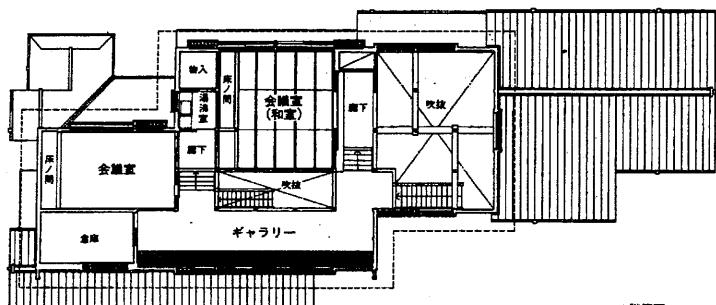
吉田氏：あなた自身がどう思っているかが大切です。また、いい大工さんがいなくなったらそうなったのではありません。大工さんがやりたくてもまともな仕事がないという現状があります。であれば、そういう（まともな）仕事を作るべきです。何も特別なことではないのです。

・大平について

大平の再生の秘話や、今後の利用についての吉田氏の考えが話されました。

吉田氏によると、改築の際、“生活の原体験”を再現することが念頭においてあり、その為に電気・水道・風呂などをどうするのか、いろいろと検討したそうです。それで今のような形になっているわけですが、氏は後

々トイレは水洗にする等を考えたいと述べ、“生活の原体験”については「結局は程度問題であり、いろいろ生活の快適性はつくらねばならない。」と締めくくりました。民家の改築については、方々で様々な議論があるようですが、あくまで住み手の立場で話す吉田氏の姿勢が印象的でした。



△2階平面

第三分科会「環境と共棲する家」

レポーター 高橋 正巳十田島美紗子・サポーター 芳井 浩

記録 石井達也（日本工業大学建築科大学院2年）

世界中の集落はそのほとんどがその地域の厳しい環境に合わせてかたち造られ、いまも我々の便利さや基準とは別の価値を持って生活している地域が多くあると聞きます。一方、「人に危険で地球の資源を消耗し続ける」電能住宅が氾濫しているこの国では、現在「人の地球に優しい」環境共棲住宅という言葉が家づくりのコピーとして盛んに使われております。もっと便利に快適にと望む一方で、省エネ技術の開発が国をあげて進められている現実を見るとき、どこかずれているのではないかと感じてしまいます。この分科会では、環境と共に棲む家づくりという当たり前なことを素材や構法の面から見直してみたいと考えます。

高橋 昌己

1. 雨水利用

雨水を溜める事で、冷暖房の補助、加工水の節約を行う。また地下に浸透させ、地表面温度の上昇を抑制する。

2. 地域緑化

小規模宅地開発においても、踏圧地や屋上、壁面、駐車場の緑化を行うことで、建ぺい率50%未満の開発では地盤面での緑化率を40%位まで確保することが可能である。

都市において、緑化率が50%になった場合2~3度の気温の低下が期待できる。

3. 建物配置の工夫

住宅地における建物配置においては、日陰の面積（冬至12月22日頃）や、風の通り道（7~8月頃）を検討する。

4. 調湿・調温機能材料

土壁などの多孔質な材料は、梅雨時期に空気中の湿度を吸い込み、真夏の暑い時期に室内の水分を外部に蒸発させる。この時の気化熱で室内が冷やされ、輻射熱の少ない涼しい環境がつくりだされる。

隙間の多いこれまでの住まいと現代の高機密で透湿抵抗の大きい建物は温湿度の管理に対して、前者はエネルギー消費が大きく、後者の場合はエネルギー依存型の建物になってしまう。建物自体を吸湿性のある材料で作る時は材料の特性が省エネに働く。

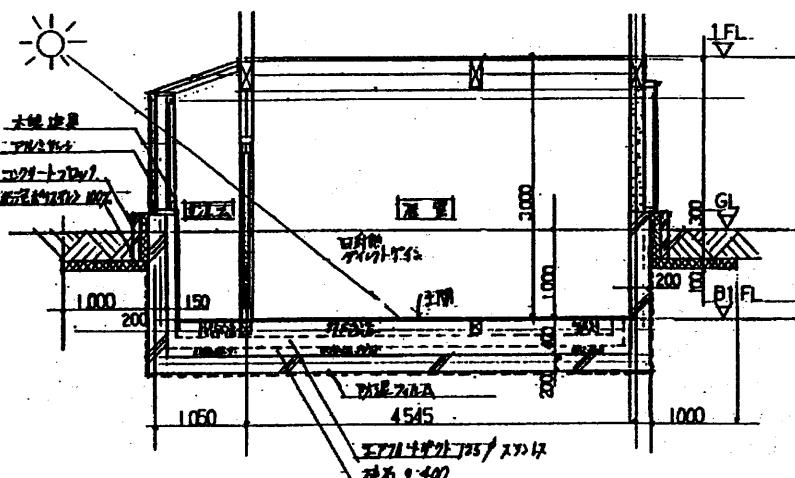
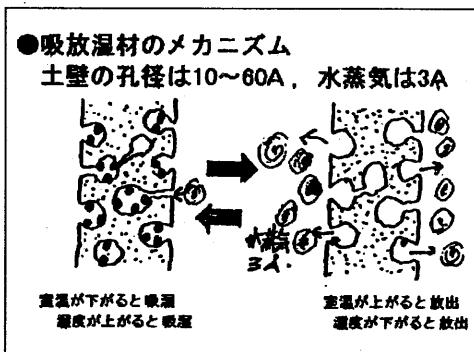
5. 土間蓄熱装置

長期蓄熱方式：夏期に集熱して冬季に床暖房などに利用する。

冬季に冷熱を蓄熱し、夏期に冷房として利用する。

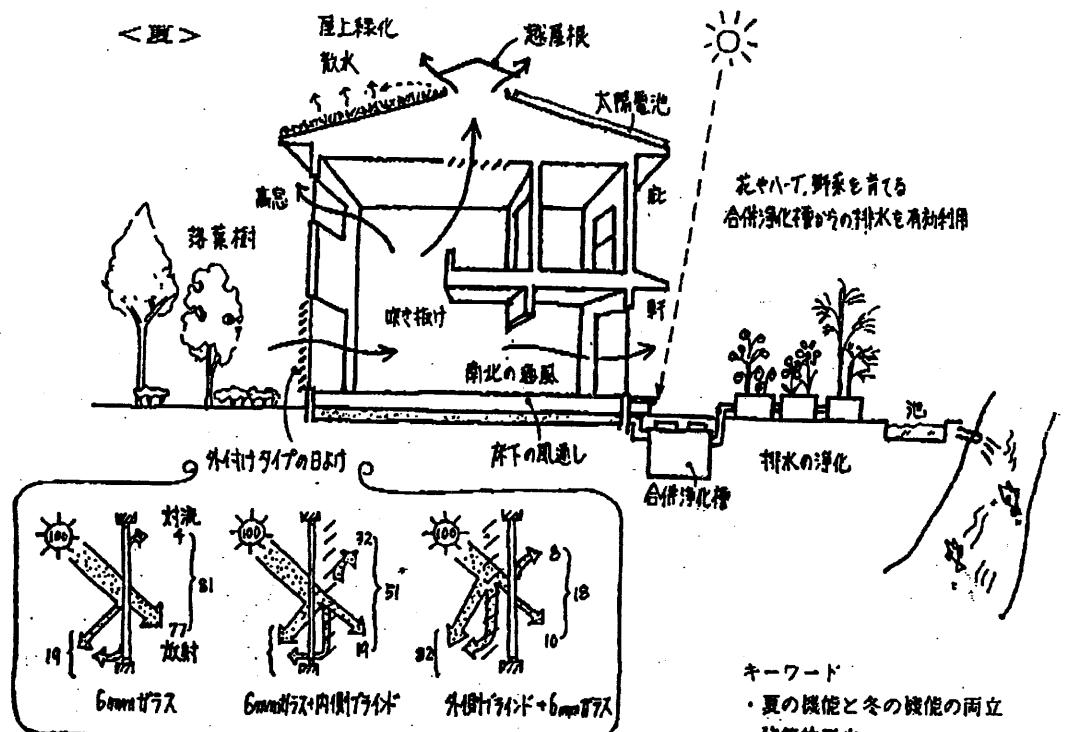
短期蓄熱方式：昼間の日射熱を蓄熱し夜間の暖房の補助に利用する。

外気を土中パイプに通して除湿冷却させ冷房補助として利用。

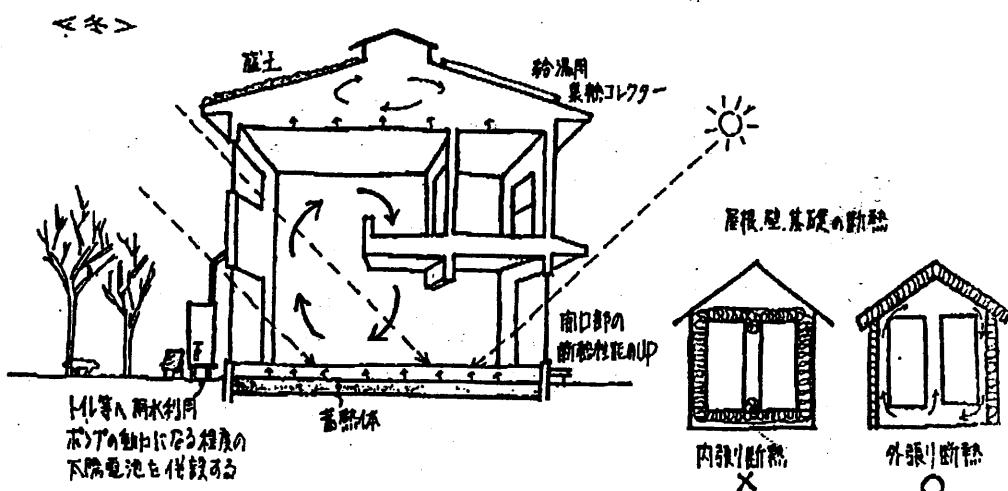


「環境と共生する」という事は、
「自然のままが良い」という事ではない

Tajima, Misako



- キーワード
- ・夏の機能と冬の機能の両立
 - ・建築的工夫
 - ・省エネルギー
 - ・緑との共生
 - ・水のリサイクル



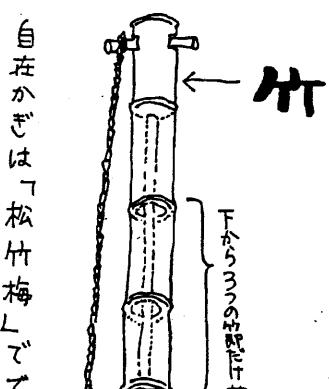
第四分科会「生活の道具をつくる」

レポーター 羽場崎清人・サポートー 大平 秀和

記録 大工見習 森山 ゆき



スイッチを押せば電気がついて、
まわせば火がつく。この
生活の矢張りと思ひ
人間もっとかしこく

 <p>自在かぎをつくりよう</p> <p>自在かぎは「松・竹・梅」でできています。</p> <p>自在かぎは「松・竹・梅」でできています。 下からうつた竹節だけ抜く。</p>		<p>壹 竹</p> <p>竹のキウをノソで切る。</p> <p>式</p> <p>鉄の棒ナードで 下からうつた竹節を抜く</p>
 <p>五 松の木を一本切る。</p> <p>最後にちよとコッペからセワる</p>	<p>五</p> <p>こっちに倒れてゆがむ こっちに倒れるので、よけて おこう。しかし かかいでいる所 に倒れる 方向が 変わつて くる。</p>	<p>六</p> <p>40ドミリ ぐらで穴を さす と くつに 切る。</p> <p>このようにくじき くじきと気合を入れる</p>
 <p>九 梅</p> <p>長めの枝を切つてある</p>	 <p>枝ぶらけで痛ら</p>	<p>梅の実は「しづく」と かた。</p>
 <p>十 組み立て</p>		<p>十一 鎖をつける</p> <p>大工</p>

自在かぎつくりは
子供達が「コヤナタで
切つたり、けずつたりで
大活躍でした。

こんな体で学ぶ分科会は
子供も大人も参加できるし、
楽しいので、来年はもっと増え
たらいいと思います。来年も
やろう!!

蛇口をひねれば水が出て、ツマミで便利な世の中ではしゃぐ
出そう!
たくましく!!

参



木の上の方に穴を開けて
通す

四 森

間伐をして森の中の日当たりを良くしないと
全ての木の成長が悪くなってしまう。今の大平にとって
間伐をするのが自然保護になる。

七



皮をナタでむく

八

鎖を巻きつける
ここで魚の形にしてもグー

十

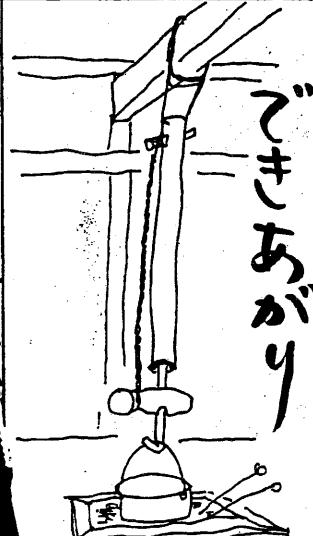


枝を抜いて、松の木を倒す

十三



いいよリの木の木

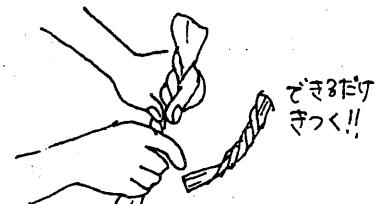


新聞紙だけでご飯をたべる

大地震が来て電気やガスが止まても、あたふたすることはない。

新聞紙1日分の燃料で1日分のご飯(4合)がたけるのだ。どうやるかというと…

新聞紙を一枚ぐらいとにかくさつくさつくギューヒねじる。



できただけ
さつく!!

紙は元は木の繊維だからギューと固めて元の木と同じ状態にするのです。

あとはまさと同じようにやる。

たくさんこの「新聞まき」を投げると、何気に赤く炭火状態になるのです。このチャレンジは夕食時間にまでいいんだ。時間はかかったが(クレーンないと木がれきも使ったけれど)、なんと7日間分の新聞で28合もふくらとたけてしましました。みなさんあつかれ様でした。



味はもちろんグーでした。
天ぷら
新聞紙4合

民家芝居「風のレジェンド」ができるまで

内藤 敏介

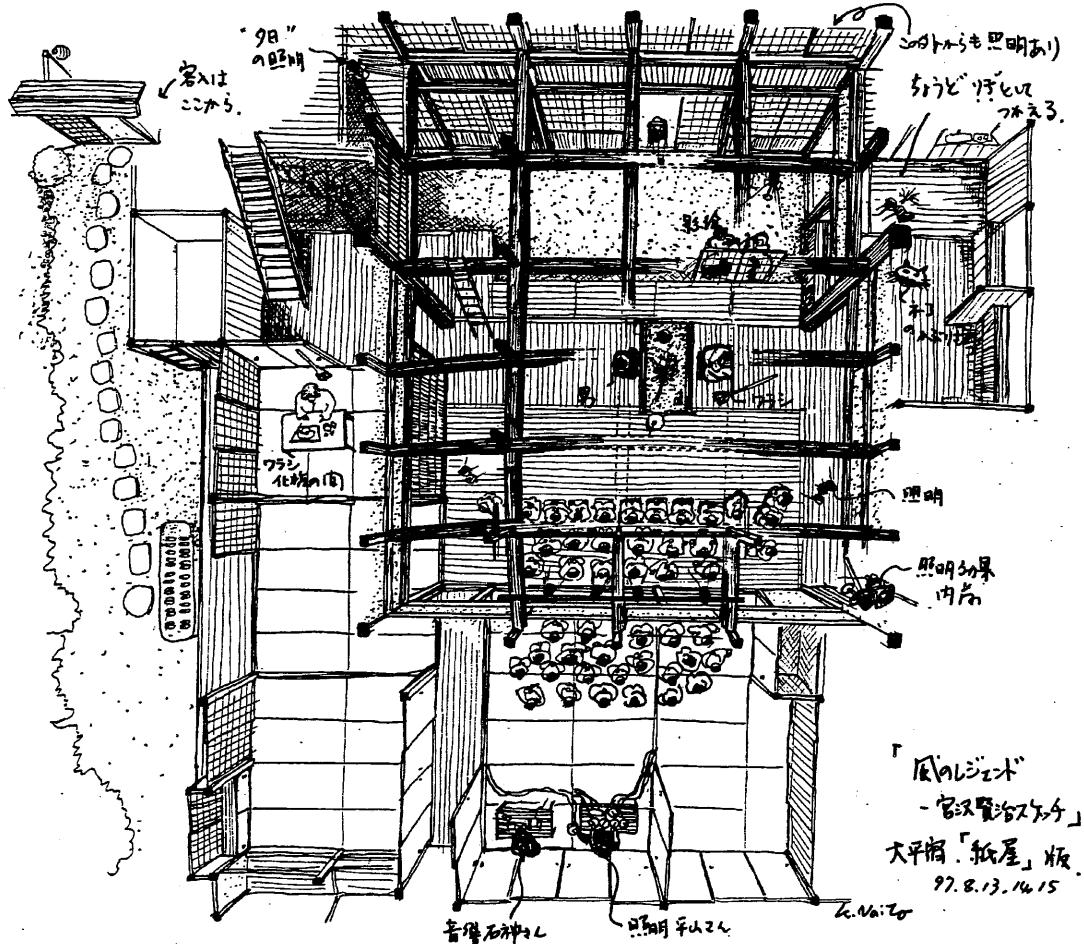
昨年11月、吉田先生の大平宿の歴史を描いた紙芝居の原画展オープニングパーティーからこの芝居づくりは始まった。その席で、劇団「風の街」の役者江良潤さんと彼等の芝居の脚本も手がけている熊谷監督（映画監督でもあられるので監督と呼ぶ）の二人と出会った。まったくの初対面であったが、私自身も学生以来、芝居づくりに多少ながらかかわってきてることもあるって、瞬時に意気投合。そして話しひのはずみだったのか、ほろ酔い気分のせいだったか、「大平宿の民家で芝居をやりませんか」と二人に話しを持ちかけていた。聞いてみれば、劇場での自主公演活動を年2回位のペースで続けてきているが、なにかこれまでとちがうスタイルの芝居づくりをしたいとちょうど模索中であるという。そうであればなおのことと、「是非やりましょう」と話は盛り上がる。こうなると話しひは速い。その場で吉田先生や同人メンバーの了解を得、翌年の「大平建築宿」での芝居上演が決定する。酒の勢いなどと先に述べたが、かねてから古民家空間をつかった芝居を機会があれば企画してみたいと漠然とあるが思っていた。また、ちょうどそのころある古民家移築のため実測を終えたばかりで、民家を残すことプラスアルファーの空間利用の方法に思い巡らしていたことも大きく動機として働いた。

年が明けると、熊谷監督、江良さんたちと企画会議を重ね、芝居の方向性をつめていった。まず会場は、大平宿でもっとも大きな民家である「紙屋」で、写真や図面などを見てもらいながらロケーションや空間のイメージを伝えていく。芝居の内容は熊谷監督が温めてきていた宮沢賢治をテーマとする。役者は二人。上演時間は1時間。「風の街」と「生活文化同人」の共同制作とすること、一般向け上演も行うこと、などが決まっていく。2月に入ると早速に熊谷監督が、台本第一稿を書き上げてくる。タイトルは「風のレジェンド—宮沢賢治スケッチ」。舞台は山奥の民家、ザシキワラシと死にそこなった都会の男が登場し、いろいろを囲み宮沢賢治の作品を演じていくというストーリーである。その時点では大平を訪れたことのない監督であったが、「大平宿」や「紙屋」の雰囲気をあたかも見て書いたかのような印象の作品となっている。さすがである。配役はワラシに江良潤、都会の男星野に佐藤二郎。The show must go! いよいよ実現に向けて動き出した。次に問題となるのがスタッフ編成。いかんせん低予算の公演であるため、趣旨賛同のうえ、限りなく友情出演的参加を各人にお願いするしかない。何ともつらいなかでの協力要請となる。音楽は当初ありものを使うことで検討していたが、監督の知り合いで、オペラや映画音楽の作曲

を手がけている加藤由美子さんにオリジナル曲の作曲と演奏をお願いすることになる。さらにうれしいことに加藤さんの友人のソプラノ歌手、横山政美さんがピアノ曲に歌をのせてくれるという。音響（ミキシングや効果音）には「風の街」のなじみであるベテラン石神保さん。劇中の影絵芝居の人形とワラシの衣装製作には、教育テレビの人形劇なども手がけている小宮礼子さん。照明には私の学生時代の芝居仲間で、現在文学座所属の平山奈美さん、照明助手兼舞台監督には、同じく仲間でミュージカル俳優である戸田洋二ダリオ君（この二人には涼しい高原でバカンス気分でなどと誘いをかける）。それぞれ、快く引き受けてもらえたようで一安心。力強い錚々たるメンバーが揃った。

4月に入り、台本の第2稿も上がり、週1回のペースで読み合わせが始まった。そして、5月半ばに2泊3日で大平へ下見に出かける。メンバーは、熊谷監督、「風の街」の江良さん、佐藤さん、大塚さん、照明の平山さん、同人から松本さんと私である。目的は「紙屋」をどう舞台として使うかの現場検討、市役所や教育委員会、文化会館などへの協力依頼の挨拶まわり、プロモーションビデオの撮影などである。何といっても「紙屋」を芝居空間としてどう料理するかの実地検討は重要な作業である。というのも劇場の芝居では、作品や演出に合わせて装置をつくるのに対し、今回は存在する空間をそのまま舞台装置として扱わなければならないからである。「紙屋」の空間と向い合いながらそれぞれに知恵を出し合っていく。梁組がダイナミックな土間側を舞台にし、座敷側を客席とする勝手がどうも良さそうである。影絵芝居のスクリーン用に白布を用意していったが、障子を使ってみるとこれがなかなかの味。真っ暗な中でのいのちの火だけのあかりどんなものか試してみる。いのちの上の裸電球もけっこう効果的だ。通りに車を持ってきて、障子を通して外からヘッドライトを照らし「銀河鉄道の夜」のシーンの雰囲気を作り出したりする。民家空間ならではのアイディアがいろいろと浮かんでくる。そして、実際に役者が演じ、静寂の中、民家空間に声が響くと「紙屋」が芝居空間として瞬時に息づいてくるのが分かりゾクゾクとする。民家空間おそるべし、どっしりとした手応えを感じた。

東京に帰り、本格的に稽古が進められた。地元の人にも是非たくさん観てもらえばと、当初1日であった一般公演を2日間にする。あとは、いかにPRして動員を図るかが勝負である。チラシを刷り、各方面へ送付を始める。2日で150人位は、当然集まるように私は思っていたが、どうも申込みの動きが相当に鈍い。プレス発表もし、地元新聞にも取り上げられ、なんらかの反応があってもいいはずなのに。そして、7月に入ったころ、ワラシを演じることになっていた江良さんから残念な連絡が入る。レギュラー出演中のテレビドラマの収録と大平公演の日程がどうもかち合いそうだと言う。半年以上にわたり準備を進め、稽古も相当進んできている中。ショッキングな出来事であった。急遽、代役を「風の街」の大塚洋さんにお願いすることになり。快く引き受けてもらえる。とにかく本番ま



あと1月余り、なんとか乗り切るしかない。

8月になると、広い稽古場を借りてのリハーサルが始まった。オリジナル音楽や効果音、影絵の人形、衣装などが続々とでき上がってくる。どれも相当に本格的である。照明の奈美ちゃんが電気の容量が少ない「紙屋」でどう勝負するか。頭を捻っている。東京での最終リハーサルを無事終え、8月11日深夜、いよいよ大平へ向けて出発する。久しぶりにわくわくする瞬間である。飯田に着き、大平の改修工事にたずさわった証建築社から軽トラを借り、飯田文化会館から迫り出し舞台用の平台などを大平へ運ぶ。「紙屋」を大掃除し、仕込み開始。大量の照明器材を奈美ちゃんが文学座より搬入。「紙屋」と「からまつ屋」(延長コードで引き込み) 合わせて30アンペアの容量に対し、大小合わせて30近い灯体を仕込む。各シーンに合わせ、細かにつけ消ししながら最大の効果を出そうという作戦である。調光装置も今ではほとんど使われないであろう、漬物石に木製のレバーを付けたようなもので、合計7台を一人で両手、両足を操作するという。そして無数の配線。根性ものである。上からの照明は、角材を梁に渡し、取り付け、一部小さいものは、小屋貫に直止め。当然梁に上っての作業となるが、梁の上に積もり積もった煤やほこりが大量に落ちてくるため、その都度床掃除といった塩梅。苦労の末、セッティング終了。続いて場当たり(役者が実際に舞台に立って、照明の当たる位置を調整すること)。明りが入ると「紙屋」が一気に色気づき、何とも言えぬ味を出し始める。もうしっかり劇空間である。深夜12時を過ぎこの日の作業は終了。う~ん、いよいよ明日が初日。ビールがうまい。

こうして、「風のレジェンド」の幕が開いた。そして3日間の公演。合計で170人程のお客さんに観てもらうことができた。欲を言えば。もっとたくさんの人に足を運んでもらいたかったところだが、何より皆さんが喜んでくれて、それぞれ何か心に感じてもらえたようで、民家芝居「風のレジェンド」初演としては幸先いい結果となった。

「こころ癒す芝居をつくりたい」との思いで熊谷監督が描いた本が、素敵な役者、スタッフ、そして大平民家が出会い、ひとつの作品として完成した。そして、現在、今後の全国展開に向けて劇団を中心に広報活動を開始しており、「ぜひ、この民家で」とのご要望があれば、どこへでも飛んでいくとのこと、皆さんのご支援を期待しております。

南会津「山村道場」問題レポート

農村復興の学舎の再生へ

鈴木喜一建築計画工房

I

旧・会津山村道場の保存をめぐる動き 【鈴木喜一】



福島県南端に位置し、会津西街道の宿場町として栄えた南会津郡田島町は、現在人口約1万4000人。未開の山岳林野が89%を占めるという典型的な中山間地である。

田島町が96年の9月、旧山村道場（現田島町立野外活動センター）一帯を含む「整備事業構想」を発表した。山村道場の建造物群及び周辺の自然がどのように守られていくのか、町はいま、揺れ動いている。【聞き手／生活文化同人・日影良孝】

●まず会津山村道場について概略をうかがいたいんですが。

そうですね……。最初に、会津山村道場の歴史的な位置づけを簡単に話しておきましょうか。アメリカから始まった世界大恐慌（1929年）がありましたね。その余波を受けて、日本も不況のどん底にあえぐことになる。農山村の疲弊もしかり……。そこで国は村再建のリーダーを養成しようと、全国各地に「農民道場」の設置を計画するんです。

農民道場とは、師弟が起居を共にする全寮制の塾舎教育であり、農業、林業、畜産等の知識を体験的に学び、鍛錬していくという真剣で実際的な農業後継者育成施設でした。会津山村道場はこうした背景の中で1937年に誕生したものです。全国各地に建てられた41箇所の道場は、農民道場、山村道場、漁村道場の三種に分類されるのですが、山村道場はこの会津山村道場が唯一のものでした。

●山村道場設立後の時代は厳しい戦時下でもあったわけですね。

確かにそうです。山村道場の古いアルバムなんかを見ると、モンゴル遊牧民の移動

●会津山村道場設立後の経緯

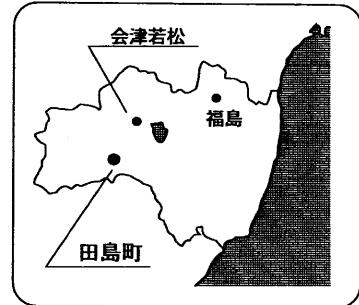
- ・1937年、福島県立会津山村道場設立
- ・50年、会津経営伝習農場と名称変更
- ・61年、女子の養成も併せて行われる
- ・71年、会津経営伝習農場廃校。

県立野外活動センターとして主に青少年の宿泊施設として利用されるようになる。

- ・89年、県から移管されて町立野外活動センターとなる。

式住居（パオ）をイメージした日輪兵舎などがあるんですね。大陸を睨んだ教育というのもあの時代ですから当然あったのでしょう。

しかし、その中で山村更生運動の一環として、地道で懇切な教育活動が実在したということは事実なんです。これは日本の近代教育史という観点に立ってみても大きな価値と意味があると思います。



●あなたは月刊『住宅建築』9月号に、「今、時を超えて復活する会津田島の山村道場」という文章を寄稿していますが、山村道場を復活させながら保っていくことの意味をどのように考えているのですか。

田島町の助役が語っていました。「山村道場は貴重な歴史をもった建物だ。だからその精神は引き継がなければならない」と。確かに精神を受け継ぐのであって形を受け継ぐのではない。しかし、精神をどのように受け継ぐかというと、やっぱり今ある形で受け継ぐのが一番自然なわけなんです。精神の実態を形として保ちながら、つまり現施設の全面的な維持・修理と周辺自然環境保存ですね。そしてこれを有効に活用しながら未来の子供たちに引き継いでいくことの大切さを、僕は強く感じています。

●山村道場が壊されるかもしれないという話を聞いたのはいつ頃ですか。

馬宿シンポジウムが会津田島で開催された96年の秋ですね。

シンポジウムが終わってから、確か地元の人たちとの懇親会のさなかだったと思います。南会津地域文化研究会の樋口弘一さんから聞いたと記憶していますが、あの時の彼の切実な目が印象に残っています。そうか、「レジャーランド構想」として開発プロジェクトが秘密裏に進行しているのか、困ったなと思いました。

●馬宿シンポジウムとはどういうものだったんですか。

僕が移築復原工事を担当させていただいた馬宿（うまやど／国指定重要有形民俗文化財）の復原経過写真展が田島で行なわれたんです。その記念行事としてのシンポジウムでした。

民家保存は新しい価値創造であるとか、自分たちの文化にプライドを、といったようなことを、馬宿の中で実際に囲炉裏で火を焚きながら語りあいました。70人ぐらいの集まりだったんですが、その時にね、僕は馬宿をつくった大昔の、約200年前ですが、当時の棟梁や職人たち、ここで暮らしてきた人々、そしてともに生きた馬までが目に浮かんてきて、楽しそうに見守りながらニヤニヤ聞いているなって、感じていました。

馬宿が移築されている奥会津地方歴史民俗資料館は、実は旧山村道場のすぐ脇に建っているのです。そしてシンポジウム参加者たちはそのまま、野外活動センターと名を変えた山村道場に泊まったというわけです。

●シンポジウムでは山村道場の話題について触れましたか。

そうですね……、その時はまさかこの山村道場が壊されるという話があるとは知りませんでしたから。でも『住宅建築』編集長の植久さんが、やっぱり火を焚きながらのんびり

できるような体験型、長期滞在型の施設がいいね、どこにでもあるような宿泊施設はいやだね、という話のなかで、山村道場をきちんと修理・改善して、これを核としたまちづくりができると田島は面白いという発言があって、僕はそうだと素直にうなずいていました。ところが、その直後の懇親会で山村道場一帯の開発構想を知りました。

●国の方策や個人の利権とも大きく絡んでいると思いますが。

中山間地域総合整備事業や6兆100億円のウルグアイ・ラウンド対策費等の国庫主体の補助金行政があるんですね。それに開発業者などの利権が絡んで、政治経済の重い縞帳が引き上げられようとしているということでしょうか。そのあたりは『住宅建築』9月号にも概略を紹介していますが、後に続く渡邊君のリポートでも少し話がでてくると思います。

●あなたと山村道場の関係を聞きたいのですが。

山村道場とは馬宿からのつきあいになるのですが、復原工事中はずっと宿泊させていただきましたし、工事が終わってからも毎年必ず学生たちを連れていって校外学習というか、野外研修を実施するということが続きました。もう10年になりますね。

いつ行っても、あの場所でしか味わえない匂いとか、空気、鳥や虫の鳴き声、おいしい水、季節の色とか……、東京では決してたどりつけない何かがあの場所にはありました。

●南会津地域文化研究会が熱心に山村道場の保存を働きかけていますね。

彼らは本当に情熱的な人たちです。やみくもに残せと言うのではなく、なぜ残さなければならぬか、ということをしっかり理解しています。道場の歴史的背景やその意義、近代史を理解する上で欠かせない遺構であるというこなどを地道に伝えています。

広範な署名運動を展開し、町に陳情書を繰り返し提出するなど、独立自尊の気構えをもって田島の文化を考えている人たちです。しかも理想論を語るだけでなく、現実を直視しながら計画を練り、勇気をもって実行しようとしている。流行りとか時勢の慌ただしさ

に引きづられる
こともない。今、
彼らは一生懸命
知恵と労力を出
し合っていると
ころです。

●あなたは運動
にどのような形
でコミットして
いるのですか。

たぶん彼らは
僕に対して、純
粹に客観的な意
見を聞きたいと



思っているんでしょう。彼らの方針や行動を隨時報告してくれます。僕もあの場所にはすごく愛着を感じていますから、やはりそのことを彼らはうれしく思つて相談してくれているのではないでしようか。

愛着があるからいい形で残ってほしい、生き生きと

甦ってほしいという思いが僕の中にあります。外者ですが肩を並べて同じ方向に歩いていきたいと思っています。

●あなたは今年の7月から8月にかけて田島町の山荘旦旦ギャラリーで日本の近代建築の水彩画展を開催していますが、やはり山村道場の保存ということが頭にあったんですか。

これは山荘旦旦ギャラリーのオーナーの斎藤辰雄さんからの依頼だったんですが、すぐに応じました。山村道場も南会津郡役所もすでに描いてありましたから、全国の貴重な近代建築と一緒に並べてみたら面白いなど……、田島町の人たちがどのような反応を示すのかということにも興味がありました。しかしそれ以上にやはり、山村道場の保存に少しでも役に立てたらいいなという思いが根底にありましたね。

山村道場の絵は今年の6月13日に描きました。いろんな鳥が鳴いていましたね、気持ちの良い風も流れていきました。無心で描いていると……、いつもそうなんですが、タイムトリップしてね、この道場で修練していた青年たちや教師たちの厳しくも熱き日々が少しづつ浸透してくる。つまり、絵の中に彼らが入ってくる気配を感じるんです。ここは聖域(SANCTUARY)だから大切にしなくちゃいけないと思いました。

●それは正面棟を描いたものですよね。

そうです。しかしその後も二度訪れて、ゆっくり宿泊しながら七峯館や旧場長棟も描いてみました。正面棟だけ残す折衷案も出てきたようですが、描き終えた時、やっぱり宿泊棟も含めて施設群全部を残したい、そして樹木はむろん敷地全体を残したいと感じました。

中途半端な残し方というのは、山村道場が見せ物になってしまふようでかわいそうですし、訪れてくる他者に対してそれほど力を持てないと思うんです。だから、山村道場は、精一杯、徹底的に復活してほしいと思っているわけなんです。



●周辺の自然環境は現在どのようにになっているのでしょうか。

去年の12月に行なわれた日本野鳥の会による西沢山原生林の鳥類棲息調査によって、種の保存法で指定されている危急種オオタカが確認されています。

また、8月に実際に西沢山に入った人たちは、クヌギ・コナラの林の奥に雄大に広がるブナ原生林の豊かさに感激していました。大人三～四人で抱える位のブナの巨木が、あの山村道場のすぐ裏手に膨大に息づいている、ということも忘れてはならないでしょう。

同会南会津支部・長沼勲支部長らが新たな施設計画が生物や環境に及ぼす影響を注意深く見守っているという状態が続いています。近年の道路の敷設や造成などで、自然度が徐々に失われつつあります。地元の人たちは、これ以上自然を改変しないように、そして豊かな自然に戻してほしい、と語っています。

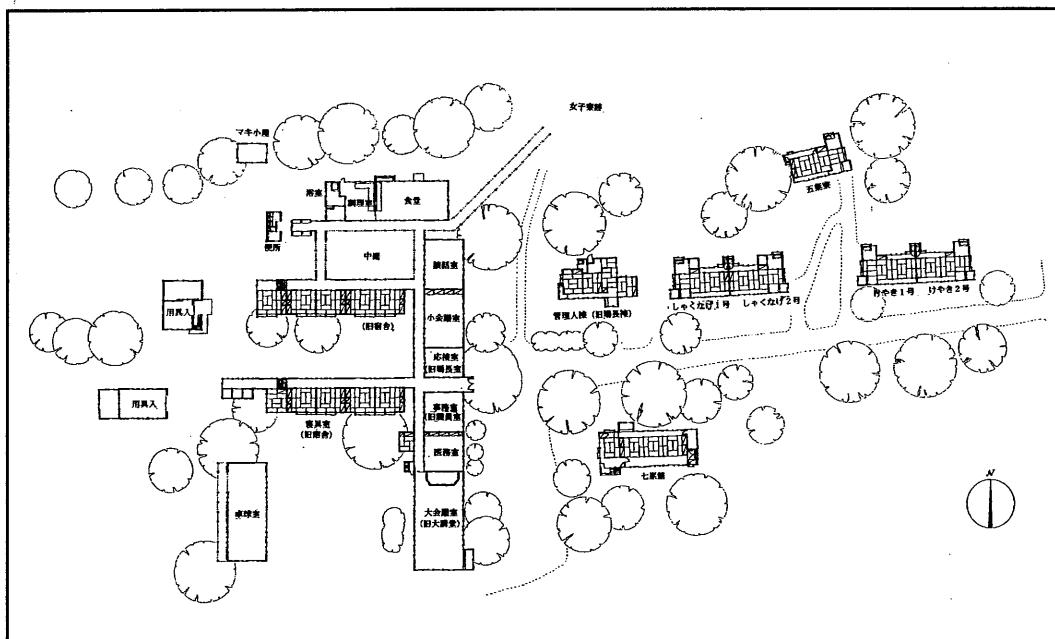
II

旧山村道場保存問題の経過と課題

【渡邊義孝】

【1】旧山村道場建築群の概要

田島町糸沢地区に建つ旧会津山村道場は、現在町立野外活動センターとして使われている。94万m²の敷地内に宿泊施設・キャンプ場、屋外運動場などの施設を設け、青少年団体を中心に年間6000人ほどの利用者が、大自然の中で研修・レクリエーション、スポーツな



どに活用している。この施設の中心となっているのが旧山村道場の建築群である。

会津山村道場は1937年、地元の大工によって建設された。現在は本館、生徒宿舎及び食堂、七峯館、職員宿舎などが現存しているが、すべて木造の平屋建築である。

各棟の構造は以下の通りである。(◎は現存、▲は現存せず)

◎本館（正面棟）……木造平屋、外壁下見板張り、屋根トタン一文字葺

◎生徒宿舎……木造平屋、現在正面棟と直角に2棟連結されている。

◎食堂……木造平屋、現在正面棟の北側に連結されている。

◎七峯館……木造平屋（かつての貴賓室で、現在の宿泊棟）

◎職員宿舎……木造平屋（現在の宿泊棟。しゃくなげ、けやき、五葉寮と命名）

◎場長棟……木造平屋（現在の管理人住居棟）

▲日輪兵舎……木造平屋、16角形平面に円蓋（パオを模したといわれる）。現存せず。

以上、いずれも恐慌直後の建造だったため、特に材料が豪華であるとは言えないが、南会津地方の伝統的な農家の意匠が取り入れられたり、シンプルながらダイナミックな洋小屋（トラス）、そしてさりげなく配置された円形窓など、当時の棟梁たちの誠実な手仕事の痕跡を今に伝えている。

【2】「整備構想」発表と保存へ向けた動き

1996.09 ●町産業建設委員会で「中山間地域総合整備事業について」「山村振興等農林漁業特別対策事業について」「野外活動センター整備計画について」の三議題が討議された。

1996.10 ●町産業建設委員会で「野外活動センター周辺整備計画について」について討議された。

1996.11 ●南会津地域文化研究会の渡部康人氏が登録文化財申請のための要請書を提出したが、町は12月になって「登録文化財の3つの基準に合致しない」と回答。

1996.12 ●町民有志による陳情。渡部康人氏を中心とした町民有志が、「旧会津山村道場を構成する建造物群の保存を求める陳情」を、同町議会の渡部恒治議長あてに提出。

「文化財保護法第三条、第四条二項の趣旨に従い旧会津山村道場を構成するすべての建造物群を現状のまま保存すること」と「旧会津山村道場について、建造物についての価値、歴史的価値の調査を専門家に依頼し報告書をつくること」の二点を求めた。

1997.02 ●『毎日新聞』福島版が2月9日付で「会津山村道場取り壊しの恐れ／『文化遺産守って』／広がる署名活動の輪」と報じる。

1997.02 ●2月17日、401人分の署名とともに「旧福島県立会津山村道場を構成する建造物群及び周辺の環境の保存を求める請願」を町長及び町議会議長に提出。署名運動は継続。

1997.03 ●上記請願は3月18日、田島町議会本会議において採択。最終的に650名が協力した署名運動はこの時点で終結した。翌19日、旧山村道場第一回卒業生の渡部寅光氏が感謝のアピールを発表。

- 1997.04 ●町は当初の施設計画を大幅に見直す方向で検討を始める。
- 1997.06 ●町はコンサルタントに全体計画を依頼したと発表。また、福島大学教育学部教授吉村仁作氏に山村道場の歴史的な調査を依頼。続いて、東北工業大学草野研究室に山村道場の耐久度調査、間取りの調査などを依頼。その後の町の動きは不鮮明となる。請願者たちは推移を注意深く見守る状態が続く。
- 1997.08 ●南会津地域文化研究会ほかの依頼を受けて、7月29日から8月10日の間、田島町内のギャラリー山荘旦旦で「いま描きとめる日本の近代建築」と題し、鈴木喜一が水彩画展を実施。全国各地に残る貴重な近代建築を紹介するとともに、山村道場のスケッチを公開する。8月2日には、同展覧会におけるギャラリートークで文化庁文化財保護部建造物課の後藤治氏が「建物を活かし文化を生かす」というテーマで発言。これを受け南会津地域文化研究会の渡部康人氏が再度登録文化財申請のための要請書を提出。
- 1997.09 ●町議会で結論が出る予定。

[3] 農業問題としての整備構想

これまで静かに町内・町外の人々を迎えてきた旧山村道場が、ここに来て突然取り壊しが論議されるようになった背景には、ウルグアイラウンド対策費など国や県の補助金を呼び込んで行なう「中山間地域総合整備事業」の性格という問題がある。

1986年から始まったGATT（貿易と関税に関する一般協定）の新たな多角的貿易交渉は、93年12月に関係各国の間で決着を見た。「例外なき関税化」の波にさらされていた日本は、コメの完全自由化を免れる代わりに、95年から6年間ミニマムアクセスを定めたコメ輸入が義務づけられる。その他にも農産物の関税引き下げや農業助成金引き下げにも合意した。

その一方で、農村を票田とする政府・自民党は「日本農業の国際競争力強化」を名目に6兆100億円を支出することを決定した。いわゆるウルグアイラウンド対策費である。

この中の「中山間地域の活性化のための事業」「交流拠点の整備」といった項目が、今回の中山間地域総合整備事業のような、本来の農業基盤整備とは直接関係のないレジャーランドの建設への国費支出に道を開いている。現在全国で総額240億円



を費やして温泉ランドなど交流施設の計画が進行しており、各地でその「農業予算の歪んだ使途」に対して批判の声が上がっている。

まさにこの会津山村道場一帯の開発事業も、当初の計画案によればウルグアイラウンド対策費などを約10億円を使って、巨大な滑り台（これだけで一億円）やオートキャンプ場、そして最新の快適なコテージといった施設を、山村道場を撤去し山林を伐採した土地に新設しようとしていたのである。

この問題は同時に、戦後日本の「補助金漬け農政」の一つの象徴と見ることもできる。主力輸出品目が遷移して激しい貿易摩擦を引き起こす度に、農産物市場を切り売りするよう開放し、工業の矛盾を農業に皺寄せする政策を続けてきた日本政府のやり方が、今回のウルグアイラウンド対策費のばらまきによる更なる地方農政や環境の歪みに帰着しているということにも、われわれは着目する必要があるだろう。

【4】保存を進める上で留意点

僅かながら山村道場保存運動にかかわる中で感じたことを列記してみたい。

(1) 地域性を失ってはならない

中曾根内閣によるリゾート法（総合保養地域整備法）施行以降、海にはハーバー、山にはスキー場とオートキャンプ場というように、全国で似たり寄ったりのリゾート開発が自然を破壊しながら続いている。だが、第三セクター方式を含めて、その町の個性を失った施設群は、リピーターを形成できず経営的にもたちゆかなくなっている例が多い。わざわざ田島まで行く人は何を期待しているのだろうかということを念頭に置く必要があろう。

(2) 補助金でつくる物はお荷物になる

補助金でつくったものは、できた当初はまちの誇りであっても、定着作業が不十分な場合やがて維持費が町財政を圧迫する「金喰い虫」と化す。短期的な予算の投下がもたらす土木・建築業界へのメリットだけでは経済効果を計るべきではない。

(3) 住民による対案の提出

外部のコンサル業者主導のプランニングが進行し、巨額の資金投下による新たな「箱モノ」建設を観光産業に結び付けようという動きが表面化するなかで、田島町議会議員（山村道場卒業生）から対案が出されている。

これは、旧山村道場建築群を最大限残してコア施設とし、自然への改変も最小限に止めながら、他の歴史的建築物の移築復原、自然及び民俗体験型施設の充実をはかる計画となっており、提出されている案の中ではもっとも健全なものひとつと思われる。

こうした案が、「コンサルまかせの発想を排除し」「幅広い意見を取り入れ」することを目

差し、地元から出てきていることは重要であり、こうした試案を発展・継承することも検討したい。

(4) 山村道場の歴史的評価について

山村道場が設置された1937年は、蘆構橋事件によって日本軍部が全面的な対中戦争にのめり込んでいた時期である。その

時代に設立された教育機関である以上「そこで国粹主義的な教育が行なわれていたのではないか」という意見がある。

裏付ける資料も少なく断定することはできないが仮にそういう面があったとして、ではこれを保存するということが、当時の道場が果たした役割を無条件で肯定・称揚することになるのかという問題は、また別の次元にあるものである。

第一に、実際にそこで生活し学んでいた人々の農業に対する真摯な姿勢とその記憶、そして地域の人々の誇りこそが建築の保存を進める原動力である。また山村道場（経営伝習農場）全体の歴史から見れば、戦後の時代の方が長いのである。農村の子弟に高度な学習の権利が与えられたことの画期的な意味は今日でも薄れるものではない。

第二に、一般論としては、保存が求められる多くの歴史的建造物が仮に「負の遺産」的な側面を持っていましたとしても、そこで起きたこと、その悲劇を避けがたいものとした歴史的因果関係を展示することで次世代に教訓を伝えるという理念に立って保存に取り組むべきであると思う。

いずれにせよ取り壊されてしまえば、真の意味の修復も再評価も二度とできない。地元の保存運動のリーダーたちが言うように「このままでは歴史の連續性が“近代”でスッポリとなくなってしまう」危険の方が、より大きいのだ。山河の破壊とスクラップ・アンド・ビルトの巨大な流れに抵抗する上でも、かつての学舎に誇りと郷愁を抱き続ける卒業生を中心に、山村道場がこれからも南会津のアイデンティティの核として存在し続けることを願わざにはいられない。



旧山村道場の今後の方向性

【酒井 哲】

【1】田島町の概略

田島町に最も近い都市は会津若松市だが、距離にして45km、車で約1時間かかる。一応、会津若松都市圏に入っているが豪雪地帯であることを考えると通勤圏としては厳しい。このため田島町は実質、独自の都市圏である田島都市圏（南会津都市圏）を形成していると考えられる。昼夜間人口比が99.1%と日常生活は町内で完結できる地域といえる。町の人口も減少に歯止めがかかり均衡状態を保っている。しかしながら、他の農山村と同じく、人口の高齢者の占める割合は年々増しており、現在は65才以上人口が22.7%と全国平均よりも1割以上高い数値となっている。

【2】田島町の観光の方向性

田島町の町政要覧を見ると町の豊かな自然環境を生かしたレジャー施設計画が全面に押し出されている。この計画では南会津地方に安定した観光業の確立のため、冬季だけでなく通年型観光資源の整備が急務であるとしている。冬場この地域がスキー客で賑わうのは周知のとおりであるが、夏期は観光客を呼び込むための決めてに欠けている。計画ではキャンプ場を中心としたアウトドアスポーツに焦点をあて、滞在型の観光を期待している。田島町の観光資源として有効なのは自然だけだろうか。スキー場、キャンプ場、パラグライダー場、確かに若者のニーズにあったレジャー施設であるが、流行を追った観光資源の整備では安定した集客率を保つのは難しいと思われる。

流行に左右されない観光業の形成も必要ではないだろうか。もっと地域住人の生活に密着した無理のない持続可能な観光業。人々が今後もこの町に住み続けられるような、生活に根付いた施策はないものか。

持続的な観光の手法の一つとして『エコミュージアム』の理念が最近注目を浴びている。「人々の生活と環境の発達過程を史的に探し、自然、文化、産業遺産を現地において保存・育成・展示することを通じ、地域・社会の発展をめざそうとする博物館」のことである。博物館といえども建物内部だけで完結するものではなく地域の自然や人々の生活の記憶全てがエコミュージアムの観光要素となりうる。エコミュージアムが目指すものは、地域にとって大切な記憶を地域住人が主体になり保存・活用していくというものである。

ここに田島町を歴史遺産の残る町としてエコミュージアムに則して考えてみたい。

【3】エコミュージアム施設の概要

○コアミュージアム

総合案内所・現地での保存が不可能な資源・遺産の収集・保存・失われてしまった地域の資源・遺産の再現展示などの機能を持った施設。

○サテライト・ミュージアム

地域の点在する独立した資産・自然遺産・文化遺産・産業遺産

○ディスカバリートレイル

地域の自然や歴史、文化の観察内小径、観察対象に応じた観察路、歴史的な街道や先人たちに使われていた生活道路。

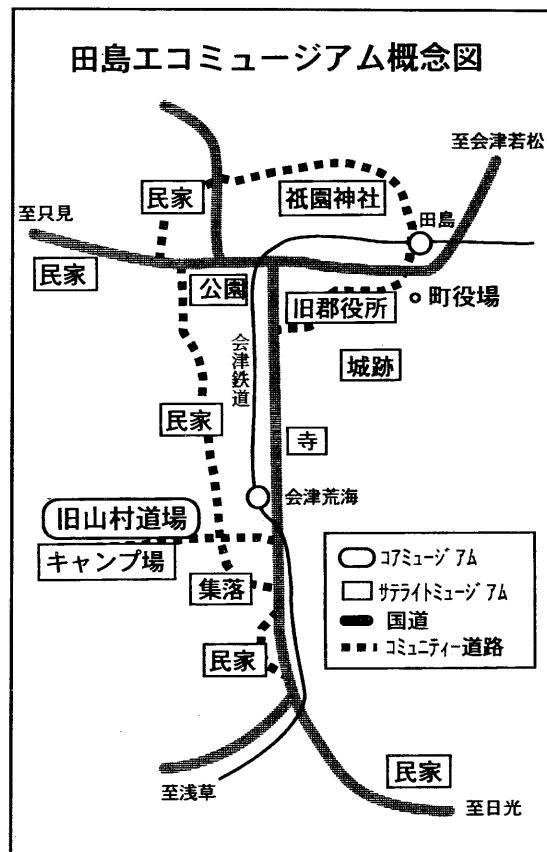
【4】歴史遺産の残る町

(1) 観光的資源の発掘

現在田島町では山村道場だけでなく、町に残っている民家も登録文化財として申請中である。これらの民家は現在も実際に町の人々が住んでいる建物である。特に歴史的事件によらない場所や建造物は何のためらいもなしに壊されてしまいがちだが、人々が実際にそこで生活を営んできたことは歴史的に重要なことである。つまり、これらの観光資源はあくまでもそこに住んでいる人々が主役である。建物だけが観光要素となっているわけではなく、都会では見られなくなった生活、風景などすべてが観光要素として機能するのである。流行に左右されない持続的な観光資源の一つとして田島の生活が有るはずである。この登録文化財に指定されるであろう民家をサテライトとして位置づける。町にすでにある神社や史跡、自然公園等も当然サテライトに含まれる。

(2) 山村道場の位置づけ

山村道場は田島に残る近代建築遺産としては最大規模の建築である。東京から来ると山村道場は田島の市街地への玄関に当たる。その落ちついた佇まいは、遠くからの訪問者に安堵感とほのかな郷愁を誘うであろう。ここを単なるキャンプ場併設の農業資料館に留めることなく、田島町と旅行者の情報交換の場、さらに宿泊施設としても機能させる。この山村道場をコア・ミュージアムとする。町内に点在する遺産の情報だけでなく、誰々さんの家では今日、上棟式があるなどの庶民的な情報も入ってくると面白いだろう。



(3) コミュニティー道路及び福祉観光バスの整備

田島町は町を縦断するように国道が走っており、これが町のエッジとなっている。国道を車が高速で走り抜けることは避けられないことなので、民家を網目のように走るコミュニティー道路を整備し、住人の生活動線と国道とを分離する必要がある。田島の歴史遺産は住人の生活に直結したものであるので、このコミュニティー道路を整備することより個々の遺産（サテライト・ミュージアム）を有機的に結びつけることが可能になるだろう。人々が安心して住み続けるには、増え続ける高齢者層を無視することはできない。田島町では様々な福祉サービスが行われているが、その大半が物品の貸し出しや出張サービスである。これは高齢者が寝たきりになった場合には有効だが、今後寝たきりの老人を増やさないための施策ではない。田島町の主要な交通手段は車なので、車に乗れなくなった高齢者は寝たきり予備軍になりかねない。上記のコミュニティー道路に福祉観光バスを走らせるることはできないだろうか。各歴史遺産の拠点にバス停を設け、さらに山村道場、福祉センター、役所等の主要施設を巡回する。自力で外出できる機会が増えれば自宅に閉じこもる老人も減少するであろう。高齢者は地域の歴史を体験してきた生きた証人である。彼らが元気でいることは、エコミュージアムを機能させるに当たって重要なことである。

このバスには観光客も乗れるようにならう。山村道場で情報を得た観光客でもっと田島町の生活を知りたい人のための交通手段にもなる。道場に整備された駐車場にマイカーを置き、観光客にもバスを使ってもらい、地域の住人と接する機会を持つてもらう。と同時にそれは、コミュニティー道路への車の交通量を減らし、住人の生活を守ることにもなるだろう。

以上、田島町でのエコミュージアムの可能性を断片的ではあるが探ってみた。田島の歴史遺産の保存・活用方法にはまだいろんな構想や選択が考えられるだろう。いずれにせよ、地元の人々と共に、彼らを取り巻く生活を中心に据えて、ほんとうの意味で、自然に触れる、自然に学ぶ環境を考えていきたいと思う。

歴史遺産の残る町、田島の方向性について詳細に論じて検討するのは、まさにこれから緊急課題である。

●鈴木喜一建築計画工房

〒162 新宿区矢来町114 ☎03-3269-1202

■すずききいち…1949年生まれ。武蔵野美術大学卒業。同学講師。鈴木喜一建築計画工房主宰。主な著書に『新・大地の家』(建築資料研究社)、『旅の中の風景』(PMC出版)、『スケッチで綴る日本近代建築紀行』(共著・日経BP出版センター)

■わたなべよしたか…66年生まれ。千葉県立船橋高校卒。鈴木喜一建築計画工房所員。著書『風をたべた日々』(日経BP社)

■さかいてつ…70年生まれ。宇都宮大学大学院修了。鈴木喜一建築計画工房所員。
◎山村道場問題はホームページで隨時公開しています。

<http://www.bunny.co.jp/ayumi/index.html>

建築の<+><->・・・

カラ松を美しく見せるために

飯田善彦建築工房 赤桐 雅子

建築のつくり方を<+><->という概念を通して話してみたいと思います。

この夏まで約2年間、私は、長野県の川上村で「川上村林業総合センター」の設計監理の仕事に就いていました。

川上村はカラ松の故郷です。今は高原野菜づくりで全国に知られる豊かな村ですが、それ以前にはカラ松の苗木をつくり、全国に出荷していました。厳寒の地でも育つカラ松は、長野県、北海道などで盛んに植えられましたが、やっと利用できる樹齢となった現在では、狂いやすい、節が多い、ヤニがでる、などの理由で建築関係者からの評判はよくありません。そこで川上村では、藤原村長を中心に、産地であったからこそ「カラ松の良さを示したい」と、又、森林との関わりが希薄になってしまった現在だからこそ「林業の問題点から、環境資源としてまで、森林を多様に考え、関わっていくための拠点をつくりたい」と、センター建設を計画しました。

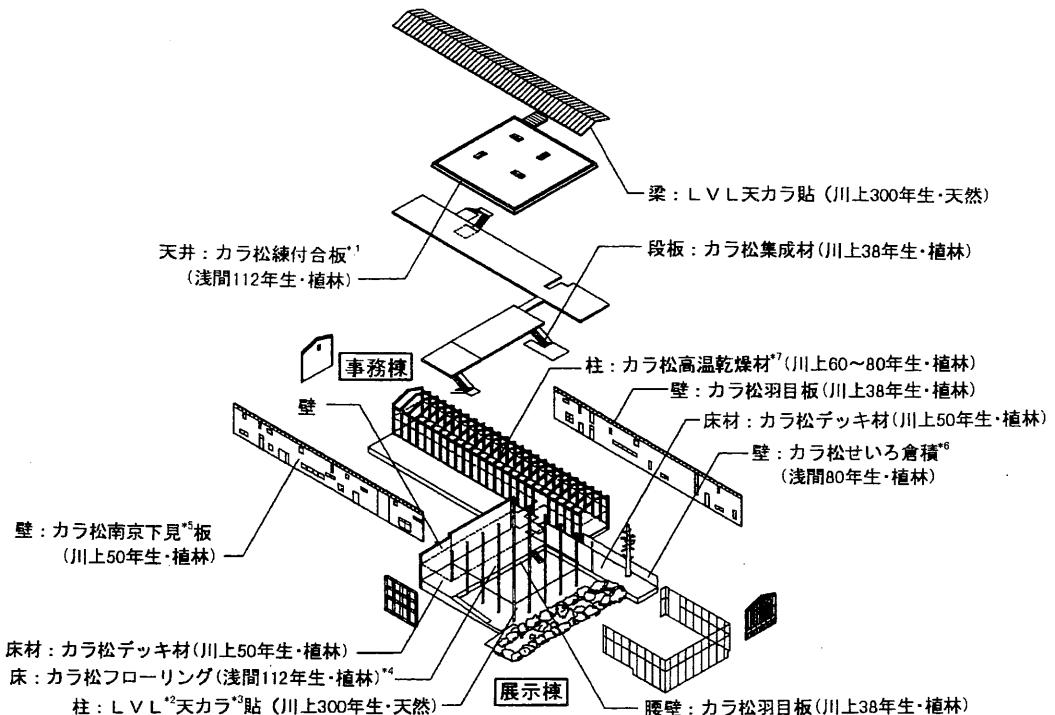
敷地は、村民が気軽に立ち寄ることができるよう、村の中央に位置する、村役場・福祉センターの隣地が充てられました。

建築の中には、林業展示室、林業学習室(イベント広場)、森林組合直営レストラン、林業技能員休憩室、森林組合事務室、会議室等の各室が入ります。

建築の設計については「カラ松を美しく見せること」が主題の一つになりました。

そこで、ここでは「カラ松を美しく見せる」ために、設計監理者の立場で、どんなことを考えたかを、お話ししてみようと思います。

川上村林業総合センター 森の交流館



カラ松材による建築構成図（図1）

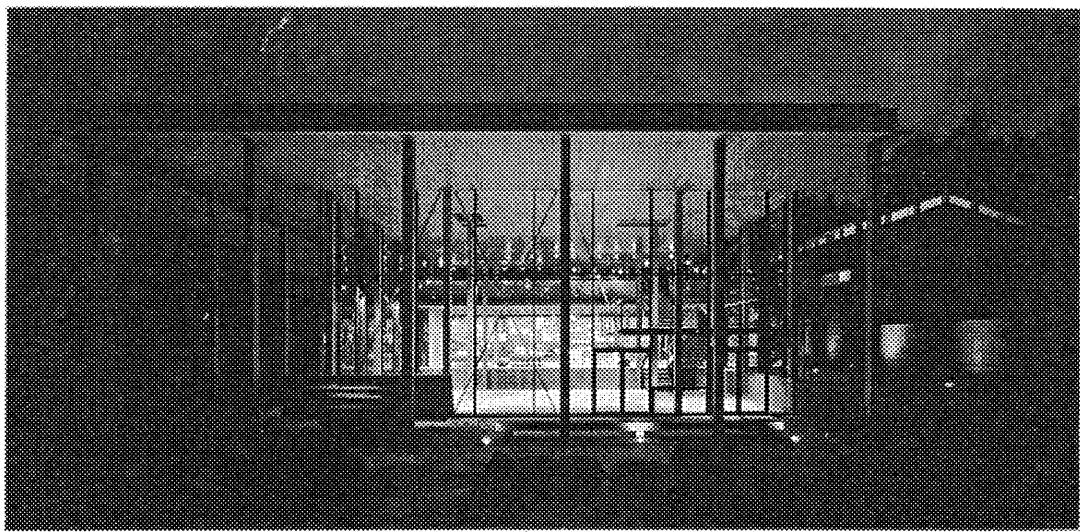
「川上村林業総合センター」は、展示室やレストランなど村民に開かれた機能を集めた展示棟と、林業技能員休憩室や森林組合事務室が入る静かな空間を集めた事務棟の2棟をエントランスホールでつなげた構成となっています。

今回は、特に「展示棟」について記してみたいと思います。

ここでは、様々に使われたカラ松材の中でも、特に「天然カラ松」を貼った柱(L V L)と、「カラ松」を貼った屋内屋外にまたがる天井面を、印象的に見せることを意図しました。

「建築」は、地球の重力を受け、様々な荷重を支えて建っている極めて現実的な存在です。その一つ一つの部材は、建築を成り立たせるための現実的な役割を持っています。

けれどもここで、カラ松の美しさを、純粹に、より強く伝えるためには、規則的に並ぶタテの線 + 広々と横たわる面 のシンプルな構成として抽象的に表現し、構造や機能などの現実的な役割を敢えて感じさせないつくり方を考えました。



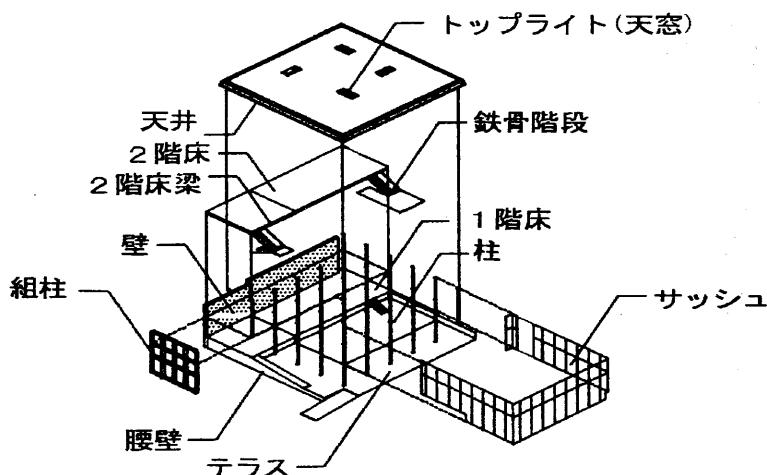
列柱と天井面の構成（写真 1）

規則的に並ぶタテの線 + 広々と横たわる面

この列柱と天井面のみを<+>、その他の部材を<->と考えてつくり上げていきました。

<+>・・・カラ松からなる線と面を よりはっきり見せること

<->・・・その部材を<+>に対比するものとして見せること



展示棟の建築部材(図 2)

1. <+>柱・・・規則的に並ぶタテの線として見せるために → → →

a. →すべての柱を同じ太さにそろえる

・柱は建築の構造材なので、それに加わる荷重の条件が異なると、同じ太さ(断面)にはなりません。展示棟の中で特別な力がかかるのは、風圧を受けるサッシュを取り付ける柱と、2階の床の荷重を受ける柱です。

そこで、サッシュは、最上部の屋階梁と最下部の基礎に直接取り付け、柱に力が直接伝わらない構造にしました。

また、2階の床の荷重を受ける柱については、柱と柱同士が中間で固定し合うことになり、構造上有利になるので、その分で特別な荷重を受けない柱と同じ断面にすることができました。

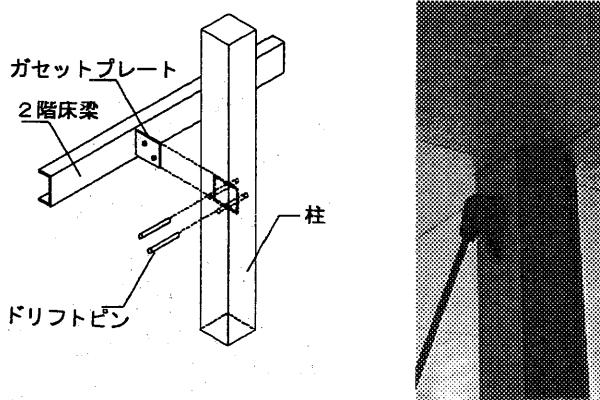
b. →柱にかかる荷重を感じさせない印象をつくる

・柱は現実には様々な力を受けています。けれども今回のように「(「柱」ではなく)タテの線」とするには、「力を加えている2階床梁や階段部材」は、「力を加えていないもの、柱と関連しないもの」として見せることが必要となります。

そこで、それらの「柱と関連しないもの」に見せたい材には、スチール材を用い、また、両者の接する部分についても、荷重を感じさせない印象の取り付け方にして「力を加えていない、柱と関連しない」存在に見せていました。



柱と2階床梁が接する(写真2)) 同左^⑧(図3) 柱と階段吊り材が接する(写真3)

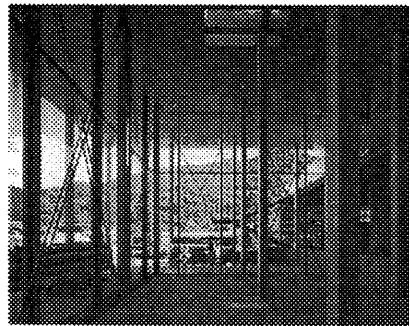


c. →柱をタテの線としてより美しく見せる

・展示棟は、ほぼ水平と垂直だけの構成ですが、ブレース(筋交・斜め材)が必要です。

そこで、ここには、スチール材を用い、できるだけ細くして、斜めの線がなるべく気

にならぬように考えました。また、ブレースを2本で組にして、見付^{*9}が小さくなるように並べ、小さな断面の材で必要な強度がとれるよう、ネジ部を転造^{*10}という方法でつくっています。

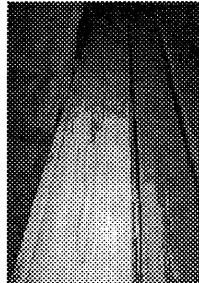


ブレースの並び、列柱越しにカラ松林の山をのぞむ（写真4）

2. <十>天井・・・広々と横たわる大きな面として見せるために → → →

a. → 1枚の平滑な面とする

・カラ松練付合板は、18m×18mの天井面では、400枚以上要りました。これを色や木目の感じが揃うよう1本のカラ松材から、スライスした順に^{*11}貼っていきました。貼り方は、目違い^{*12}が気にならないよう、全て6mmの目地をとって貼りました。



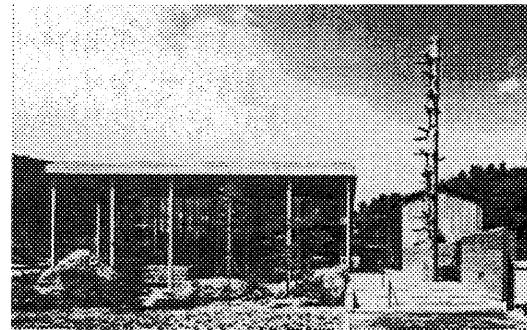
スライスされた
カラ松（写真5）



天井面を見上げる（写真6）

b. →重さを感じさせず、軽々と浮かんでいる面として見せる

・天井面を軽く見せるためには、屋根を薄いものに見せること、さらに厚み分が空に溶け込むようにすることを考え、屋上の立ち上がり寸法をできるだけ抑えました。また、水平の線を強調し、空の色がやわらかく映り込むよう、金属の波板を立ち上がりの表面に横貼りにしました。

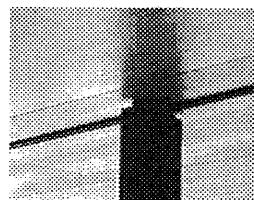
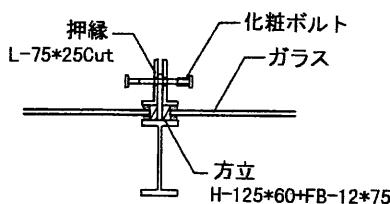


空に溶け込む屋根（写真7）

3. <一>サッシュ・・・柱の線と、天井面

の広がりを妨げず、独立してみせるために→
→透明度の高い、シンプルな線として見せる

・方立^{*13}は柱とずらしました(写真1,4)。サッシュは方立に直接押縁^{*14}ではめたガラス面と、開口部から成り立っています。スチールの型材を組み合わせ、なるべく正面から細く見える組み合わせを探しました。天井面とガラス面との取合は、なるべく1本の線だけに見えるよう、方立上部を欠き込み、ガラス上端は型材の刃で挟んでいます。



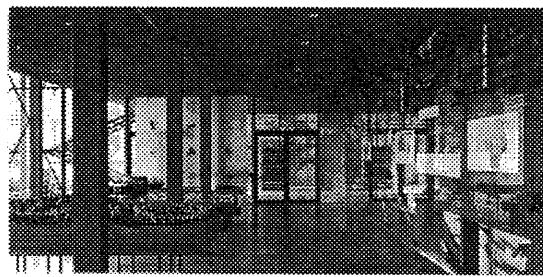
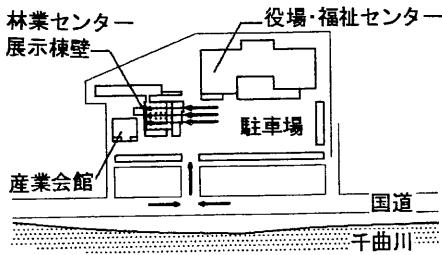
型材を組み合わせたサッシュの構成（図4） 天井面と線で取合う（写真8）

4. <→> 2階床梁、階段、プレース・・・写真2、図3、写真3、写真4

5. <→>壁面・・・建築の要素ではないようにみせるために → → →
→「壁」ではなく、展示として見せる

・展示棟は、西面のみがガラス張ではなく壁面になっています（図2）。けれども、この柱－天井を抽象化された線と面でみせるには、この壁も「壁」として感じられない見せ方にする必要があります。

そこで、その「壁」には、コンピューター加工を施した原生林の写真を一面に貼りました。役場側から見ると、原生林の写真が柱の背景のように1階2階を通して見えます（ただしガラスに反射するので中まで見通すことができるのは朝と夕方、夜間）。それは、建築の「壁」ではなく、森の風景として意識され、さらに、その原生林写真を背景に、1階の展示室では「川上村の森林・林業の歴史」に関わる印象的な言葉が浮かび、展示パネルとなっています。



役場・福祉センター側から「展示」を見る（図5）

写真右側展示室壁（写真9）

6. <一>塗装・・・柱と天井が「カラ松で構成されている」ことを強めるために → →
→柱と天井以外のカラ松らしさを抑える

- 展示棟には、他にも様々にカラ松が使われています(図1)が、柱と天井以外のところは「カラ松らしさ」を抑えた方が、柱・天井の「カラ松」の印象はより深くなります。そこで、腰壁や階段段板などの、カラ松部分には、少し白やグレーの塗装を施し、カラ松特有の赤みを抑えた、柔らかい印象にしています。

7. <一>照明器具・・・光だけが灯るように見せるために → → →

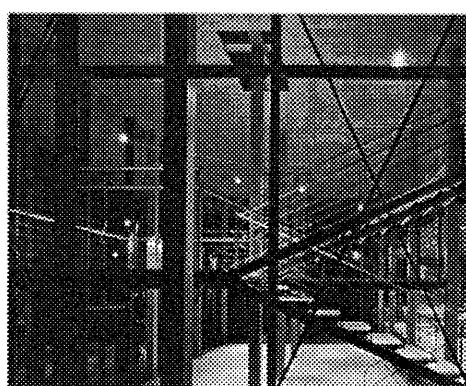
→照明器具をできるだけ小さく抑え、電気配線を感じさせない

- ここまで、一枚の面として表してきた天井には、何も取り付けないようにしてきました。

そこで、照明器具は宙に浮かんでいるように見せることを考えました。12Vに変圧した電流の流れる被覆線を柱から柱へ渡し、その間に照明器具を引っかける仕組み^{*15}にしました。変圧器は柱の陰を伝い、1階の天井裏に隠しています。



照明器具（写真10）



光が宙に浮く（写真11）

列挙する形式をとり、説明完了の線引きが難しいので、ここで終わりにいたします。

*1 カラ松練付合板…木材を薄くスライスして合板に貼った化粧板。あまり評価されてこなかった植林のカラ松材でも高樹齢のものなら充分化粧板とする事もできる、というカラ松林業への明るいメッセージにもなった。

*2 L V L…積層集成材。3mm程に木材をスライスし、繊維方向をそろえて貼り合わせた材。非常に強度が高い。細い木材からも大きな材がつくれるので資源活用の面からも注目。カラ松を使ってのL V Lは現在試作段階で間に合わず米松製。

*3 天カラ…植林でないカラ松。天然カラ松。一般に天カラといえば200年生を指し、細かな年輪と味わい深い赤みで銘木とされる。今回は川上産の300年生を村が提供してくれた)

*4 カラ松フローリング…展示室の床にはカラ松のフローリングを貼った。カラ松はねじれ、狂いが大きいことや、床暖房が敷設されるという条件のもと、WPC加工という木材の細胞にプラスチックを注入して固める加工法が採られた。

*5 南京下見…板材を少しづつ重ねながら下から横貼にしていく。今回は事務棟の外壁。昔の小学校などでよく見られた。

*6 せいろ倉積み…佐久地方で見られる倉の作り方。角材をログハウスのように組んでいくが、四隅で材の木口が外に飛び出るのが特徴。

*7 高温脱脂乾燥材…カラ松はねじれや狂いが大きいので、材の乾燥には特に気を使う。通常90°程度の乾燥機に入れるが、事務棟の柱は、130°まで上がる釜を使用。事務棟の柱49本は村民の提供による60~80年生。

*8 柱と2階床梁の取合…2階床梁のスチール材に溶接されたガセットプレートを柱にあらかじめ空けておいたスリット状の隙間に差し込み、垂直方向から、柱とガセットプレートに空けておいた丸穴にカンザシのように丸い鋼材を差し込んでいる。

*9 見付…見えがかる部分の正面から見たときの前方に見えている面。

*10 転造…鋼の繊維を切らずに、接線方向に引っ張ってネジ山をつくる方法。鋼材の直径よりもネジの谷の部分の径が太くなる。通常はネジを切った谷の部分が最も強度が小さいので、この方法では、必要強度に対し、見える鋼材の部分の断面の方を小さくすることができる。

*11 練付合板の貼り方…練付合板は0.55mmの厚さに(0.2mm程度の場合もある)スライスしたので、1本の材からも、数千枚の薄板がとれるが、節の部分や虫の入った部分を除かなければならぬので、何枚とれるかは開けてみなければわからない。今回は幸い1本のカラ松から必要分を確保できた。スライスしたものは番号を付されその順番に並べて合板に貼られる。そして、その合板も順番に天井に貼られた。他にも天地を互い違いに並べたりいろいろな方法がある。

*12 目違い…突き付けて貼ったときに水平面から浮いてしまったり、沈んでしまったりして隣の材とずれてしまうこと

*13 方立…サッシュを受ける垂直材。今回はスチールの型鋼H-125*60にFB(フラットバー)75*12を溶接して一体とし、風圧方向に対する強度を確保している。

*14 押縁…サッシュにガラスを入れ、最後に固定するための部材。ガラスが割れた時には押縁をはずすとガラスもはずせ、新しいガラスを入れて、再び押縁を取り付ける。

*15 12Vワイヤー照明…+とーの電気の流れる被覆されたワイヤーに、照明器具を吊す。ランプからのびる2本の真鍮線に取り付けたクリップで、被覆を破って電気を通す。ワイヤー上の位置は自由、向きも左右の真鍮線のクリップの位置を変えることで調整。既製品もあるが今回はよりシンプルなものを製作。

「ある印象」をもった空間を意図的に作るときには、細かい細かい「決定」の積み重ねでやっとできあがる、という実感を持っています。

「決定」とは、納め方、寸法や、材料、又は色やツヤ、など、あらゆることについてですが、「決定」の前段階として、そのような「選択肢」があること自体をくまなく発見しなければなりません。

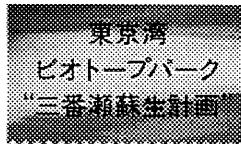
設計者が、細々とした無数の決定事項を拾い出し、一つ一つ確実に現場に伝えていかなければ、(建築を通してあるメッセージを送るために)「こんな空間を作りたい」と思っても、「こんな空間」にはならないのです。

このような設計の"タネアカシ"を試みたのは、自分が「建築設計者」と「一般の人」との間に、大変な溝ができてしまっているように、常々から感じているからです。自分がスタッフとして関わった建築を、何か誰にでも理解できる言葉で一つの角度から説明をしてみたい、と思ったからです。

ふつう設計者は、芸術家の側面をとっても、技術者の側面をとっても、できあがったものが全て、というところがあるので、わざわざこのようなタネアカシ的説明をすることは、意味を持たないかもしれません。「説明すること」は逆に「5感を使って自由に感じられるはずの建築を限定すること」にもつながりますので、このような「つくる過程」に着目した説明は、訪れる人の想像力を奪うものかもしれません。

けれども建築というものが常に、ある場所を占有する、公共性を持ったものだと考えると、何かもっと両者の”頭の中”をオープンにする必要もあるように思えるのです。

長谷川 順 持



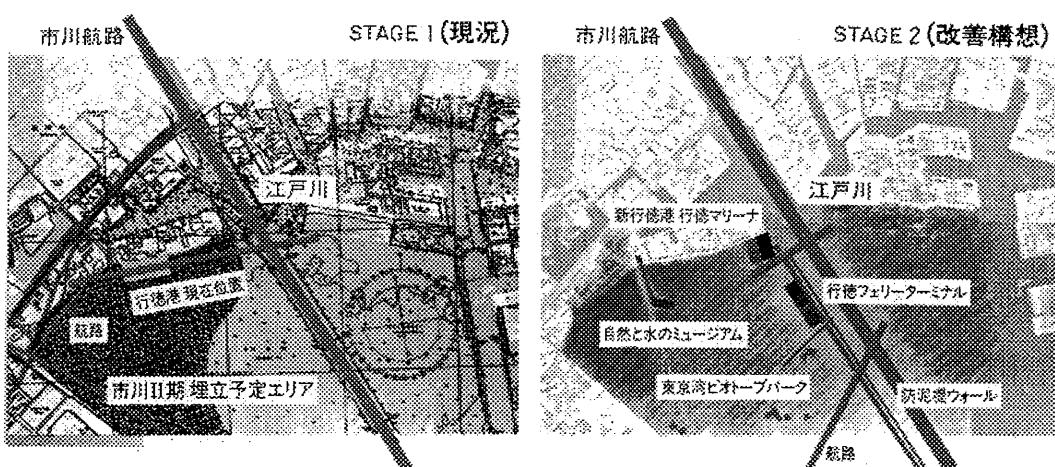
"SANBANSE" ECOLOGICAL PROJECT ~Biotope Park of Tokyo Bay~

「自然バランス」とは悠久の時を経てつくり出され、有限のものです。それを破壊することは、人類のみならずすべての生き物の消滅につながるといつても過言ではありません。そのコンセンサスが広く認識されてきている今も、人間社会では「経済」を優先させ、あいまいな「環境政策」を続けています。何らかのかたちで開発にかかわる者すべてが、自然への背任行為ともいえる事業計画ならば、黙することなく真摯に向かい合い論議し、その改善策を分野を超えて考えていく勇気が必要です。

文明社会において、自然に何も影響させないことは不可能であり、その所産を否定することはできませんが、自然を尊重し、考慮する…つまり、自然破壊は最小限にとどめ、再生可能な範囲で必要な開発を考察し、サステナブルを目指していかなければなりません。その見直しは、今急務です。

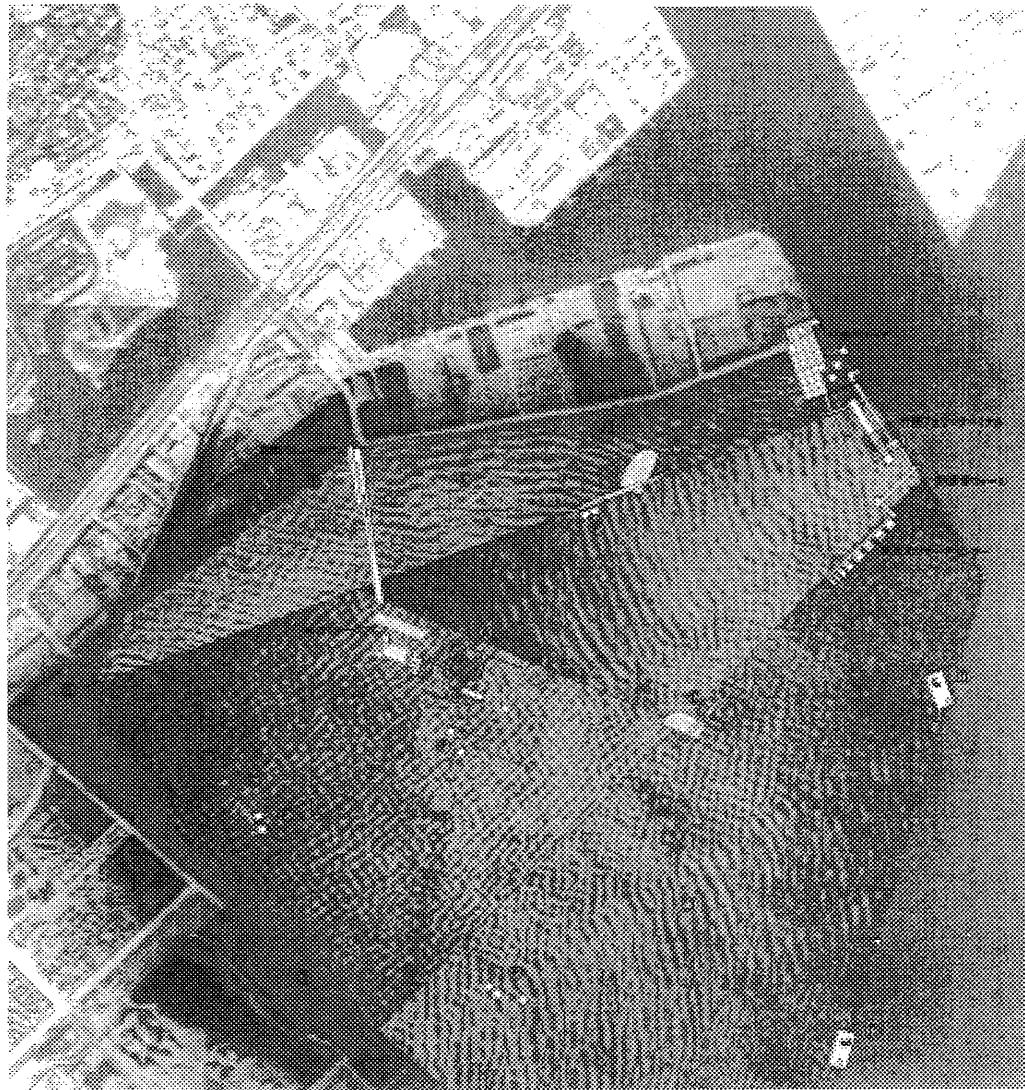
東京湾の唯一の自然干潟「三番瀬」、こちも住民に非公開で埋め立て計画がすすめられています。公式に議論する場もなく、ただパンフレットのみ用意され、不明解な開発をよいこととしてPRしています。パブル期とは名目こそ変わりながら、やはり採算重視の開発です。そこに〔住む〕生物たちは東京湾の汚染物質を分解し、水質浄化機能を一手に担っています。人工的につくられる浜や人間の技術を駆使した終末処理場にしても、自然のもつ浄化作用には比べるべくもありません。また、魚介類の〔住む家〕である藻場はその埋め立てのターゲット地域にわずかに残され、回復可能にもかかわらず、死滅を余儀なくされています。「三番瀬」の半分以上を埋め立てる短絡的計画は止めなくてはなりません。それは東京湾の危機を意味します。

「東京湾ビオトープパーク」構想は「三番瀬蘇生」を大きな目的に据え、東京湾と人々のかかわりの歴史を知ることを通して〔出会い集う〕人と海の深い絆を〔結ぶ〕・生物の生態を〔観る〕プロジェクトです。すべての全貌を提示します。自然の生命力に学び、そこに〔住まう〕生物に敬意を表しながら、ふれあえるビオトープパーク、漁港や航路計画の現状の問題点も浅瀬蘇生の視点から改善の方向性を示しています。「三番瀬」の蘇生手法を見いだせれば、日本中に少しでも残された浅瀬の今後に光を投げかけることができるかもしれません。「三番瀬」の蘇生は東京湾にとどまらず、大きくは人類をも蘇生する大切な問題なのです。そこには気づいていただけたら、このプロジェクトの役割は達成されたと考えます。



現況の行徳港は浅瀬の中央に位置する。ここに沖とを結ぶ航路用の溝が陸と瀬のつながりを分断し、親水性が損なわれている。また、740ヘクタールにも及ぶ広大な埋め立て計画もある。

漁港やプレジャーボートのハーバーを市川航路(既存)に直結させれば、浅瀬に一切の船舶を侵入させずにすむ。また、市川航路に干潟が流失することを防ぐため、航路沿いに防泥堤を建設。こうした瀬を守る役割の構造体を新しい建築計画の手がかりにする。

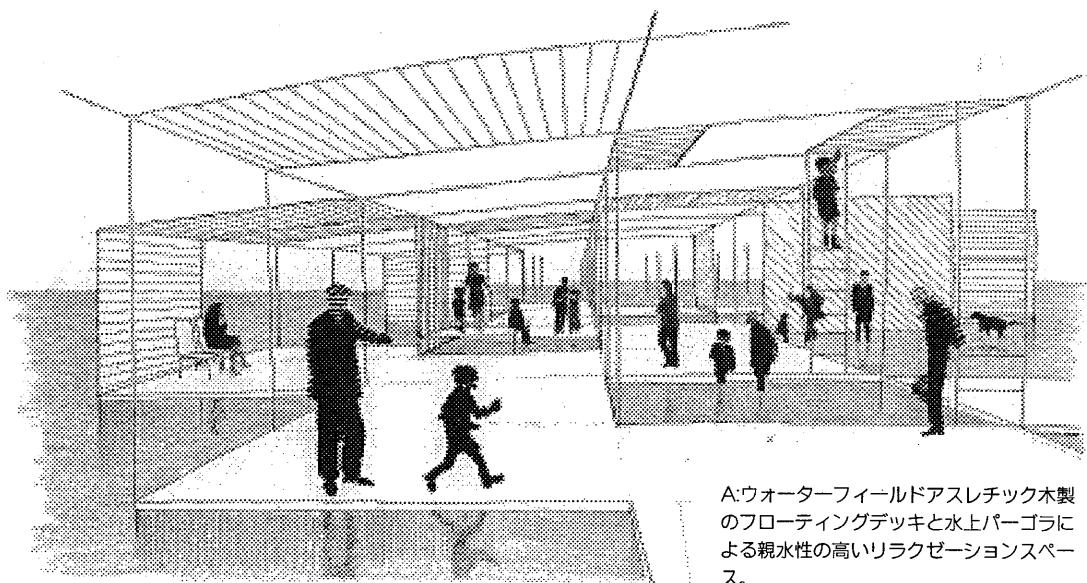


Site Plan

- A : ウォーターフィールドアスレチック
- B : 水際アートスペース
- C : 砂浜アイランド
- D : 聖域としての浅瀬を示すタワー及びデッキ
- E : 人と魚のたわむれる家
- F : 空気供給装置
- 1 : 莖などの水生植物ゾーン
- 2 : 魚の住処としての藻場蘇生ゾーン

「三番瀬」と聞いてもご存じの方はきっと少ないとおもいます。ディズニーランドの少々千葉隣といえればイメージできるでしょうか。かつてはディズニーランドの下も生物が生息する浅瀬でした。東京湾の埋め立てのほとんどがこうした浅瀬に狙いを付けて行われました。なぜなら土を埋める量が少なくてすむからです。ここにただひとつ奇跡的に残る浅瀬それが「三番瀬」です。東京湾でありながら水が澄んでいます。つまり、ここに棲む「生命」が浄化しているのです。しかし、ここにも経済最優先の埋め立て開発が迫っています。私たち建築家はこの開発にただ黙することしかできないのでしょうか。

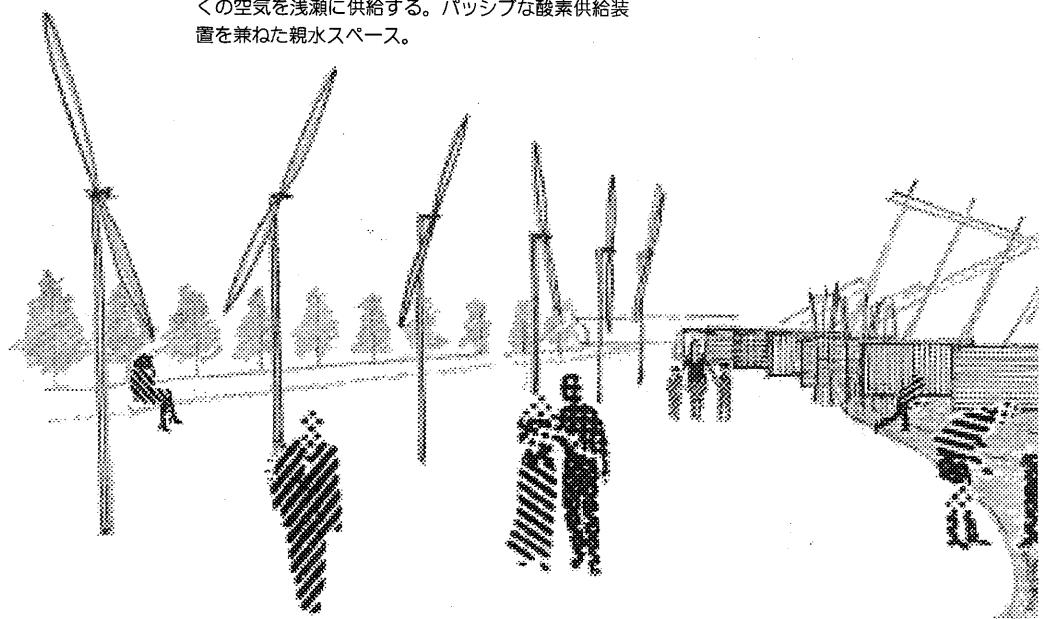
このプロジェクトはおよそ一年程かけてつくり上げてきた私なりの提言です。その内容の是非はともかく、環境に関わる多くの方々にこの三番瀬の存在をまず知っていただき、多くの方々の関心と英知で旧態依然とした埋め立てを阻止しここにまったく新しいビオトープを蘇生したい。ここを埋めてしまえば東京湾は[死の海]となってしまうのです。(長谷川順持／長谷川建築デザインオフィス)

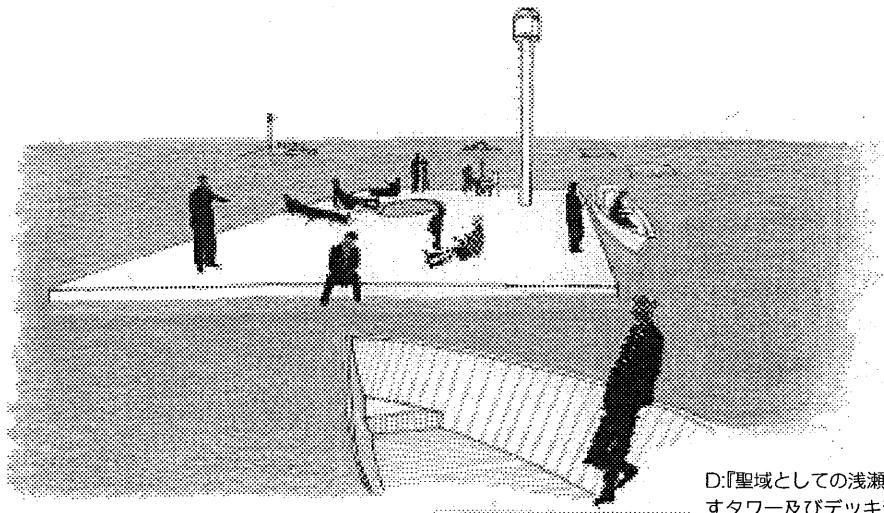


A:ウォーターフィールドアスレチック木製のフローティングデッキと水上パーゴラによる親水性の高いリラクゼーションスペース。



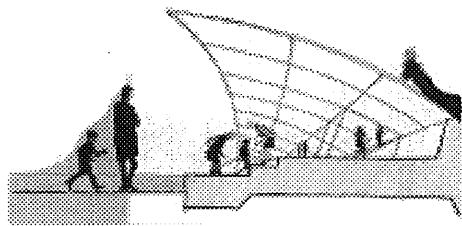
C:砂浜アイランド砂浜は波が打ち寄せることで、多くの空気を浅瀬に供給する。パッシブな酸素供給装置を兼ねた親水スペース。



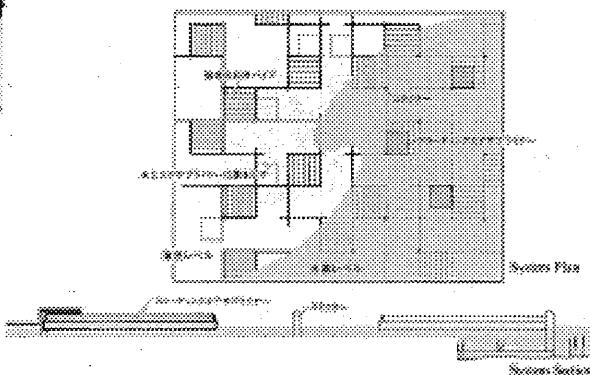


E:人と魚がたわむれる家文字どおり人と魚が共棲し得る新しい「海の家」。水生生物と人々が同じ屋根の下で遊ぶ。

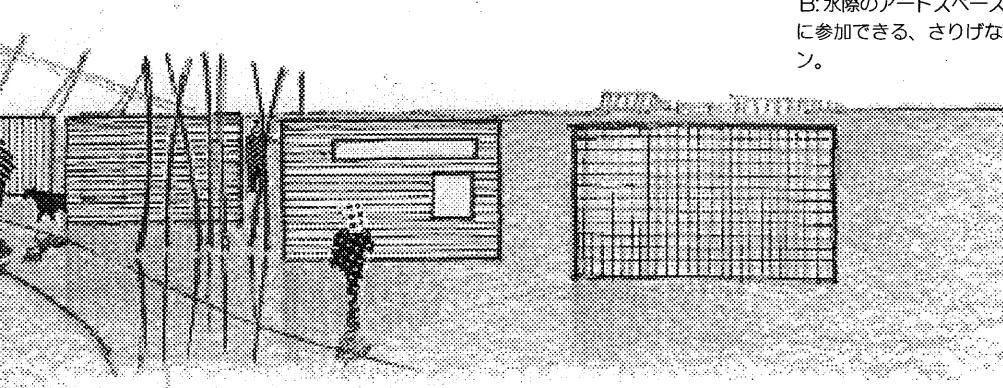
D:『聖域としての浅瀬』を示すタワー及びデッキ浅瀬側から歩いて訪れる人と沖から船で訪れる人の出会いの場所。

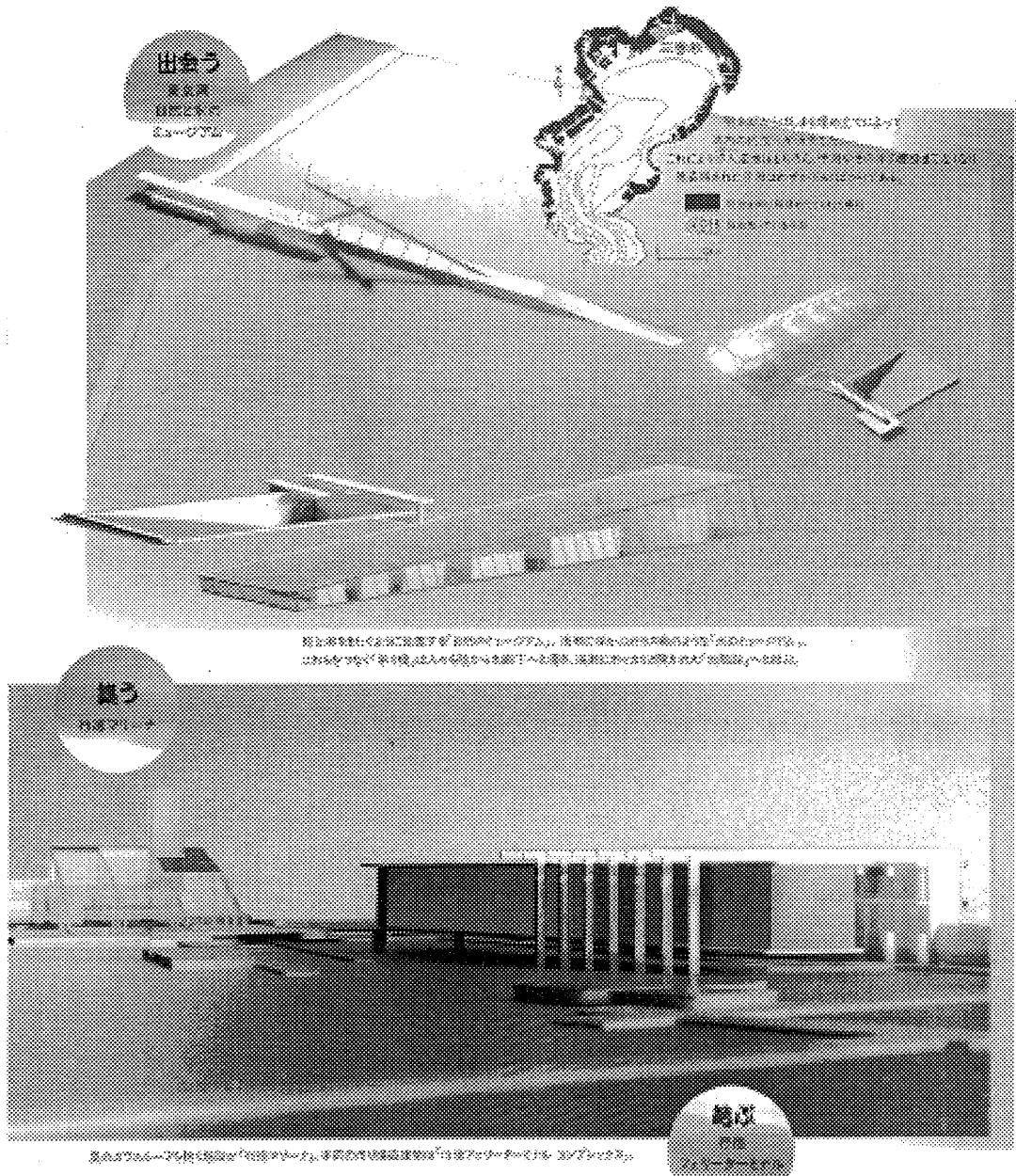


F:空気供給装置フローティングによるエアサプライヤーは[太陽電池][バッテリー][モーター]から構成される。インフラストラクチャーとしての酸素供給パイプとはコネクターを介して結ばれ、発生した酸素はパイプを通じて浅瀬にまんべんなく送られる。パッシブで緩やかなこの蘇生装置は役割を終えると同時に他の病んだ浅瀬へと運ばれる。



B:水際のアートスペース市民が積極的に参加できる、さりげないアートゾーン。

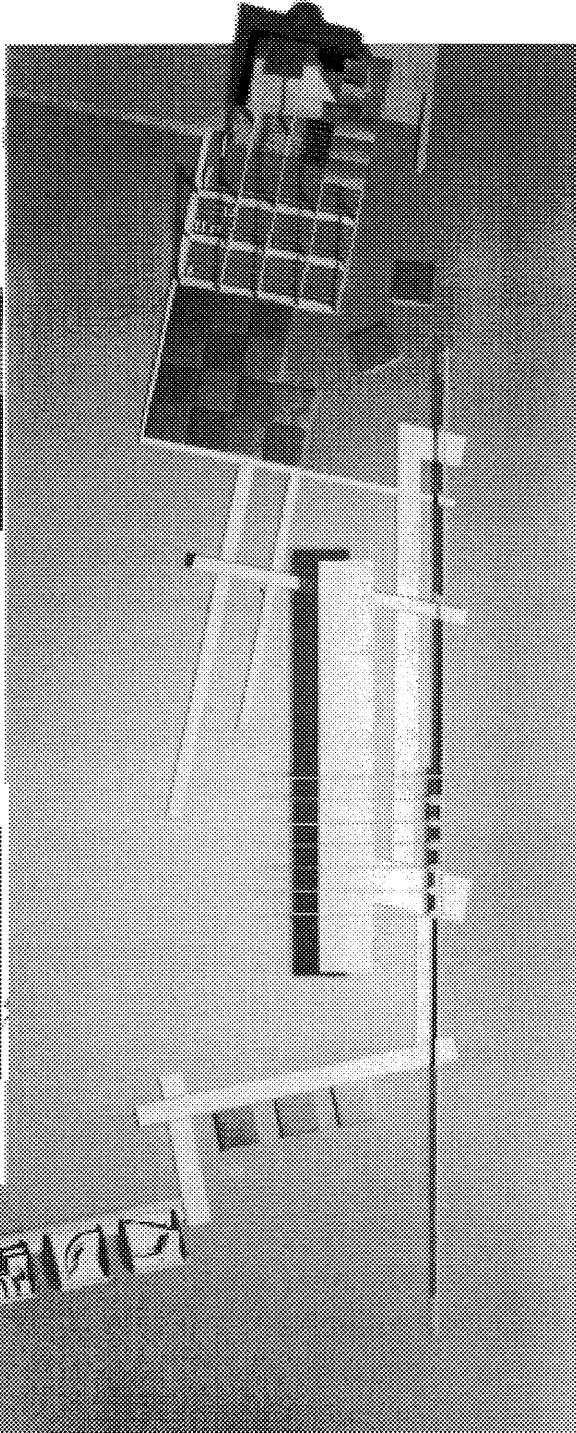
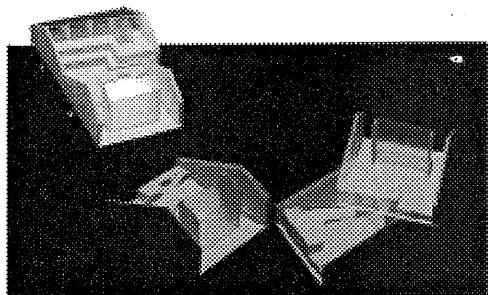
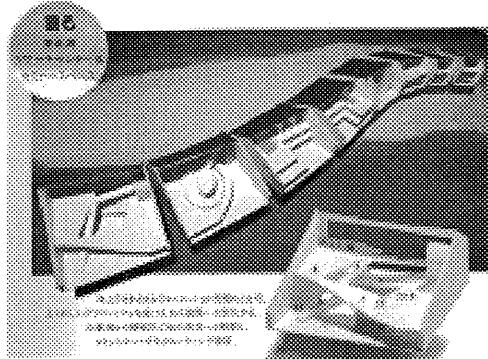




「棲める浅瀬」をサポートする建築ビオトープパークにおけるすべての建築コンセプト●浅瀬を極力いためない手法の選択。一切埋め立てはしない。●三番瀬のアイデンティティーを東京湾全体から見据え、人と浅瀬の相互交流を育むアクティビティーを創出、建築をプログラムする。●三番瀬固有の問題群を解決するだけでなくひいては東京湾全体が「蘇生」へと向かわしめる生成型建築をめざす。

※このプロジェクトは‘96.環境デザインコンペティション「東京湾内のエコシティー」において入選いたしました。
プロジェクトチーム
長谷川順持 斎藤彰 佐藤基
内藤敬介 鈴木守 (グラフィックデザイナー)
長谷川清美 (コピー・ライティング)

上部ガラス屋根の施設「行徳マリーナ」から市川航路(既存)に沿って一直線にのびる壁は干潟の流失を防ぐ「防泥堤ウォール」。下部、桟橋にプラグインされたフローティング建築はリサーチセンターとセミナースペース。



住人の住まい

西東京近郊の、家がまばらな田園風景。

区画整理されたばかりの、時間の蓄積を感じさせない乾いたマス目。

一〇〇坪弱のほぼ正方形で平坦な土地。一二一坪の平屋建てに住人が一人。

建売住宅を含む現代建築には見られないパリパリく一般的な家。

進行する都市空間の中で、風景に埋没し取り残されるような家。

見てわかるほどにむくりのついた方形くずれの屋根。

日に焼け、館色になりそつた杉塀。

深い軒。かぎ型に曲がる広い縁側。雪見障子。

昭和初期の映画に出てきそうな、ちびっこ見廻りしてしまひそうな庵。

映像の主体は人、住人。

住人は台所と茶の間を仕切る襖を開き込み、襖を開けたまま、食事を済ました食事をつくる。

食事を茶の間に運び、テレビを見ながら簡単な食事を終えた。

悪くない天気だから、日のあたる縁側で短編を読み、つらな時間を楽しむ。

家の間取りは仕事場と茶の間、縁側と台所に分けられ、

その4つに最低限の機能が取り付いているだけである。

※

背丈ほどの杉塀で家が囲まれている。

方形屋根のシルエットしか見えない。

アルミ鋳物の門扉を開ける。

3階ほど洗い出しのアプローチを歩き、

塀と同じ衣装を持つ木戸を開ける。

この時、周辺の環境とは異なる磁场が

ヒリヒリにある感じに気づく。

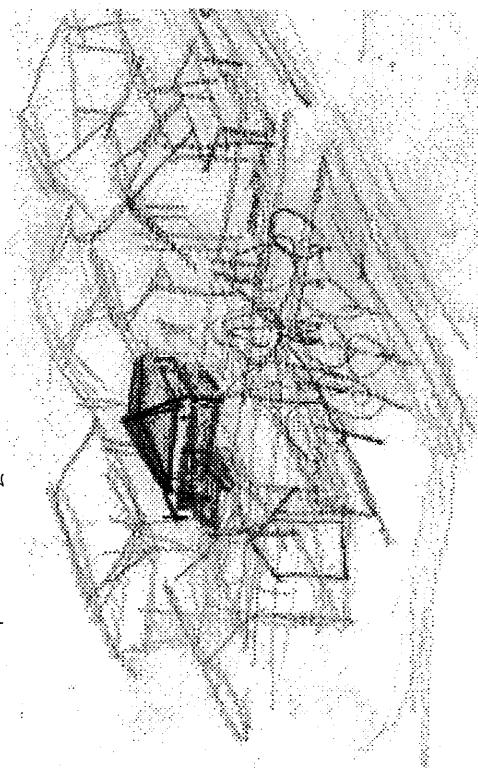
ヒバで格子に組んだ小さい玄関扉を開き込み開ける。

一帖にも満たない玄関土間のタタキ。

栗の床材。生地のままの杉天井。

内部空間に入るときに抱く期待感を満たすでもなく

裏切るでもないなげない意匠。



住人は「ひつぎがあがくだれ」ひが間と仕事場を仕切る一本の建具を引ひき込む。

「一人住まいだから普段は開け放しておこう」ひ台所を仕切る建具も、壁の中に引き込んでだ。

特に来客用にしつらえた家具もなく、

仕事用の作業台があるのみ。

横幅間を切つてある障子の白い光。

日頃飲む緑茶よりも何倍も深い緑の茶をいだださ、

最近の季節感についてひりひわもなく話したあと、

障子を開けた縁にすわる。

秋の午後の光。

僕は木製のガラス戸も開け、濡れ襟に腰かける。

住人は広縁に膝を折つたまま座っている。

それにしても軒が深い家だ。

木部のほとんどは杉が使われている。

壁はしつくし塗。普請にたいしてなにかを工夫した

跡がなく、凝ろうとする気持ちを抑えた跡もない。

家の中に入る前から気になっていたが、この家は杉板で囲まれている。五寸巾くらいの杉板を、一〇枚から一一枚ほど生地のまま水平に貼つているだけである。

家の中といふ、外観といふ、坪の意匠といふ、などと単調な組み合せなのか。無造作に見えないのが不思議なくらいだ。

住人はわずかな沈黙にしひれをきらしたのか、

「コーヒーを入れるけど、砂糖もハルクもいらなかつたわよね」と問いかける。

「茶の間くどうぞ」住人は言ふ、台所でコーヒーに湯を注ぐ。

茶の間と台所の襖が開放され、8帖の茶の間がコーヒーのにおいで満たされる。

小さな机や書合にコーヒー カップが一つ。

家にはこのゆるやかに流れる時間を止められるほど、強いがだつむ匂がある。

「引ひ越しだばかりでしょ。だからまだ庭に木も植えてないの。

仕事場の西側の窓は、雨戸も網戸も、ガラス戸も障子も全部壁の中に引ひき込まれるの。だから窓われに、赤い梅を植えようと思つてゐるわ。植える位置は窓の中心ではなく、やや左寄りがいいわね。だって茶の間から見えるでしょ。



何年か前の春に、嵯峨野にある白井辰一の自宅にお邪魔した。その庭に白い梅と赤い梅が植えてあってそれがとても美しかった。

家のつくりがとても良つたわ。座敷に座つたしも、家が放つ色氣いからなのを感じたの。そんな我が家つてもあまりないものよ。家の皮膚感と私の皮膚が溶け合つていいやうが感じた。神は細部に宿るといつけれど、細部にいたる全てのものがこの空間をつくりしているのよね。それと梅もそのひとつだったのよ。

そう、あと白いモクレンも植えたらと思うていてる。南西の角にね。

雲ひとつない青い空の日、そうやつぱり午後の光がいいわ。モクレンの花を見上げてみて。あんなに美しい白は世の中にならわ。」

決して一方的でなく住人の声が身体に浸入していく。

「コーヒーおがわりする？」と住人が立ちかけた時、彼女の腕時計は15時を示していただ。僕は8帖の茶の間で南に背を向けて座つている。

東側一間と南側全体が雪見障子になつてゐる。長押はなく一寸一分程の鶴居の上に、おそらく回転窓だらう、障子が回り縁いつばらにとりついている。仕事場に通じる踏み込みの床は無垢のヤシ松が貼られ、片引き櫻も、上の欄間の片引き障子も壁の中に引き込まれ、行き来できるようになつていてる。その右横には本棚が設けられ、広葉樹で造作してある。

障子の外の光が急に暗くなつてしまだ。

ちやぶ台の上の口をつけてしないカステラの輪郭も曖昧になる。

「コーヒー豆を数えて入れてみただだけど。お酒のはづが良かつたがしら、山形の銘酒があるんだけど」

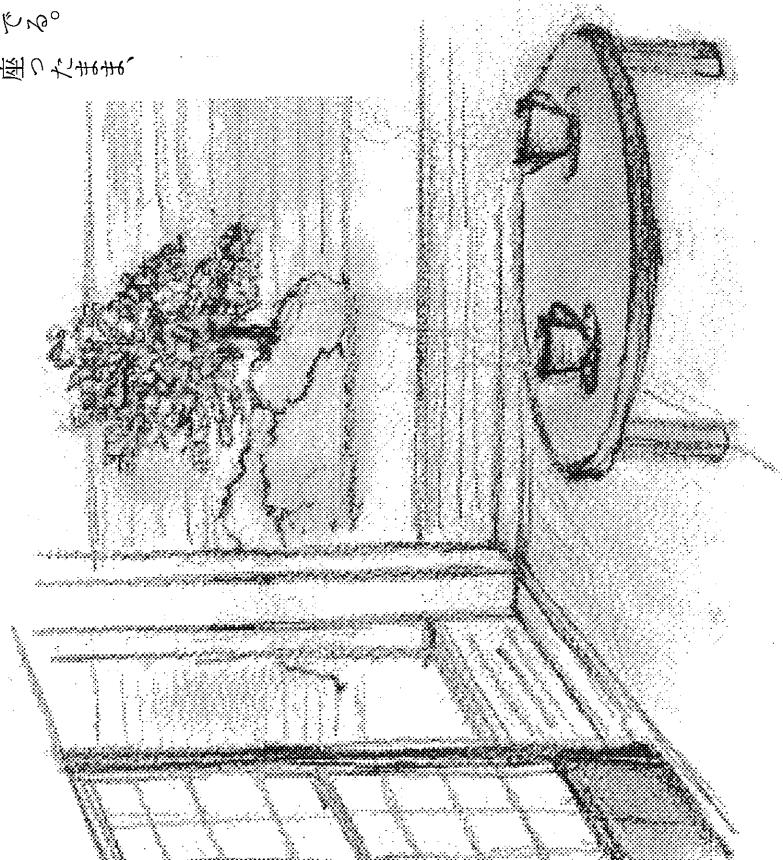
僕は言葉を返せなかつた。

「わたしね、日中でもなし夜でもなしの時間帯がしてお好きだの。昼と夜とをつなげないの1時の時間。刻々と変化していく光、軒内外の外も、だんだんとのがだかが消えていく。

夜が明けていく時も同じなの。一人眠れない時は、洋酒を紅茶で薄めて飲みながら手紙を書く。夜が少しずつ明けてくると障子の雪見を少しあげて。外の光が変わっていくのを夢見心地で眺めてらるの。なじみのおせりやれいとした輪郭に變わる前に、お酒の濃度を高めて口に含み、布団にはいるの。

日本の家つていつもいつ時間帯のためにいつもれていて思える程度。私の偏見が少し。うめんなさい、わたし少し眠くなつてきたみたい」

僕は立ち上がり障子を開けた。
ガラス戸を明け外の庭にでる。
住人だけがまだ茶の間に座つたりまが
物思いにふけつてゐる。



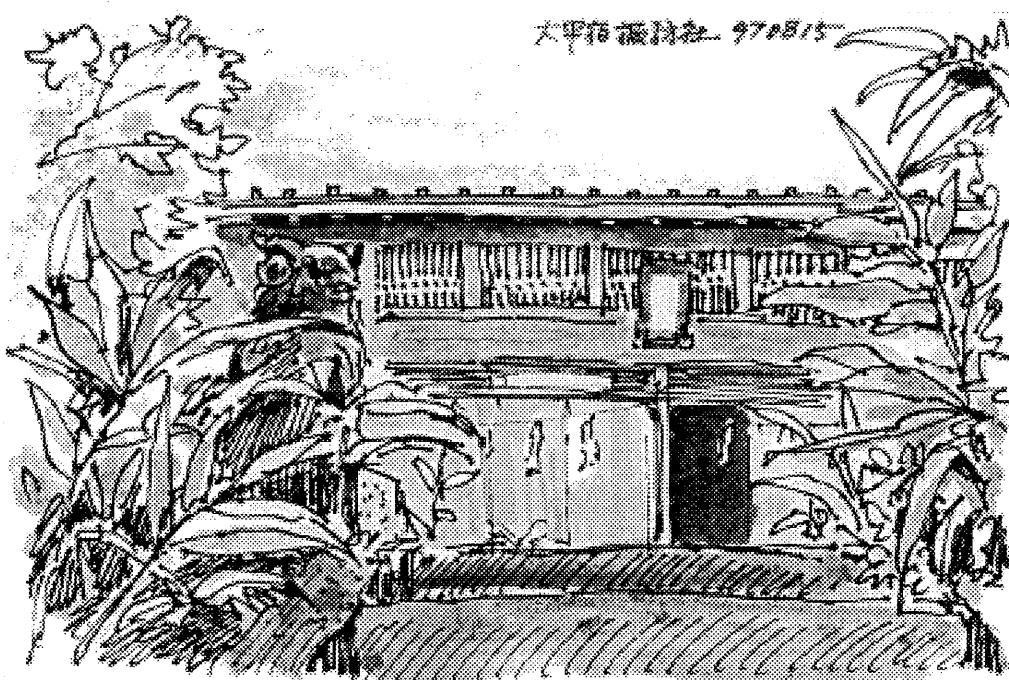
日影やんに図面を渡され、りくりく簡単な説明を受け翌日の朝、工事中の現場に連れて行かれました。日影やはんは私(り)の家について書いてほしゃと言いました。学生時代の課題のようだなと思ふやうで受けました。ただ私は建築の専門外でもあるし(ある建築家の秘書は3年つづめたりますが)文章も苦手なので、ずいぶん書を出すまでに時間がかかりました。

建築に対して興味がなくてはないのですが、じからかとじへじ石造建築のはうが好きです。今回の課題の対象となつた日影やんの作品は日本のお屋で、昔はいとういう家が日本にもあつたのだろうと、何になつなかつこ感には受けましたが、ドキドキ感やつらつた衝撃はありませんでした。

表現の方法についてじろじろじゆみましたが、りの家を建築的に解釈するのはやめて、わたしがりの家の住人を演じ、客を演じ、りの家に流れる時間も演するりして、りの家がわたらりじに見えてくるのではなうかと思ふ、りの家のうつなボハヤコとした文章を書かせていただきました。

(はやま わくへん 住み縛れボハヤコ)

大甲花旗特社 97/8/15



『立原道造全集』(角川書店)

—武基雄氏との遠い秋の日の対話から—

益子昇

「ここは庭が見えてきれいなんですよ」と、先生は小町通りのカフェに私を招いてくださった。店内の奥の大きなガラス窓の向こうに穏やかな秋の陽射しを受けたその中庭が見える。

小さなテーブルを前に私たちは並んで腰掛け、極楽寺の先生宅より話題についていた建築家・立原道造について、あるいは先生の建築観を再びうかがった。

武基雄。建築家・都市計画家。早稲田大学名誉教授。建築家である以前に一市民であるとの認識と、都市のアメニティ（快適性）を提唱し、鎌倉建築家クラブのメンバーとして古都鎌倉における町づくり運動にも活躍されておられる。

昭和12年（1937）4月、先生は早大・佐藤武夫教授の推薦で石本喜久治建築事務所へ勤務しはじめる。この年、東大より同期に入社してきたのが立原道造だった。

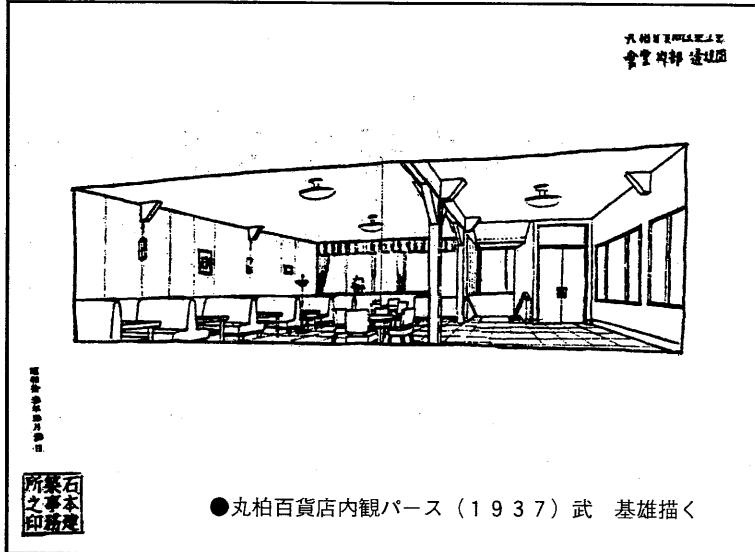
普通は入りましても最初はお茶汲み、そのうちせいぜい便所とか手洗いの設計、本当に居間を含んだちゃんとした設計をやらせるのは一年後だと言われてたものです。……そして最初にディテールをかかされるよりも、スケッチをやらされたのですね。ある意味ではそういうものを通じてぼくらは試されたのかもしれません。

『立原道造の思い出』—武基雄氏に聞く（1981）

「もし今の私に仕事に対する厳しさというようなものがあるとするなら、それは石本事務所にいた頃身に付けたものでしょう」とまで先生は仰っている。

朝九時までに出勤し、夕刻の退社時まで仕事中は煙草をふかすこともばかられ、各人黙々と図面に向かっていたと云う。「大学を出てそんなこともわからないのか」と先輩たちに詰られ、そんな機会が度重なるごとに新入社員である先生と彼・立原道造は親しみを増していったのかもしれない。

先生と彼は文字どおり机を並べて終日設計図に向かい、仕事を終えて事務所が銀座にあるにも関わらず彼等は一旦帰宅して着替えてから再び銀座で待ち合わせて画廊を覗いたり、食事をしたりして語り合ったと云う。彼から詩人としての雰囲気を感じるのはリラックスしたこの時からであり、仕事中のひたむきな姿には文学青年の面影はなかったというこの節度ある生活感覚に、私は胸が突かれる思いがした。



●丸柏百貨店内観バース（1937）武 基雄描く

口論になった時、彼が僕に浴びせた毒舌を今も覚えている。

「スペイン帰りのアメリカ人！」

そこで僕も言ってやった。

「スカンジナビアの乞食め！」

僕が南に生まれたことから、彼は僕がどこか軽薄な怠け者で、そして堕し易い性格のあるのを軽蔑していたが、そのくせゲーテではないが、南をあこがれていた。一方彼は北方的で、どことなく痩せこけてミゼラブルであった。

『ヒヤシンスの家』立原道造全集月報（1971）

コーヒーがはこばれると先生は「いくつ入れますか」と何気ない素振りで私にすすめてくださった。

私は私の日記帳の裏表紙に貼られた立原道造の卒業設計に含まれている美術館とコッテージの図を先生に示す。木造、外壁下見板張りの小さなコッテージを指差しながら、「こういうなんでもない小さな建物の中で営まれる人間の生活に立原はさまざまな思いをっていましたね。建築は住むためのもの、と。出会いと別れということも立原から教えられました。仕上がった図面を手渡してしまう時それはもうその建物との別れなんだ、いい仕事をしないとつまらない別れになってしまう。よく言ってましたよ」。

命ぜられた設計で先生(石本喜久治)の意図と違った自分のアイデアを出すと「こんな勝手なまねは許さん」ととがめられるので、「これは『バウフォルメン』に載っていただれそれの手法です」というと、先生は黙ってしまうので(私と立原は)時々この手を使ったものである。

『石本建築事務所五十年のあゆみ』(1977)

先生が「立原」と呼ばれるたびに私にも彼の存在感が身近に思われた。同時に先生の建築思考の中に立原道造の建築観が大きく作用していることも伝わってきた。

彼の死後先生は佐藤教授の招きで早大に戻られ、建築教育にも多大な業績を残された。由比ヶ浜と七里ヶ浜を遠望できる極楽寺の丘の先生宅には、退官された現在でも多くの学生達が訪ねて来るそうだ。

かつて先生は建築雑誌『a+u』(1978・11)に立原道造を「目に見えぬものを見るように」することができる数少ない建築家に成り得たとして、彼の全集を紹介された。

それは「住まいや建物、町並みや都市を、空間としてとらえると同時に、場として考える」アプローチにより、可能となり、「場」というものには必ず人間が登場しなければならない。したがってそこに自ら出来事が起り、物語が生まれ、そしてまたそれが劇性や詩性となってあらわれる」とされている。

あかりは窓にうばわれて

ただ道のみが白く

のちに『さまよひ』(暁と夕の詩)に結実される詩句を彼はある時先生に口づさんだと云う。「建築家にとっての窓は、採光や通風、開放と閉鎖、あるいは建具や仕切りといったような機能された空間としてとらえられる。デザインの場合は、窓と壁のプロポーションや、透明と不透明、光と影のコントラストなどが対象となる。だが立原にとっての窓は、夜のあかりなのである。あかりは窓にうばわれて……なんとイマジネイティブな窓であろう」。

武先生とのひととき、道造風に書くなら美しい午前の対話だった。



●石本先生山荘外観パース(1937)立原道造描く



第20回全国町並みゼミ村上大会に参加して

岡 部 知 子

ゼミも今年で20回だという、私は、第16回川越ゼミからの参加で4回目となった。「お元気でしたか?」と声を掛け合える仲間もできた。年に一度だけ合える七夕のような楽しみとなった会だ。

私の住む埼玉飯能から車で約一時間の川越にゼミが来た時、「近いから参加してみませんか?」と誘っていただいたのがきっかけだ。地元川越を始め電車で通り過ぎることはあっても、しっかりと訪れたことのないところばかりだったので、ゼミで聞く各地の活動報告なども大事な事だと思うが、せっかく来たんだからその地をしっかり知りたい、見たいと歩き廻るのが楽しみだった。

今年の開催地は新潟県北部の山形県に近い城下町村上市であった。城跡に残る石垣、若林家始めとする武家屋敷、町家の家並みなど歴史を感じさせる建物が点在しており、今の建物、生活がうまく共存している雰囲気を感じさせてくれた町だった。

又古いものに手を入れたり、移築したりと過去も大事にしながらも、今の人たちにも受け入れられる、町づくりにしようとしているがんばりが感じられる町でもあった。

このゼミも20回ということだが、20年前という高度経済成長期の都市再開発により古い物には目をくれず、都市化、工業化を目指し続けていた時代、しかし、各地で公害や自然破壊が問題になりだし、また各地域の象徴的な歴史的建造物も容赦なく取り壊されてきたことに対する危機感から住民が立ち上がり結集はじめたのがこのゼミの始まりだと聞き来ます。しかし、20年の年月がたったこの村上で感じたのは今ある歴史的建造物や町並みをいかして、これから町づくりをどうしていくかということに一生懸命になっているのが感じられ、そして行政や町並み関係者だけが私たちを歓迎してくれているのではなくて、市民も一体となって迎えてくれたということを痛感したということだ。懇親会でのアトラクションはつきものだが、会終了後外に出て驚いた。組み立てるのに3日も要すという「おしゃぎり」と呼ばれる山車が待っていてくれた。それも1台だけでなく5、6台あったと思うがそのおしゃぎりが大勢のひとに引き回され、その道端には屋台が並びお祭りの雰囲気が十分にかもしだされていた。町を歩けば剥がし忘れた「市民ボランティア募集」のポスターが目に入る。何をみても市民ががんばり行政と一体となってのゼミだと伺える。



どこへ行っても快く私たちを受け入れ歓迎してくれることは、もちろん優しい気持ちのお国柄ということもあるのだろうが、自分の住む地を知ってもらいたい、良くしていきたいという気持ちがあるからこそだと思う。一方的に行政側が何かを行っても市民側はそれに対して反対運動をしたり、どう対処していいのかわからず戸惑ったりすることがあるようだ。色々な方と接することが多い私だが、気持ち良く話し合え受け入れて下さる会又は方がたたちとは、同じ目標が持て、良い結果の得られることが多い。どちらか一方的に盛り上がっても、片方がしらけたり理解し合わなければ、それはそれなりのことになるはずだ。市民と行政が同じ気持ち、同じ目標で一体になれば、これからも素晴らしい町づくりとなっていくのではないだろうか、村上市もより良い町になっていくのではないか。と思えた今年のゼミでした。そんな思いの帰り道立ち寄った、昔は漁港で栄えたという塩谷を歩きまわっていると、たまたま覗きこんだ和菓子屋さんと味噌屋さんは、隣町の村上に来たにもかかわらず、はずし忘れた名札を見て「町並みゼミに来られたんですか。」と快く家の奥まで招きいれ、部屋を十分なまでも見せてください、お茶までも御馳走してくださった。数すくない参加だが、今回ほど地元の方々と係わりが持て、そして言い尽くせないほどお世話になったことはないのではないかと思う。それほどに大満足の村上ゼミだったが、一つ残念なのは参加する側の気持ちの持ち方だ。「段取りが悪い」「バスが時間通りに来ない」と平気で言う。この会に限らず他の集まりに参加してもそういう人がいるのは困ったことだが、開催する側、招く側は当然のことながら皆に喜んでもらいたい、楽しんでもらいたいと必死になって、準備に準備を重ねても営利目的の観光会社とは違い不備は付き物だ。こういう会の大変なことは主催した者だけではなく参加した一人ひとりが「一緒に会を盛り上げていくんだ」という気持ちになっていかなくてはいけないのでは、とおもったのも今回の感想の一つでした。

第20回記念大会

全国町並みゼミ村上大会

●と き 平成9年5月23日㈮・24日㈯・25日㈰

●と こ ろ 「越後村上・城下町」

主催 全国町並み保存連盟 第20回全国町並みゼミ村上大会実行委員会

ひとなみ・まちなみ
まちづくり

■生活文化同人会則

●生活文化同人の目的

1. われわれは、自らの建築（オリジナリティ）へと向かうアプローチ（方法論）について互いに研鑽し合う。
2. われわれは、生活文化という視点で各分野の伝統技法に学び、未来のモノづくりに活用する。
3. われわれは、旅を通して固有な地域環境に学び、新たな創作活動への契機とする。

●会員の種類

生活文化同人（以下同人）の会員は以下による。

1. 年会費
2. 会報購読会員
3. 定例会聴講会員

●総 会

年会員によって構成され、年1回以上開催することとする。世話人会においての年間の活動報告等を行うものとする。

●世話人会

世話人会は世話人によって構成され、本会運営に当たっての各種活動方針の決定機関とする。

●世 話 人

同人年会員の中から、積極的に提案、および行動することを原則として自薦、他薦によって自由に本会の運営に参加し、責任を持ち事務局に協力する。その任期は1月から12月の1年間とする。

●事 務 局

事務局は以下の構成による。各担当は世話人会で決定する。

- ・事務局
- ・会計
- ・機関誌編集局
- ・会報編集局

●同人の活動

- ・大平建築宿の開催（1回／年）

- ・定例会の開催（5回／年）
- ・機関誌の発行（1回／年）
- ・会報（生活文化）の発行（隔月）
- ・他ネットワークとの交流
- ・その他

●入会の手続きと会員の特典（平成8年）

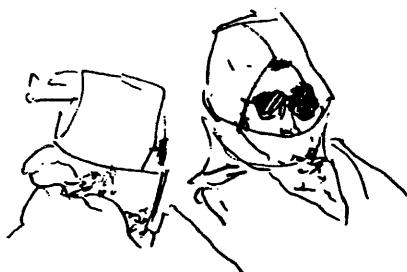
1. 年会員 7,000円：定例会聴講、機関誌・会報の購読
2. 会報購読会員 2,000円：会報の購読
3. 定例会聴講会員 聽講費：2,000円／回（学生割引 1,000円／回）

○年会員・会報購読会員は1月から12月までの年単位とし、中途入会の場合も上記とする。

○年会員は1家族ひとりで可とする。ただし、定例会聴講の場合は年会員でない家族は聴講費（学生割引と同等）を払うものとする。

○会費納入先 郵便局 総合口座 10010-54101181

生活文化同人代表 吉田 桂二





同人機関誌2号は8月中旬の大平建築宿までに発行する予定だったが、編集子の原稿依頼が散漫で、十分な内容で準備できなかった。

そんな折り、日影良孝氏の超人的ながんばりで、みるみるうちに内容が整い、おそまきながらもこうして97年内の発行に至った。

早く原稿を寄せていただいた方々に日影君同様深謝したい。

今、午前4時…。

〈M〉

—生活文化 第2号—

1997年8月発行

編集・発行 生活文化同人

発行所 同人機関誌編集局

(アカンサス建築工房内)

〒324 栃木県大田原市新富町2-3-34

T E L 0287-22-2288

F A X 0287-22-7977

印刷所 有限会社イリサワ商事印刷部

〒320 宇都宮市中央3-5-15